

法 康 其 と 實 經 冊

60-276

醫學士中村讓著

神經質及其療法

東京 敬文館藏版

45. 2. 5
丙 55

序

醫學士中村讓君は篤學の士にして精神神經病學の研鑽と其治療とに従事せらるゝこと多年、大に自得するところあり。近時『神經質と其療法』を著はし、以て一は學界に其所信を發表し、一は世人の惑疑を救はんとす。其説くところ平易にして然も懇切、讀者をして自ら此至難なる學理を解かしめ、又病者をして自ら其病苦を脱するの道を悟らしむ。是れ誠に天下萬人のために喜ぶところなり。敢て燕辭を呈す。

明治四十五年一月

醫學博士 三宅 鑛 一

神經質者、其の生活は、常に一種の苦痛に満ちて居る。それは、その神経が、外界の刺激に、過度に敏感であるからである。故に、彼等は、常に一種の不安定な状態に居る。彼等は、常に一種の苦痛に満ちて居る。それは、その神経が、外界の刺激に、過度に敏感であるからである。故に、彼等は、常に一種の不安定な状態に居る。

眺むる空に風たちて村雲離れ月は澄めり、美なり秋の
夜。神經質を譬ふればあの村雲に似たる哉、雲晴れ月
は空に高く、神經質去りて人の心や自ら澄まん。いで
小冊子願くば村雲騒ぐ此月の夜、空吹き渡るあの風の
如、概ち行て神經質者の憂悶を拂へ敢て留む所なり。

明治三十八年秋、月の初夜於して

著者

目次

緒言.....一

第一 證候.....四

一 原發性證候.....四

二 續發性證候.....四四

第二 原因.....六八

一 遺傳的素因.....六九

二 誘發的原因.....七七

三 解發的原因.....九一

第三 本體.....九四

第四 治法.....一〇七

一 日常生活.....一〇七

二 水治療法.....一三

Sprich niemals Schlechtes
von einem Menschen, wenn
du es nicht sicher weisst, und
weisst du es sicher, so frage
dich: Warum erzähle ich es?

(Lavalier)

- 三 空氣療法……………一四七
- 四 電氣療法……………一六〇
- 五 マッサージ……………一六三
- 六 作業遊戯、體操、附二木氏腹式呼吸、腹壓増進法……………一六七
- 七 食物、附肥養療法……………一九〇
- 八 滋養劑……………二二二
- 九 藥治療法……………二二一
- 十 不眠に對する特別治法……………二四二
- 十一 精神療法……………二六四
- 十二 二三の特殊療法……………二七〇

神經質と其療法

醫學士 中村讓 著

緒言

神經質とは一種精神上の特質にして其症狀や雜然紛然、敢て甚だ重からざれども煩纏悶着又自ら禁する能はざるもの、而して患ふる所の人々は日と共に多きを加へ、到る所吾人は此種の病者に接し、居として常に此の如き哀訴を避くべからず、誠なる哉文明は人心を不安の巷に行り、開化は心的熱鬧の導火線なりとは思ふに當今世人が臟躁病と呼び、神經衰弱と稱し、時に臟躁性神經衰弱の名を冠し、神經病の診斷をさへ下す所の患者は概ね伴しく所謂神經質を以て病とせるものにして、然も現れて此の如く症狀の様なるは、即其各個人性素質の同からざるに基因す

るものにして、疾病の本體に至りては何れも同様一質、敢て彼此なかるべきものなり。

人は神経質を以て偏に現代開發の化身なりとなす。夫れ或は然らん、然りと雖ども之を一度文籍に尋ねるに本症存在の既已に遠く往昔未開の時もありしや亦疑ふべからず、而して近代生活の煩劇が轉た本症の増加を致せるは固より争ふべからざる事實なり。

神経質の發現するは又年齢の長幼に係らざるなり、兒の生れて未だ母の懷に在るの時、已に本症の標徴を呈すること決して稀ならず、夫の短氣、躁急、興奮、刺戟性の如き諸徴、吾人は之を既に其嬰兒の舉色に溢るゝを見ること實際屢なり。一面老耄、年七十有餘に達し始めて本症の發來を致すこと亦是なしとすべからず。夫れ斯の如く、本症の來るや時に先天的なりと雖ども吾人は敢て其終生不治なるを憂ふべきものにあらず、時に老耄身神並び衰へし時に於てすと雖ども彼や亦敢て必ずしも彼が餘命を病苦の裡に送るの悲運を嘆つべきものにもあらず。蓋し神経質は

體質性疾病なり、然れども未だ絶對的不治なるべきものにあらず、其現るるや偶晚發的なりと雖ども然も全然此處に素地なく、誘因なくして然ること亦未だ是あるべからざるものなり。されば一人既已に此素地に生れたるものは一生を通じ且夕を分たす常に本症發來の危きに臨むものなり。偶憂愁卒然彼が心神を襲ひ彼が心的反抗力に勝るの時、彼が明智よく苦悶を排し激情を壓するに足らざるの時、端なくも發呈せらるるものは即ち渠れ雜然たる神経質諸證たるべきなり。然らば則ち生れて既に此の如き一人、よく此危を免れ、安く其生を保たんと欲せば果して如何に其身を其日々に處すべき、曰く他なし、莊子の所謂平易活潑なるを以て日常の心となさば足るべきのみ。寔や其氣にして平易ならば憂患遂に及ぶ能はず、其心にして活潑ならば邪氣遂に襲ふ能はず、蓋し此の如くにして一人神経質の擒となり、自悶自傷終に禁する能はざるに至らんと欲するも扱能はざるべきなり。思ふに是れ神経質豫防の大本にして又實に患者自治の總義たるべきものなり。若し夫れ不幸、一人右豫防の大法を

失し、諸證齊然一度至れるの時に於ては吾人治者亦當に與て力を是が排滅に盡さずんばあるべからざるなり。小冊子期する所畢竟一資を茲に給せんと欲するにあり、讀者幸にして由て聊か治法の實を擧ぐるを得ば著者や以て安んずべきなり。

以下乃ち章を追ふて先づ是が證候、原因、及び其本體より進んで治法の一般を序述せんとす。

第一 證候

神經質の證候は極めて繁雜なり、然れども之を大別すれば只二となさる、一は原發性證候にして即ち精神上の證候なり、二は續發性證候にして所謂吾人の精神機轉なる幾多觀念の生理的身體作能に影響して便ち發呈せられたるもの是なり。

一、原發性證候

疲勞性の増進。疲勞性の増進は神經質の特徴なり、故に神經質を思ふるものは常に精勵拮据よく久きを持する能はず、元と軟弱なる彼が頭腦はよく彼が努力に堪へ、よく彼が奮發に抗する能はず、取る所の精神作業にして少く其力に勝る時は則ち屈服疲憊復た暫時起つ能はざるに至る、斯の如きは恒久不斷事毎日の状況にして其豫め興奮の狀にあると將た安靜の境に留るとに關らざるなり。疲勞性に二あり、一は眞性疲勞にして實際精神力の消耗に關係し、疲勞計を以て測定し得るもの、他は假性に續發證候に歸すべきものなれば、吾人にして眞個の疲勞高を知らんと欲せば、常に一見現はるゝ所の全疲勞量より所謂假性疲勞を減せすんばあるべからず。今神經質者に於ては是等兩種の疲勞性相提へて進み、吾人をして愈彼が疲勞性の大なるに驚かしむるものなり。蓋し本證の患者を憐すは未だ常に甚大なるものにあらず、假令ば或る患者の如きは、漸く自ら己の病狀を悟り、漸く是が豫防の道を講じ、少く勉めてよむ悲ひ

常に彼が神経を過勞の域に齎さず、制御鞭撻宜きを得せしめつゝ、然も進んで飽くことなく、行ふて止むを知らず、以て其作業の全量に於て却て尋常健康者を凌ぐこと決して稀ならざるなり。有名なるツオラの如きダルウキンの如き、彼等は不幸、此疲勞性に侵され、日々三時間以上の業に堪ふる能はざりしと云ふと雖ども、其業績に至りては優に萬人の力を壓し、名を竹帛に垂れ、譽を青史に留めじにあらすや、是れ只己を知り己を御するの宜きを得、大切なる時間を大切に用ふるの實を積みし功に他ならず、彼れ精神健全を以て誇となすもの却て油斷自ら長じ、花に酔ひ月に歌ひ、惜むべき歳月を濫用しつゝ、遂に成すなきの裡に老い、老いて長恨遠きを悔ゆるの儂、夫れ何の面目あつてよく二氏の如きものに見ゆべき、將に只慚奮大に起つあるのみ。然れども神經質者の多くは此疲勞症の爲め痛く心を惱すものにして、此の如きはよく己の病的なるを諦め、よく其症状を支配するの力乏きに基因し、事に臨み業に當る毎に徒に競々唯疲勞の忽ち襲ひ來らんことを恐れ、偶其感覺の纒に徴すべ



きあらば彼が氣力は輒ち全く地に落ち、想像乗じ沸きて煩惱交わり、茲に甲斐なく自悶自傷の巷に迷ひ、以て極度の疲勞を覺ゆるを習とす。而して此際現るゝ所の疲勞中、所謂眞性疲勞なるものは誠に僅少輕微にして其大部は寧ろかの續發的假性疲勞に屬するものなり、斯の如く續發性疲勞の發生するは彼に先づ氣力の消退するに始まり、隨ふ所の空想の力に驅られて苦悶の域に進み、終に轉じて其堂に達するものにして、然も茲に禍累の源をなす所の無氣力は果して那邊より來るやを尋ぬるに、即是れ神經質者に固有なる寂寥悲哀的感觸の素地に生じ、現はれて一定の觀念となり、『吾が力途に及ばず、努むるも甲斐なく、勉めざるは苦々し』と云ふが如き一觀想、平く云はゞ『とても駄目』てふ一ツの考の化身たるに過ぎざるなり。されば吾人が今患者を其疲憊の苦境に濟ふの道は正に此一無氣力を除くにあるのみ。而して此無氣力なるもの又如何にしてかよく排すべき、其肅す所の素地を掃むるに若かざるなり、所謂落莫悲哀の感觸を拭ひ去りて逸興愉樂の境に導くにあるなり。要するに悶惱痛

楚の感想の、延て遠く疲勞感覺を續發的に招來すること常なるに反し、歡喜悅興は實に此種の疲勞に對する有効唯一の解毒素たるものなればなり。

悲哀性の亢進。神經質者は何等の原因もなく悲哀に沈み痛傷に泣く、『何を苦んで吾心のみ斯くは爽ならざる』謂もなきに如何なれば寂しき事の斯く絶間なき』とは彼等が口々の痛訴なり。誠に其言の如く彼等は其悲哀の由て來る所を知らず、既に其由來を知らざるが故に亦よく豫め之を防歇するの道を立つること能はず、彼等は猶ほ其本體を解せず、既に其本體を解する能はざるが故に亦よく之を闡明解諦するの道を知らず、徒に自ら苦み自ら痛み、生涯遠き前途を望みては轉た心を行方の暗愴たるに碎き、悲哀の極、不興の頂に達し、遂に自ら禁する能はざるに至るが常なり、蓋し本證の由て來るは心界一圓の疲憊深甚なるに基く、即ち疲勞衰弱せる患者の神經系統は既に昔日の如く敏活巧妙よく外來無限の印象を享受すること能はず、云は、益其大切の食に飢え、其缺くべから

ざる水に渴し、力盡き精亡びて元氣愈消沈せるに依るものなり、喩ふれば變調せる樂器の如く、よし如何なる名手の之を彈奏すとも、發する所は亂調常に聞くに堪へざるに似たり。器は神經にして名手は外來刺戟なり。されば之を濟ふの術は外來整調の策にあらずして病者一己の心を治むるにあり、而して吾人は患者大方の憂ふる如く、彼が變廢せる精神の終に救ふ能はざるを慮るものにあらず、適應せる精神的療法により、其病める神經系統を安穩靜寧の狀態に致すを得ば、如何ばかり深遠痛劇なる悲哀の感想と雖ども、よく得て一掃消抹するの難からざるを信するものなり。

苦悶。神經質者は何故に苦悶するや、自ら己を解すること能はざるを以てなり、彼等は暗晦自ら惑ひ、同じ『我』を以て然も嚮の『我』と思爲すること能はず、洵や心界一圓變幻轉化して宛然荒誕思議すべからざるの迷路に彷徨するが如く、愈進んで奇悲怪徑愈繁く、遂に極まる所なくして將た出る所を知らず、爲すべきの能を以てして然も爲すべきの道

を得る能はず、此處に至りて帳然大息『オ、如何にせば吾は此果しもなき迷巷を脱し得べき』オ、如何なれば此身獨り此解くべからざる絆に惱まされ、扱中々に弱りも果てず年月久しく苦をのみ忍ぶの悲境に沈める』とは彼等が病める心の叫なり。實に『如何にせば!』『如何なれば!』此二問こそ彼等が心の淵に溺き、而して彼等が終に解くこと能はざる難題苦悶たるものなれ。

蓋し苦悶は解し難き疑團に對し、未知未聞なる事物に向ひて通常發起するところにして神經質者苦悶の淵源も亦正に此處に存するものなり、吾人は本症患者苦悶の状況を見る毎に吾人が嘗て聞きし可笑き一例を追想して止む能はざるなり。幼女何子年甫めて三歳、彼が誕生の某の日、彼が父は彼が當日の祝として彼に玩弄張子の驢馬を與へぬ、驢は鳥渡せる仕掛により人手の觸るゝと共に無骨活潑に其首を搖しぬ、何子初め驢の靜に立つを見ては痛く之を鐘歡愛撫したりしが、一日捕へて戯れ遊ばんとするや、其無骨なる、其活潑なる驢首の運動は忽ち盛に起りぬ。何

子驚き且恐れ慄然起つて泣くゝ逃れ去れり。其父乃ち何子を招き驢の敢て恐るべきものならざるを説き、其元と玩具にして張子細工なるを示し、首こそ動搖すれ決して害を吾等に加ふべきものにあらざるを教へたれども、何子中々に聞き入るゝ様もなく、益恐れ縮みて更に之を近くるを肯せず、此に於て彼が父は驢を提げて其頭首を抜き、其内部を抜きて一切の構造、装置を示すや、何子莞爾として便ち驢を懐き、鍾愛前日に倍し、朝暮身邊を離さざるに至れりとぞ、此の如きは洵に單純なる一例に過ぎざれども深く味は、又妙趣捨つべからざるものあるを覺ゆ、現に吾人の如きは此生きたる小教訓により苦悶に泣き疑惑に沈溺せる神經質者を救済せること其幾度なりしかを知らざるなり。實に神經質者の如き、彼等の懊悶痛訴するや極まる所なしと雖ども、就て委曲に其來る所を尋ぬれば、あはれ何子が驢首の活搖に駭きし程の理由すら遂に求むること能はざるなり。

予近時此種苦悶の掄となれるいと憐なる一人を見ぬ、彼年三十一、解

岡の人、當明治四十四年四月某日、偶一友と争ひて其揚句友に前頭部を打たれ爲に劇しき一團の胸内苦悶を惹起せるものなりけり。而して所謂彼が苦悶の原動たりしものは實に左の如き一觀念にてありき、曰く「幼時聞けるが如く頭部の外傷は頓て一人の智能を滅殺し乃至一人を白癡者たらしむるに足るものなりといへば今予此の如く不測の一打を予が頭上に受けし以上、予が智能は頓て滅殺せられ、乃至予は遂に白癡者たるべし」と寔に斯る疑惑的恐怖觀念の一度彼が心界に發するや悶風一陣端なく彼が胸中に起りて苦惱到底禁すること能はず、乃ち隣里近郷の名醫は勿論、遠く東都數名の醫家を歴訪して只管掃除除苦の一事を哀請せしかど不幸少しも其甲斐なかりしより遂に進んで興激悶躁の狀に入り、狂奔暴動、身を噛み指を斷ち死を以て其苦を去らんことをすら且圖るに至れり、蓋し此の如きもの亦只彼が懐ける一疑惑觀念の結果にして思へば寧ろ憫むべきの極みなり。

抑人の心なるものは常に明るき鏡の如かるべきものなり、鏡澄み明る



ければ聊か調はざる姿なりと雖ども映れる影はさすがに清く扱見苦しからざるもの、若し夫れ鏡面一圓かき曇れるの前に向ふに當りては、容姿の美、扮装の艶甚だ愛すべきものありと雖ども争て其影の輝妍美事なるを得べき、心の鏡亦然り、一度陰暗曇り渡る時は映する所の萬象、其影悉く昏濁、復た見るに忍びざるべし、神經質者の心は正に曇りて此鏡の如くなるものなり。猶喻ふれば健者の心、似たりや風靜なる大海の面波浪騒ぎ立たず、明月浮び、濁氣漲り渡りて一望穩なるの處、實に心界安寧の姿にして人の須く保持せざるべからざる所なり。若し夫れ所謂感想の海、思考の淵なる人の心、病みて暗味混濁するの時に當りてや、漂ふ所の感澹亦焉ぞ平穩寧靜なるべき、浮ぶ所の想浪亦奈何ぞ清澄律如たるを得べき、必ずや濁潮相推し、亂浪相激し、風望慘憺人をして心騒ぎ身慄かしむるもの、當に是れ神經質者の心なり。重ねて比べんか、神經質者の世を見るや恰も悲窓を通じて萬物を望むが如く、憂鏡に照して景物を眺むるが如く、物として悲哀ならざるなく、事として憂悶ならざる

なし、誠に是れ神經質者の眼界なり。憐むべし此の如き心を以て心となし、此の如き眼界を以て風望となすもの、其心に煩惱溢れ、其思に悲憂迷るも亦宜なり、恕すべし此の如きの人、其暗憊たる感情一面の地上に胚胎する所の觀念萌芽の、等く憂悶痛楚の色を帯び相率て益患者の心を亂し、顧みて來し跡のあさましきを思へば行く方悠々たる前途の愈悲慘暗黒なるに落膽し、自ら信するの力を缺き、自ら立つの勇を失ふに至るや當然なり。

夫れしかく神經質者の心界は一見さながら阿修羅の悲の如く、實に慘烈を極め悲劇を極むるもの、刈くなりと雖とも然も立ち入りて是が真相を窺ひ、徐に其由て來る所を求むる時は苦情一切只假染の迷夢たるに過ぎず、之を救ふの道亦敢て難しとなすに足らず、要は患者の惑を解くにあり、惑既に解かるれば苦悶自ら去り、心の鏡隨て澄み、四望亦漸く長閑なるに至るべし。元と惑・苦悶を生じ、苦悶・心の曇りを致し、心の曇・延いて眼界の暗濁を來し、茲に所謂神經質者の特色を標示するに至りしも

のなればなり、此時に當り患者を坦々たる平道の安きに導き、之を復活再生の喜に齎し得るものは單り醫家あるのみ、醫家にあらずして誰か彼の心狀を清め、彼の疑惑を解き得るものあらんや。世の神經質を患ふるもの、今より後自問懷疑・甲斐なく其迷路に彷徨すること勿れ、速に來りて一心を醫家に委ね、信頼瑣して危むことなくんば、庶幾くば行て前途の艱難を覺るす、進んで頓工望郷に達することを得べけん。見よ富嶽を越え、アルプスを攀づるの人を、行く々々懸崖を望み、絶壁を仰がば險坂歩愈危くして恐怖愈迫り、遂に進退並び極まるに至るなるべし、如かず一意導者の跡を踏み、専心導者の繩に寄り、力を其命繩に輯めて敢て他念なきの時に於ては、さしも險惡なる急坂も何時しか登り盡されて然も左程の疲勞をさへ覺えざるべし、神經質を治せんと欲するもの、亦此登山者を以て自ら分となし、醫に對すること猶ほ先立に従ふか如く、一心不亂唯治法の一々を守らば、其効果は常に必ず著甚なるを見るべきなり。忘るゝ勿れ、信用は苦悶を無みし、不信は疑惑を増すものなることを、

忘るゝ勿れ、先立に従ふの念愈深きものは其登ること愈速に、醫を信ずること愈厚きものは苦悶を拂ひ、疑惑を解くこと愈容易なることを。疲勞性の増進と苦悶とは相與して神經質者を不管性ならしめ、無意志状態たらしむ。但し此二證は原發證候たらんよりは寧ろ精神上一定障礙の結果として現はるゝものなり、夫れ意志は重要なる一精神發動にして又實に神妙不可思議なる機轉なり、其發して單獨固有の力となるや、決して常に始より獨立單進するものにあらずして精神領内縱横無盡なる幾多の精神動力より合成せらるゝものなり。試に思へ、心内一點此處に一度一定精神機轉の發起するあるや、輒ち此一點を中心として右横左横各其特有なる感動の鼓吹に應じ、進んで相當なる意志運動たらんと欲するものなり。斯の如くにして單一起點を出て、各遠心性に其向ふ所を求むる數多の精神動力は、所謂力學の法則により遂に必ず一箇單獨の合成力をなし、發して眞個現實の意志運動となるものなり。精神上全く健全なる一人に於て意志運動の發呈せらるゝは常に此の法則に依るものにして

然も其發するや敏活に、發して且完全強勢なるものなり。若し夫れ神經質者の精神にして苦悶疲勞並び深甚なるの時に當りては假令心内一定精神機轉の發現することありと雖とも、苦悶により、疲勞性により壓殺障礙せられて活氣太だ挫かれ、隨て諸方應じ發する所の感動も其勢全く消滅して、爲に構成せらるゝ合成力も自ら薄弱不振、發して較著なる意志運動となること能はず。夫れ斯の如く神經質者の精神動力は既に勃興活轉するの勢を持せず、萬感振はず、千思潛み、心界落莫荒涼の巷と化し、希望の光、感想の花、望めども浮ばず、求むれども笑はず、索然として暗夜に名所を探るが如し、然り而して彼等の終に然る所以のものは固より爲さざるにあらずして全然能はざるもの、其希望、其感想共に亡失せるにはあらずして只發現表出する能はざるのみ、入つて深く彼等の望を探らば健氣康心は概ね彼等が希ふ所にして然も獨立獨行此境に達するは斷じて彼等の及ばざる所なり。吾人は屢聞く、此種の患者に向ひ、迫るが如く、咎むるが如く「卿よ何故に卿は早く望を立て思を勵まざら

りしど』と告ぐるものあるを。洵に是れ一人・良意善心の反響なりと云ふと雖ども聞く者、其人を得ざれば却て只一句の有害非言となり、益導て人を無氣力の深きに擠し、云ふて己の知見淺きを標榜し、過者及ばざるに等き謗を受くるのみ。宜なる哉、患者の如きは常に好んで望を立て思を勵さんと欲して然も能はざるもの、今受くるに『何故に?』の責を以てす、抑業已に其『何故』なるかを知らば又胡爲ぞ惑はん、將た胡爲ぞ悶へん、惑はず悶へずんば望自ら發し、思隨て進まん、望の發せざる、思の進まざるは即ち其遂に『何故』なるかを解する能はざるを以てなり、而して其遂に『何故』なるかを解する能はざるを以て彼が氣力全たく消沈するに至りしものなり。故に既に意志の薄弱を以て主徴となせる神經質者に向ひ、説くに此の如きの言を以てするは猶ほ彼に迫りて『卿の今病となすは所謂心氣病にして只想像の産物なり』と語るが如く、其患者の心を損ふの重き、却て彼が病苦を是認し、是に同情加勢するの害に勝るあるを見るものなり。世の神經質者を濟ふ者よ、冀くば彼が證候の末

を咎めずして其本源に溯り、苦悶を掃ひ、疲勞を慰し、慰するに親切を以てし掃ふに順序を以てしなば、さしもの盤根、さしもの錯節と雖とも便ち排滅除去せられ、屈伏潜隠せる幾多の精神動力も齋然再び起つて各活轉序立し、相埃つて所謂完全強健なる合成力をなし、進んで確實なる意志運動となるに至るべきものなり。
興奮性の亢進 亦重要なる神經質證候の一にして惡果實に是に隨ひ、頗る多く是より生ず、患者の感應、時に全く不興悲哀的なるは是が爲、激越興發、自ら害ひ、周圍親近亦併せ毀傷せらるゝも是が爲なり。蓋し載發悶躁、好んで四圍外界に混入すると興奮性の如く然く輕易なるもの未だこれあらざるなり。人は元より多少推感性にして所謂外界に影響せらるゝの性を有するものなり。而して其殊に容易く影響せらるゝものは情界一面の働にして彼幼兒が人の泣くを見、人の笑ふを見て共に泣き共に笑ふが如きは全く此推感性あるに因るものなり、長じて叡智漸く進み感動抑制の力亦自ら盛なるに及びては、推感性態向も隨て控制抑壓せら

れ、固より幼童小女の如くしかく被影響性ならざるに至るものなり。只夫れ神經質者の感情界たる、其外界の影響に反應すること極めて輕易に、其自家推感の發動すること極めて強劇に、吾人をして轉た小童幼女の輕動性なる感情界を見るの思をなさしむるものなり。

抑變轉常なき無限の印象に對し精神一經擧てよく反應活動するは一に健全なる興奮性の資にして然も吾人は之を自然に享受し、之を本來の性となし、事に應じ時に臨みて聖御宜きに從ひ以て宇宙の真相を觀じ、以て萬象の妙趣を味ひ、天然の美・由て表はれ、生存の樂・由て自ら生ずるに至るものなり。興奮性なるもの夫れ此の如く巧機樞要なる精神官能なれば、其病んで常態を逸するの場合に於ては、生ずる所の禍累亦隨て重く且遠く精神機轉の全般に及ぶものなり。神經質者は實に此官能の病的なるを以て證徴となすものなれば、彼が眼に映する萬物、彼が耳に達する風響の争てか發時の美を放ち、前日の興を齎すことあらんや、豈其管に美を放つなく、興を齎すなきのみならず、耳目の接する所、舌身の

觸るゝ所、一概不快不揚ならざるなく、延て幾多の餘殃を自他各班に及ぼすこと多きは周く人の知る所なり。されば斯る一人を以て家族の一口となす所の家庭は到底團圓の光を望む能はず、洋々たる一家の幸福、亦固より擲するに由なく、喩ふれば湖上風なく、水面鏡の如き所、落葉一片飛んで其火に落るの時、環波移り越えて萬壘絶えず、湖而久く再び平ならざるに似たり。況んや一家の中、斯の如きもの、相持して行住坐臥するの時に當りては、二者遂に共に兩平なる能はず、相闘ぎて互に其證候の増悪を致すのみ、猶且況んや斯る患者を生ずる所の家庭は由來安寧圓滿なる能はず、各自刺戟性にして熱情的なるを常とするが故に、一變生じて全口齊く之に應じ、騷然亂れ起ちて各相打ち、互に奮邁馳背して殆んど寧日なきの不幸を致すべく、然も右の如きは、痛むべし吾人の又決して稀に見る所にあらざるなり。今に於て追想すツピンゲンが記載せる此種二人の姉妹、共に神經質にして、共に興奮性の亢進を以て主徴となせるもの、既に戸を排するの音に驚き、常に小事に争ひて互に相激し、

激して益證候の増悪を致し、相率めて愈興奮の強きに進めるをツ氏乃ち其一人を招き備に彼等が心狀の常ならざるを説き、論すに所謂印象感受性の互に昂激せるが爲、自ら相闘ぐの極に至りしものなれば、今より後、居常努めて活淡にして猶よく克己自制の念を鼓し、よく感情的餘蘖を排すべきを以てせしかば、彼釋然答をなして曰く「善い哉言や、事理に於て誠に然り、今我等の果して此の如きは元より其事理を解する能はざりしに基く、我等にして業已に遠く此處に見る所ありたらんには必ずや起居惑はず言談誤らず、其心自ら爽に、其身自ら安く、行ふて輕躁浮薄ならず、云ふて亦粗暴不遜なることなかりけむ。悲い哉、我等が生長せる家庭、我等を養育愛護せる一族の、擧げて既に熱情的過激性にして、未だ嘗て理を以て事を辨じ道を以て行を處せることなく、徒に感動の奴隸となり、甲斐なく熱情に擒にせられ、口に委して言を弄し、四肢に任じて行を擅にし、因習漸く癖となり餘傲汎く子女婢僕に及び、以て我等の今日を致せるものなり」と、洵に鑑むべき證例なりと謂つべし、世に其

兒を溺愛する所の慈母よ、兒の一叫、兒の一笑、輒ち驚き輒ち喜び、要事を擲ち、至事をすら且措いて倉皇其傍に馳するが如き、子を思ふの至情、美は誠に美なりと雖とも然も其子の將來を慮り、眞に能く子を愛するもの、敢てなさいる所なり。凡そ子を養ふもの、遠く其一生の行路を思ひ、之を其生存競争の艱苦に堪へ得るの安きに致さんと欲せば、宜く既に搖籃の裡、乳母の懷に眠るの時より、一向淡泊洒落の風に習はしめ、以て自ら彼小兒の美性を養成するに勉めずんばあるべからず、徒に目前過熱の愛に沈溺して身神只兒の聲色に支配せられ、隨て又自ら刺戟性興奮性となり、延て却て悪影響を愛兒に及ぼすの過てる、斷じて取べからざる所なり、夫れ人の母たるもの、果してよく此處に見るあり、此處に信する所あり、戦情自ら制し慈愛宜きに御するを得なば、爾來日と共に繁り合ひし神経質の禍蘖是れより漸く減退消滅して、世上萬人の心、頓て又晏然太平の光を望み得るに至らん。痛むべし、此の如き眞個慈愛の心を以て心となすもの誠に尠く、暗柔偏に情愛の淵に沈淪して端なく其

子を過ち、相率ゐて一家を亂すもの比々皆是なるは吾人が見つゝ遂に黙すべからざる所なり。

抑興奮性の亢進は機能的障礙の著甚なるものにして其以ゆる所の續發證候は擧て一群の生理的障礙に屬し、或は現はれて嘔吐となり、時には心悸動の抑制を致し、所謂反射作用の全系を喚起するに足るものなり、吾人が聞ける一人幼より神経質なるもの嘗て其友なる某醫に告げて曰く、『友よ卿若し予に一擲の同情あらば請ふ予を予が一種不快なる病癩より救はれよ。予若し食卓に臨み、半にして凶報非聞に接するや、忽焉嘔氣を催して吐排禁する能はず、然も斯の如きは偶然稀有の事にあらずして、悲報到る毎に接て必ず恒發し、其予が身神を攪亂すること實に來報の悲傷に倍蓰するなり。友よ冀くば卿が仁術を盡して予を此苦境に救はれよ、敢て望む所なり』と。僅に一例證に過ぎざれども然も本證の續發的果藥の、如何に不快不安なるは遠く推すに足るべきなり。

世に所謂感情家なるものは概ね甚だ推感性にして容易く周囲の事態に

影響せらるゝ者なり、而して是れ却て彼が心界一面に於ける樞要なる安然猶とも見做され、彼をよく窮境極期に濟ひて寧ろ缺くべからざる一證なりとせらるべきものなり。蓋し興奮發せざる瞬間に於ては假令常人なりと雖とも其心舉て一定目前の印象に集注せられ、魂此處に凝り、思此處に結ばれて又事物の真相を觀察し之を合理的に解決すること能はざるに至るものなり。されば一度此興奮性の極度に達するの時に當りては巧言も果た令色も業已に彼が心を和ぐるに由なしと雖とも興奮漸く退きて思考漸く並び起ち、偏せず俛せず復び其平均を保つに及びては、合理的思案にも有道的感情にも導き得て敢て甚だ難らざるものなり。況んや甚だ推感性なる神経質者に於てをや、彼等は既に推感性なり、推感性なるの故を以て醫家の一顰一笑は輒ち以て患者の喜戚を左右するに足るものなり。此に於て吾人醫家たるもの、一度神経質者の前に立つや、常に温良懇切にして苟も輕薄倨傲なるなく、一意只彼が暗柔なる心を慰するに力めずんばあるべからず。斯の如くんば假令興奮稍旺なる時と雖ども

猶よく之を緩和鎮伏するを得るものなり、況んや激情漸く收まり、思考
 整調相擁して再び平靜均等の勢を保つの際に達するや、是れ患者復活の
 期再び到れるものにして、乗じて彼に自制自治の力を添へ、進んで事物
 を有理的に考察するの能を賦與するの好機にして、吾人が治法を施すの
 秋亦實に此に存するものなり。されば醫家若し此機を逸せず、親切常に
 育化の任に當らば、證徴如何許り激甚なりと雖とも争てか遂に治し去る
 を得べからざる。

神經質者は又極めて刺戟性なり。然も其發呈せらるゝや、處によりて強
 弱を異にし、時に隨ひて緩急一様ならず、入つて横暴激し易きもの、出
 て一變溫和なるは即ち此が爲なり。彼れ家人に對し親戚に對し乃至は
 昵近辱知に對し、當り散し、怒り飛ばすもの、去つて外界未知の間に立
 つや、翻然靜謐全く別人の如く然るは、即ち是れ神經質者の刺戟性を標
 榜せるものにして、自制の力、勘忍の能未だ周く至らざるに基因するも
 のなり。他人の前に出て、溫藉掬すべきは此處に自制の力強むにより、

家庭の内、親近の間、知圈狭き所に於て兎角刺戟性なるは此處に勘忍の
 能弱むによるに他ならざるべし。見よ卓に臨んで興激、器皿を投じ食床
 を覆し起つて夫に抗するの妻あるを、見よ兄弟牆に闘ぎ親交相毀つの不
 糾を演ずるもの世に其比尠からざるを、威な是れ刺戟性の奴隸となり、
 瞑瞶我を忘れて自治の能自ら消滅せるの結果にして醒めて釋然己に歸ら
 ば悔恨惜く能はず過舉拭ひ難く、得る所の疲勞は失ふ所の信睦と相埃つ
 て轉た益慣悟の情を鼓するものなり。蓋し此一證は一人只自制の機を逸
 するに發し未だ甚だ深甚なる證候となすべからず、其來るや乍ち旺盛暴
 發すれども其去るや亦輕滑卒急にして、乍ち元の我に復り、理性道を照
 して願みて嗔然自ら其愚を耻づるもの比々皆是なり。

酒精の神經質者に害あるは一般世人の認むる所、彼酒を仰て輒ち酔ひ
 酔に乗じて輒ち怒る、怒り易きは彼に刺戟性の増進せるが爲、酔ひ易き
 は彼が飲酒不堪性なるが爲なり、而して彼がしかく飲酒不堪性なるは彼
 が酒精に中毒せらるゝの容易なるによるものなり、人は故に云ふ、酒は

神經質者に害ありと、抑又其害の及ぶ所は彼が心界限なかるべしと雖ども然も一局刺戟性の占むる所、侵されて愈深く且速なるもの、如し、激し易く、争ひ易きは蓋し是が爲なり。夫れ此の如く神經質と酒精とは兩者全く相容れざるものなるが故に人は大方神經質者に酒を禁じ、彼が身に對しては殊に酒精の侵害甚だ恐るべきを説けども吾人を以て之を見るに爾來酒を樂しみ來れる神經質者に向ひ絶對兩斷的に禁酒の命を下すが如きは、其求むる所餘りに酷にして然も其得る所之に稱ふ能はざるなきやを疑ふものなり。近時一人の神經質者は來りて哀を吾人に乞ひ、曰く『予元と酒を嗜む、健康よつて保たれ、憂慮よつて忘られ、酒あり以て人生の快を味ふを得たりしもの、不幸病の故を以て爾來數月斷然酒を絶たれ、食思是より衰へ、榮養漸く良しからず、而して憂悶苦慮日と共に繁きを加ふるに至れり。冀くは卿夫れ予に晚酌只一杯の美酒を許せ敢て多きを食るをなさざるべし』と、吾人乃ち彼が請を容れ、夕毎に美酒一盞を許せしかば彼が食思は忽ち進み、彼が心情再び爽快なるに至れる

を見ぬ。是れ酒を禁じて却て證候の増悪を來し、酒を進めて寧ろ病狀の輕快を來せるものにして、是に鑑るも吾人は一般禁酒の問題を以て之を直に神經質者に適用する能はざるを知るものなり。

叙し來りて茲に至り吾人は漸く神經質の精神上證候を盡せるものなり、即曰く、疲勞性 || 悲哀性 || 興奮性 || 刺戟性の増進及び苦悶是なり。人或は推感性を以て又神經質の原發性一證となすものあれども是れ吾人が未だ直に首肯する能はざる所なり、何となれば推感性なるもの、現はれて其神經質者に較著なるが如く亦普通尋常の人に於ても作しく明に發呈せらるゝものなればなり。實際世には更に神經質ならずして甚だ推感性なるものあり、又僅に推感性にして甚だ神經質なる人もあり、兎や角此一證は特別固有なる神經質の原發證候とは遂に見る能はざるもの、如し。ペルンハイム云はずや、推感性は各人普有の一性狀にして吾人は之を父祖に享け、父祖は心的遺産の一部として之を吾人に紹ぎ、恰も夫れ感受性の如く、恰も神経系統一般の各機能の如く、人之を直に子孫に傳ふる

ものにして、然も其官能に彼此あるは亦他の一般機能に強弱あるが如く、各個人性の異なるに連れ固より同等一様なる能はざるものなりと、是れ吾人の亦齊く信ずる所なり。只神經質者に於て特に吾人の意を引くものは自家推感性の増進せるにあり、蓋し自家推感性も亦人の普く懐く所なれども其殊に増進して證據の顯著なるをなすは實に神經質者に於て吾人がよく見る所なり。彼等は自ら己を推して益憂界苦境に行り、自ら進んで愈暗昧なる思考界に入る、元より進むを欲し推すを求めて然るものにはあらず、憐むべし一心五體は脆くも己の産出せる一定觀念の擒となり愈慮りて煩惱愈深く、乃ち苦慮を拉して之を拂はんとすれども力又既に及ばず、然も奮て其苦行を脱せんと欲して道既に盡き、徒に輾轉只迷路に彷徨するもの、正に是れ自家推感の強に捕はれ悶燥惑迷する神經質者の状態なり。

吾人は此種病者の一人を亦ツピンケンの證據中に見ぬ。病者は即ちツ氏が友の妻にてありけり、婦や時に何等の故もなく憂閉鬱結、歔歔流涕頻

に一身の不遇を嘆じ、時には憤憤激發夫を責め舅姑と争ひ、事少く意に協はざれば即ち怫然席を拂ひて去り、物遇思に添はざれば則ち鞞然戸を排して己の居に屏き、是に論すに理を以てするも早や堅く耳を塞ぎて敢て聴くをさへ肯せず、之を慰するに情を以てするも其心既に拗振忒背ひて遂に人言を容るゝの量なく、便ち放逸人絶て顧みざれば不興不平愈收むる能はず、喃喃獨語、思益亂れ其身卒に措くに處なく、號泣悶越所謂泣瘧の發作に陥り、一家爲に騷然、親近又傳へ愛へ一門遂に平なる能はざるの不幸を見るに至れり。洵に現るゝ所の證據、此の如く紛拏混亂すれども其由て來る所を尋ねれば齊く是れ一圓神經質素地の産する所に於て、婦はあはれ病魔の爲に蹂躪せられ、只其命するがまゝにもの云ひ、其示すがまゝに行ひ、行ふて固より病的ならざる能はず、云つて自ら不次なるを免れず、茲に非禮となり、粗暴となり、家人の怒を促し、夫の憂を増すに至れるのみ、其心事寧ろ憐むべかりしなり。夫も亦妻が心狀の常ならざるを知り彼が非行の大方は恕して之を看過したりしが其餘り

に昂激憤排するの時に當りては偶論すに理を以てし、彼よく自制の念、克己の力を以て夙に己の悶惱を壓倒せずんばあるべからざるを説きしこともこれありしが、妻は固より斯る言説には耳をだも藉さず、却て益激發、聲を勵して曰く『自制可なり、克己亦可なり、而して其己に克ち、自ら制すべきものは果して誰ぞ抑吾をして今斯の如くならしめたるものは皆卿が一味なり、吾が前日を知らずや、當時の吾を思はずや、吾嫁して此家の人となりし當時、吾は決して今の吾の如からざりしなり、吾は一にして其吾の處と共に移れりとせば咎むべきは吾にあらざりして處なるにあらずや、處既に咎むべくんば、自ら克ち自ら制すべきものは亦吾にあらずして正に其處たるべし、克己可なり、自制亦可なり、願くば適に制すべく、克つべきものをして速に其實を現せしめよ』と、言誠に然り、彼ツ氏が友の妻なるもの、眞に悉く咎むべく責むべきものにてはあらざりき、彼嫁して夫が家の一人となりし頃、彼は實に當時の彼の如くはあらざりき、且其後と雖ども固より其夫を愛せず、其舅姑を敬せざりしに

あらず、固より貞操を忘れ、不孝の行に出でたるにあらず、然も妄言非行を敢てせり、只夫れ彼が當時病めるを以てなりけり、彼が心に病ありしを以てなりけり。憫むべし彼が性行の一轉は全く誤れる一觀念に基因せるものにして、誠や彼が云へる如く彼は彼の一家の爲に神經質となり既に再び濟ふべからざるの心狀となり終りたれば其言行の尋常なる能はざるも宜、然も彼をして此の如くならしめたるものは實に彼が一家なれば其一家に對する彼が恨の盡くるなきも亦宜なりとの觀念は端なくも彼が頭腦に印象して遂に彼を驅つて今の彼の如からしめたるなりけり。ツ氏既に之を看破せり、而して一日親く彼と語るの好機を得ければ、便ち一面には懇切彼が苦痛を慰め、一面には具に彼が心狀を分析して専ら力を彼が惑を解くに盡し、乃ち説をなして彼が今此の如く神經質たる所以の理を明にし、其由來眞個現實的疾患にあらずして唯彼が假想虚構せる一種空裝的證候たるに過ぎざるを示し、隨て之を治するの道は只彼が誤れる一觀念を轉ずるの一事あるのみなるを悟らしめ、然も彼が囊に却て

己の誤れるを咎むるをなさずして徒に一家を責むるの情に切に、以て益證候の増悪を致せるもの洵に彼が不辨の至りなりしを悟らしめ、顧みて再び斯る過轍を蹈むことなく、進んで又罪なきの一家を罪し、謂なく甲斐なきの病状を装ふの愚をなさず、便ち釋然己に歸りて望を一家の幸福に馳せ、夫婦相和し、親子相敬愛するの美風を揚ぐるに努めんことを諭し、猶ほ彼の夫は彼が爲、夙に心を勞し、思を焦せるものにして、又夫れ彼に對する愛護の一念に至りては固より初より渝らざりしものありしを告げしかば、婦も亦流石に感服せしもの、如く、乃ち潸然涙をなして曰く『眞なる哉其言、今吾よりて吾久しく誤れるを悟りぬ、悟りて而して悔恨慚愧の情に堪へざるなり、噫如何なれば吾は早く此處に思ひ及ばざりしぞ、思早く此處に至らば惑はず疑はず、煩惱隨て萌さず、鬱憤亦自ら生ぜざりしものならん、遂事今に於て咎むるも甲斐なし、要は後事を慎むにあるのみ、いで今よりは思翻して偏に一家の安寧和樂を禱り、常に和氣怡色を持して婉姿愉容を失はず、舅姑に事へて從順敬愛の念を

絶たず、夫に對して柔和渾身の愛を傾け、以て團樂の歡樂を期すべし』と、實に其言の如く彼は是より再び良妻となり淑婦となり一人にして忽ち移りて別人の如くはなれりと云ふ。是れ神経性状態の消退せるを以てなりけり、彼が神経質の鎮撫せられたるを以てなりけり。右の如く激越せる神経性状態を鎮撫し之を其平均の姿に齎すの一事は敢て常に難きものにあらず、要は此病的なる神経性状態の原因を發見し速に之を除くにあるのみ。而して其所謂病的神経性状態の原因とは常に誤れる一觀念たるものなれば、吾人若し此種神経質者の一人を其煩惱の巷に濟はんと欲せば、宜しく先づ此一觀念を拉して之を拂ひ去るに如かず。蓋し此觀念を去ること、固より極めて容易なり、而して其大方去られざるは思未だ此處に及ばざるを以てなり。聞け患者が終に語る所を『オ、斯くも容易なりし根治法、予は如何で早く悟り得ざりし』と、一語さすがに神経質療治の敢て常に難からざるを示すものなり。ツ氏は此處に又一例を吾人に紹介しぬ曰く『予が知れる騎兵士官の一

人、一種拭ふべからざる自家推感性概念の擒とはなれり。彼は騎者なり、馬を馭するは彼が自らなる職分なり、而して其の所謂一種自家推感性概念は徒に彼が職分の實踐を妨げ、彼をして常に戦々其の分に安んぜざらしむるに至れり。彼が將に彼の馬に跨らんとするや輒ち慄然として一種不快の概念は彼が頭腦を攪亂しぬ、曰く、「吾馬は、吾制馭の宜を得ざる爲、必ず途に行人を蹴り而して其の咎責は固より舉て吾一身の上に懸り來らん」と、彼既に馬を馭するの道を知る、而して未だ一度も彼が乗馬の人を傷けたることあるなし、然れば則ち彼や固より自ら安んずべきなり、然も一念恐怖の極み、遂によく馬を驅りて行く能はざるに至れり。憐むべし彼騎士は全く病的なる一觀念の爲、斯くは遂に其本分をも空ふるに至りしものなりき。予之を吾友某に傳へ聞き、同情禁する能はず密に彼が既往現在を尋ね、深く自ら期する所ありき。そも彼は猶ほ彼が兒たりし頃より種々様々なる不遇に泣き、不満不平の裏に人とはなり來れり、然も全く彼が心を碎き、彼が頭腦に拭ふべからざる遺恨を印せし

は實に彼が中學に在りし頃なりき。槐白盛りなる此頃、同じ級の一人がある休みの時間中、文机の一脚を破損しぬ、頓て次の授業は開始せられ、破損されたる一臺の文机は端なくも教師の目に付き、誰が業なりやと先づ問はれたり、之を破損せる當の一人は、茲に便ち自白して責を待つが道なるに、全然黙して遂に知らざるを爲せり、此に於て兼て粗暴を以て目されたる彼今の騎士は思ひも懸けず其破損者なるべしと疑はれ、謂なき罪を負はしめられたり。彼は拒めり、謂なき此咎を固く拒めり、彼は飽迄知らずと陳じ、情なき彼の教師を深くも恨みぬ。翌日登校して同く其教場に入れば人々口を揃へて彼が前日の過失を鳴し、速に自白すべしと迫り、猶ほ彼が遂に自状せざれば事の始終を直に彼が父に迄報導すべしと詰り、詰責如何許りなりとも彼は只知らざるを知らずとなせるもの願みて自ら恥るなきの身なりければ、終に其故なきの罪を負ふの思をなさず、一向教師及び同僚の無情を嘆ちつゝ家路に急ぎしに、悲い哉彼の父は既に吾子が冤罪の告知を手にし憂悶自ら措く能はざるの狀に在り

たり。書は載せたり、曰く「足下の息某は平素粗暴且不恭にして剩へ卑劣なり、昨己が教場の文机を破損し、然も其咎を恐れて飽まで之を知らずとなし、遂に自ら潔く白状するの勇を鼓する能はず云々」と、父は今しも此極端なる文言を讀み了り、茲に便ち其子の至るを見ては憂悶の極忿慨胸に溢れて怒號一喝痛く之を處罰しぬ。憫むべきは單り彼罪なきの少年なり、外校に在りては終日實なきの罪に問はれ、内家に歸りては父が怒りの極に觸れ、其身既に置くに處なく周章狼狽、終に其翌登校して本意なくも無き罪を身を受け乃ち倉皇校門を出て、漂然行く方なくも彷徨ひ歩き、野に臥し森に隠れ、木實を噛み、草葉を嘗め、三日の間何處ともなく只惑ひ廻れり。一面校に在りては彼が惑ひに惑ひし此三日の間眞に其責を負ふべき一人は自白し出でたり。此に於てか、憫なる彼少年の父は彼が餘りの短慮より事の真相をも精察せず、一向罪なき吾子を罪せるの輕舉を耻ぢ、速に人を四方に馳せて其子の跡を追はしめ、漸く之を近郷の林中に求め出で、直に彼が家に導きぬ。扱も少年は茲に再び青

天白日の身となり、其心亦自ら靜寧なるべかりしが、恐るべきは内外相擁して深くも彼が心情を蹂躪せる其大刺戟！所謂其精神的至大の損傷なりき、洵に此至大至重なる精神的損傷の一度彼が心に加へらるゝや、彼なるもの正に精神的死地にこそは瀕したるなれ。斯くして可憐無邪氣なりし少年も一變して我儘勝手の人となり、且剩戟性興奮性にして容易く激し容易く怒り、爲に親愛なるべき彼の家族とも相和さず、離心離徳互に相容るゝなく、之を諭すに理を以てするも敢て會得するの狀なく、之を撫するに情を以てするも亦敢て感應するの色なく、知人遠け朋友疎し彼の父と雖ども此處に至りては亦遂に奈何ともすること能はず、手を拱して只其爲すが儘に任せしが、元より軟弱なる頭腦、克己の念なく忍耐の能なきもの、去つて一度他邦に馳せ身を商業に委ねしかど事遂に成らずして再び甲斐なく本土に歸り、茲に軍籍に入りて騎兵士官とはなれるものなりき。痛むべし小時一度軟化されたる彼が精神は行ふとして何事をも成就すること能はず、偶奮然一事に臨むとも忽ち邪念村々と沸き、

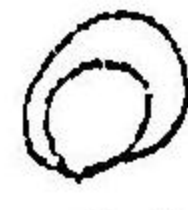
拂へども去り難く、拭ふも消ゆるなく漸く導て彼を邪道に致し事毎に之を不成に終らしめたりき。今彼が馬に跨らんとするに當り、徒に乘馬の人を傷け其咎め悉く彼が身に及ばんことを恐るゝに至りしが如きも一に此軟化する精神の産物にして當に彼を不成に導く一種の邪念たりしに他ならざるなり。此に至りて予は彼が心界一圓の變状を觀じ心切に之を救ふの機を待てり。而して其間彼は自ら事の常に成らざるを憤り、自暴自棄只鬱結せる不平を拂ふの道を求め遂に飲酒の悪習に沈湎しぬ。此に於て彼が刺戟性は益其度を高め、事毎に激發興奮して人毎に争鬪を挑み、諭すも聽かず、説くも顧みず、濫費愈甚うして亂暴益加はりければ彼の家族も傍觀坐視するに忍びず、相議して先づ彼が精神上の鑑定を請ひ進て彼が治産の權を奪はんことを望むに至れり。此時に當り予が友某は彼を予に紹介し之を其あさましき心狀より濟ひ出さんことを請へり、予は茲に意中の人を得たるを喜び、乃ち専心是が救濟の道を講じたり、幸數日にして漸く患者の信用を得、且亂れ果てたる彼が心界の一角に於て

猶ほ救助の望ある一部を見出しければ予は誠心誠意以て彼に語れり、曰く、『卿夫れ思へ、卿にして今より後猶ほ前日の如く、卿を導かしむるに病める卿が自家推感性の觀念を以てしなば、卿は愈不幸不偶の淵にのみ沈まん、如かず斷然此種の觀念を退け、平穩和樂以て心となすべし、而して猶ほ卿は卿を養ひ、卿を導きたる卿の家族が卿に對して或は時に不慈なる行動ありしとも、これ唯に彼等一時の謬見に出でたるものにして決して其本意にあらざるべきを思ひ、剩へ卿は彼等が卿を愛する眞情の嚮も今も渝ることなきの一事に對しては他まで感謝せざるべからず』と、此の如くにして予は一意只彼が惑へる思考を解くに努めしかば治験は是より漸く現はれ、さしも惑亂せる彼も遂に釋然として復た己に還り、醒めては自ら昔日の愚を恥ぢ、予に謝し家族に詫び、茲に再び平和團樂なる家庭をなすに至り、乃ち酒杯を遠け、濫費を去り、溫良篤實又誠に珍しき好人物とはなりぬ。』と何ぞ其適例なる。

吾人は茲に神經質の原發性諸證を述べ盡せり、而して進んで將に其續

發性證候に轉するに先ち、此原發兩證を連結する一種樞要なる精神機轉を擧げんとす、注意力即是なり、注意力は實に神經質者の發性證候を喚起する重要な原動力なり。

抑吾人の精神機轉は其一度發動するや忽ち現れて身體上の作能となるものにして、而して之を其發動に致ものは所謂注意の力なれば吾人の生理的身體上機能は皆此注意力の致す所なりと見るを得べきものなり。之を神經質者に就て觀察するに彼等の頭腦たる既に元より病的の状態にあり、隨て此處に生ずる所の精神機轉亦自ら尋常健康なる能はずして其發動するや即常に病的作能を身體上に及ぼすべきものなり、然も其病的精神機轉の發動を促すものは常に茲に集中する所の注意力なれば、彼等が絶へず身體上諸處の苦痛を訴ふるも全く此一注意力に基因すと謂つべきなり故に曰く注意力は實に神經質者の發性證候を喚起するに重要な原動力なりと。



夫れ右の如くにしてすべて神經質を患ふるもの一度其注意を心臟作能

の上に乗る時は輒ち心悸起りて脈搏早み、之を消滅せしむるに難し、時々は輒ち消化力の不良を來し、不眠を恐れ、良眠を獲るに難し、此の狀に陥る、是れ實に彼神經質者の精神一圓の既に衰弱したるの力甚だ強くして常に之を一身の生理的機能に集むるに努むるの頭腦に於ては此に相當せる一定の觀念像現はれ、身體上作能の障礙となるものなり。故に神經質者を此等様々なる病的状態より救ひ出さんと欲するものは宜しく彼に告ぐるに次の如き一語を以てすべし「卿よ、卿若し速に卿が病を治せんと欲せば、願はくば先づ予が望む所を聞け、今より後假令諸證は雜然として發時の如く現るゝとも、卿よ決して爲に心を勞することなく、勉めて平然卿が注意を其諸證に集むる勿れ、即ち是れ卿が病の治法なり、何ぞ其輕易なる、卿夫れ速に之を試みよ」と、此の如きは未だ一再にしてよく患者の遂行を促すこと能はずと雖ども時を歴回を重ねるに連れ、漸く患者の信念を高め隨て是が實施、是が經驗亦漸く繁く、其効果の愈顯著なるに及びては流石に患者

も吾人の豫言を謝しつゝ、終には固疾の平癒を見るに至るものなり。
 蓋し患者の注意を單に其生理的體上機能に集ざらしむるの一事は敢て左程に難からざるべけれども然も實際に於て吾人が彼等の一定生理的體上機能の障礙を除くに當り常に多大の困難を感ずるは是實にすべての患者が彼等の注意を其一定生理的體上機能に集むるを習となし來れるより遂に自ら以て彼等の性となり茲に其轉向の當に至難至事となり果つるを以てなり。寔に習慣を曲ぐるは即ち一人の性質を轉ずるものにして常に至大の難事なれば、爾來吾人が神経質者を治するに當り大方其効を奏する能はざりしは全く此難關に至りて蹉跌遂巡せるが爲なり。神経質者を治するもの此處に至りて宜く堅忍、よく最終の美果を收むるを期せずんばあるべからず。

二、續發性證候

之を譬ふれば心身は形影の如く聲響の如し、心茲に動かば身便ち從ふ

故に身體作能の精神機轉に伴ふは影の恰も形に從ふが如く、響の恰も聲に應ずるが如くなり。神経質者の續發性證候は即此の影なり此響なり、彼等の精神機轉は既に病的なり、即ち其形は崩れ其聲は亂る、從ふ所の影、應ずる所の響の亦隨て崩れ且亂るゝは當然なり。彼等が種々の證候を現し様々の病態を示すは是が爲なり。況んや之を解發するに強勢なる注意力あるに於てをや、試に見よ彼等の注意の一度一定病的なる精神機轉に向ふや、常該機轉は齊然起つて發動し即ち相應せる生理的體上機能を惹起するに至るものなり、彼等の不眠、彼等の消化不良皆然らざるはなし、不眠を恐るゝ時は不眠症に罹り、消化不良を意とする時は消化不良を來し、心臟疾患を慮る時は心悸來りて脈搏進む誠に不可思議なる病者たるものなり。

吾人一日神経質なる一人を診察しつゝありしに偶患者の知友來りて傍より患者に問ふて曰く、『卿は嘗て心悸動の亢進せるに驚きしとなかりしや』と、彼固より心臟疾患を有せず、心悸動の亢進せることの如き未だ嘗

て是あらざりしものなりしが、此一語に接し乃ち彼の注意を心臓機能に傾くるや端なくも心悸忽ち亢進し來り、其翌再び吾人を訪ふて訴ふるや「噫、如何なる怪事ぞ、昨卿が診を乞ひしより心悸忽焉として襲ひ來り其夜の如きは激動愈加はり遂に一睡をだも食ること能はざりし、之を如何にすべき」と、何ぞ其不可思議なる、寢に吾人の一言は既に彼を重篤なる心臓病者の如からしめたり。斯の如くにして神経質者は極めて容易く人言に支配せられ、其云はるゝが儘に彼の意を當該部位に集中し、以てよく輕重色々の病態を示し得るものなり。即ち推感の強弱如何により、輕きは單に脈搏の促進より、重きは其顯著なる不正乃至は結滯に及び、以て重篤なる心筋炎の型を呈せしめ、或は消化障礙の輕きものより進んで胃部の疼痛を伴ふ嘔吐の發作に至らしめ、時には盲腸炎の狀を示し、腸阻塞の姿を現はすことさへ是あり。

重ねてツ氏の一例を假らん彼記して曰く「予嘗て一病婦の許に迎はれ、馳せ行て先づ其狀態を聞きしに全く重篤なる盲腸炎の如くなりき、就て

患婦を病牀に見しに彼は全然力無氣に彼が牀上に横はり、問ふも一言の答を發することさへ能はざるの狀に在りき。而して彼の下腹部には氷囊置かれ、疼痛劇甚忍び難き有様にて、猶三日以來食するもの總て吐出せられたりと云はれたりき、見る者誰か之を神経性狀態とやなさん、既往現在の證狀より一言の下之を盲腸炎と診斷せんこと皆人の首肯する所なりき。然れども予には一定の所信あり、直に以て盲腸炎と斷すること能はず、心窩に神経性一種虛空の證狀ならんことを疑ひつゝ、靜に手を下して患婦の診察を始め、先づ下腹部に置かれたる氷囊を除かしめ當該患部を觸診せんとすれば婦は既に之を見て予が手の未だ患部に及ばざるに、絶叫して痛楚の耐ふべからざるを訴へ、之に觸るれば飛躍疼痛の極に泣けり。然れども予は敢て此慘況に辟易せず進んで丁寧反復、備に患部の診察を遂げしが、果せる哉斯程の重態を致せる患部に於て、然も更に盲腸炎の疑を挾むべき所見を得る能はず、且彼に些の體温上昇をすら見ること能はざりしより、予は此に至りて始めて婦の全く盲腸炎を患ひつゝ、

ありしものにあらず、單に一人の神經質者にして只旺盛なる自家推感の結果斯る状態に迄陥り來りしものなるを断定しぬ。乃ち逐一證候の由來を表示し且一心婦を勵まして曰く「婦の患ふる所、決して器質的疾患にあらざれば、速に氷炭を捨て、病牀を離れ、檀に彼が好む所の食を採るべし」と、婦やよく直に予が言に従ひ、而して疾病は即ち治癒しぬと。實に興味ある證例なり。

思ふに難きは神經病醫の職分なり、すべて神經病者を治せんと欲するものは唯に神經上諸證候を知れるを以て足れりとなすべきものにあらず、爾に全般の疾病に亘り齊く確實強固なる知見を有するにあらずんば遂に一人の神經質者をも之を全く治する能はざるものなり。世には淺蕪なる考を懐ける人多く、神經病者を治するには、精神療法こそ適法にしてこは然も醫家の力を要せざるべけれなど稱すれども此等は既に根本的謬見に惑へるものにして敢て齒牙にだも懸くるに足らざるなり。元と精神療法なるものは實地醫學の中に於ても最も深遠難解の一題にして古來學

者の齊く全腦を捧げつゝある所なり、然るを往々にして所謂催眠術者若くば非醫者連の此難法を弄しつゝ惑ひに惑へる神經病者を誘ひ、益迷暗なる深淵に擠すものあるは眞に痛慨措く能はざる所なり。

蓋し神經質の續發性證候なるものは擧げ來ば到底盡くるなきものにしてあらゆる生理學的身體作能は成な發して便ち續發性證候となり得べく、之を悉く茲に列擧しなば繁纏錯雜却て了解に苦しかるべければ吾人は只其重要なる三四のみ記するに止めんとす。而して其所謂主要なる三四の續發性證候とは何ぞや、曰く、不眠、消化不良、心悸亢進、脈搏促進及び呼吸器系統に於ける一種劇甚なる證候即是なり。

○不眠。續發性諸證中現れて最も頻數なるものは不眠症なり。蓋し此種の不眠は多くは所謂自家推感的産物にして其由て來るの状を見るに、先づ眼り難からんと恐怖より起り、伴ふ所の苦悶によりて愈其度を高め大概の鎮靜劑、大概の催眠劑を以てするも中々得て排すべからざる難治固執の一證なり。

睡眠は精神上最美最良の滋養劑なり、業已に疲れ果てたる頭腦を復活し之を健全なる常態に齎すものは一に睡眠の力にして、睡眠は實に疲倦せる神經に向ひ至大の治力を有するものなりとは世人が睡眠に對する一般の評價なり、然りと雖ども由來推感性なる吾神經質者の如き者に對し、如此妄に睡眠の重きを説くは却て愈彼が自家推感性を煽動し、隨ふ所の不眠をして轉た益甚だしからしむる者なれば吾人は斯る不眠症者に對しては寧ろ告ぐるに次の如くせずんばあるべからざるなり、「睡眠は眞に疲勞せる神經に對する重要なる一治劑なり、然も之を醫するに當り未だ必ずしも常に缺くべからざるものにあらず、日暮れ風收まり四面寥寞草木亦眠れるが程、牀上五體安かにして遠く日中繁劇の業務を距り、所謂目邪色の遮るなく耳淫聲の貫くなき、寔に是れ疲勞せる頭腦を養ひ是に活氣を給するの能大なるものなり」と、斯くて患者亦よく此理を會得し、世人の所謂睡眠評價のさすがに誇張的なるを諱むるに至る時は假令就極猶ほ直に眠る能はずと雖ども由りて苦悶の是に伴ふなく固より不眠を恐

るゝの念甚だ薄く、隨て身神並び鎮り良眠亦自ら催し來るを常とす。

此種の不眠を訴ふるものを見るに一意只就眠の速にして睡眠時の長からんとを希ひ、自ら種々の創案を立て常に様々の工風を凝す、其或る者は精く一定睡眠の時間を測定せんが爲枕頭時儀を供して寢に就き、中宵醒れば則ち火を點じて之を検し、若し彼が已に眠りし時間の平常よりも多かりし時は安堵満足して却て復た容易く眠に入り、若し其少かりし時は不安悶躁再び眠る能はざるを習とす。第二者は總て聲音の傳達を恐れ堅く其耳を綿填し、然も微音に驚き小嚙に起ち、終宵眠る能はざるの不幸を訴ふ、蓋し眠るべくして眠らざるもの、敢て元より眠る能はざるにあらざるなり。彼は自ら耳傾けて響音の至るを期待す、故によく其微音輕響に驚く、是れ徒に眠るを欲して然も自ら求めて眠るを爲さるものなり。其第三者は不眠の源を彼が就寢の部屋に求め、轉々變室、室として至らざるなく、然も苦悶愈深くして不眠益甚く、遂に望む所の寧靜安眠を得る能はず、此の如きは皆是れ不眠の原因を求むるに其處を轉倒

し、之を己の内にも求めずして四圍外界にも求め、其不眠を恐れつゝ、隨て生ずる所の苦悶に由來するを悟らずして徒に外來輕微の刺戟を咎め、誠や木に縁りて魚を求むるもの、類にして勞して終に其功を收むる能はざるものなり。故に此徒不眠を患ふる者、一夕枕頭時儀を備へず、自ら双耳の填綿を拂ふに至りては正しく是れ彼が不眠恐怖の念より脱し而して何等苦悶の思をなさないに至れる證徴にして、是より良眠自ら至り、四圍の訴、轉室の煩亦此時より消退するものなり。

凡吾人の言語には大別三様あり、聲あり形なきもの其一、聲なく形あるもの其二、而して聲なく且形なきもの即其三なり。聲あり形なきの言語は所謂言語なり、聲なくして形あるものは書字なり、而して聲なく且形もなきものは即ち吾人の思考なり。吾人は思はず考へずしてもの云ひもの書くこと能はざるが如く又もの云はずして決して思考すること能はざるなり。故に曰く吾人の思考は無聲無形の言語なりと。斯くて吾人若し一定の生理的身體機能に就きて語る時は其聲あると聲なきとを問はず、

其形あると形なきとを問はず必す茲に吾人の注意は集まり、相關與する所の觀念群は即ち齊起應發して伴ふ所の情調と相和し相擁し、以て相當なる身體作能を發呈せしむるに至るものなり。若し夫れ神經質者に於て其果して然る時は現はるゝ所の結果作能は必ず常に病的状態を以てすべきなり、何となれば彼が感色の常に暗味溷濁して憂愁苦悶の調を帯び、隨て應發する所の觀念像亦皆悲哀的煩惱の一群なればなり。故に神經質者若し其患ふる所の不眠症を輕うせんと欲せば褥中徒に就眠の早きを希ふ勿れ、就眠の早きを希ふ所の一觀念、即聲無く形無き此一言は其繰返さるゝこと愈繁きまゝに愈切に彼の注意を『眠』の上を集め、遂に彼をして全然不眠の巷に至らしむるを以てなり。如かず力めて其心を安んじ其思を鎮め、而して自語すらく『吾今此の如く業已に牀中安寧の央にあり、吾が身神は爲に息ふ、此身を養ひ、此神を養ふの果に至りては眠ると眠らざると、敢て多く關せざるなり、思ふ嚮の時、徒に不安與奮悶躁自ら禁する能はざりしもの、一に予が未だ觀じて茲に至ること能はざりしに

依る、何ぞ其慮の淺かりしぞ」と、果して此の如くすれば良眠漸く至り、さしも難症なる不眠も亦遂に全く治し去るを得べけん。

且此種の不眠を濟はんが爲、患者をして數へて一より百に至らしめ、猶眠る能はずんば之を再三なしらむる人あり、或は心動を數へしめ、時振を數へしむる人もあり、共に簡易なる催眠法なりと雖ども然もこれすら腦の一定作能を要するものにして必ず常に良果を收むべきものにあらずるなり。要は理性克己の力によりよく所謂無念無想の状態を馴致するの能を養はしむるにあり、是れ實に難きが如くにして敢て甚だ難きものにあらず、習慣漸く熟すれば無想靜寧の状洵に容易く至り隨て良眠亦自ら催さるゝものにして而して其効や固より渠の時振を數へ心動を數ふるが如き諸法に勝ること遠く且大なるものなり。

不眠には猶其眞個現實の焦心苦慮より來るものあり、株式米商の取引をなし巨萬の財寶を左右するもの、競争選抜の試験に際し難解無盡の問題を懐くもの心配の餘り悶惱の極胸壁板の如く心邊重壓の感に堪はず、終

宵禱中に輾轉して遂に一睡をだも食ること能はざるに至る。夫れ斯の如きは針小棒大誇張自ら僻み、細事に齟齬して謂なきの憂悶に沈むものは自ら其由て來る所を異にするが故に、臨んで是が救治を試みんと欲するものは慧眼先づよく彼が不眠の由來を看破し、是に寄するに一擲の同情を以てし、之を勵すに他日成果の望を以てせずんばあるべからず、渠れ一時姑息の道を計り、是に取敢へず催眠劑を投ずるが如きは、所謂其本を措て其末を防ぐものにして、彼が根本的苦慮は依然として猶ほ彼が頭腦に留り、藥果一度去らば則ち蕪然として再び彼が心胸を衝き、苦悶煩惱立に涌いて却て嚮に辛くも苦境に馴れ漸く悶情に靡ける當時の思にすら且勝るあるを見るものなり。

神經性消化不良。不眠症に亞ぎ最も煩繁なる續發證候は神經性消化不良なり。神經質者にして彼の注意を彼が消化機能の上に集ざる限りは敢て消化の不良を致すことなしと雖ども、彼若し一度心を彼が消化系統の上に轉じ、其官能の如何を慮る時は即ち消化の能立に侵され、此處に特

有なる神経性消化不良こそ發呈せらるゝに至るものなれ。
 吾人は此種一人の患者を聞き彼嚮に唯不眠をのみ訴へ居しもの一日與
 奮の結果突然嘔吐せしより彼が注意は忽ち轉じて此消化障礙の上に集り、
 殊に痛くも悪心嘔吐を恐れ、卓に臨む毎に口頭手巾を遠くする能はず、而
 して彼が口頭手巾を遠ざげざれば則ち應ずる所の嘔吐愈其度を高め、遂
 には一箸の食、一掬の水をだも攝ること能はざるに至れりとぞ、誠に適
 當なる神経性消化不良の一例なり。偶彼が主治醫某、當時名望ある一精
 神病醫なりければ之を見て心密に救治の念を鼓し居しが、然も憫むべし
 一面彼其の神経性續發證候なるを知らざるもの、驚き惑ひて只管嚴密周
 到なる食餌療法をのみ行ひしかど證狀固より依然として嘔吐更に止まず
 悪心遂に退かず此に於てか某亦終に之を看過するに忍びず患者を招きて
 切に其神経性一證にして彼が唯注意を此處に集め此種觀念の發動を促せ
 るに依れるを説き、而して其之を治するの法は單に口頭手巾を遠け、注
 意を他方に轉じて復た悪心嘔吐の事を思はざるにあるのみなるを諭せし

かば、是より悪心漸く退き嘔吐亦隨て歇みぬと云ふ。
 猶予は近時相似たる一例を實驗しぬ、吾が郷の某嫗、幼より神経質な
 りしもの此頃不圖所謂胃弱の症狀を來し、絶えず嘔吐を覺え、胃痛、嘔
 吐交來りて遂に食を絶つゝの止を得ざるに至り、乃ちあらゆる治法を盡せ
 るも然も更に治驗なかりければとて予が知人の紹介により來り予が門を
 叩けり。予細診精察の後其全く胃官に於ける神経性一種の續發證にして
 決して所謂眞個胃弱なるものにあらざるを告げしかば、是より嘔吐頓て
 歇み、胃痛嘔吐亦相踵て消退したりき。
 心悸亢進脈搏促進 亦共に屢見らるゝ所の續發性神経證候なり。吾人
 は茲に將た適切なるツ氏の記載を移すを快となす。即ち曰く予近時此
 の著證を示せる一例を實驗しぬ、患者年五十、北都の人、音樂家として
 其名相當に高き一人なりき、彼曩に南都に在り心臟病の故を以て久く治
 療せられたりしやう云ひければ之を即ち當該主治醫に糺せしに、敢て器
 質的疾患にてはあらず只當時現はれたる證候の餘りに錯然たりしより或

は神經性發證候にてもやありけんと思ひつゝありしものなりとの回答を得ぬ、今左に彼が頃日示せる著甚なる病状を記さん。彼は實に近頃來りて吾東都に入り、而して卒然重態に陥りしものなりき。予は迎はれて彼をホテルに見しが。彼時に恰も人事不省の發作を歴、極度衰態の姿に在りたり。彼は心臟衰弱の故を以て是が治療を予に請へり、予慎みて彼が訴ふる所の局部を診察せしかど境界正常にして雜音あるなく、唯其鼓動旺盛にして往々著しき斷絶を示し、猶脈搏の甚だ不規則にして屢結滯するを見しのみ、固より重篤なる心臟疾患を疑ふ能はざりしが唯患者の年齢よりして時に心筋炎を氣使ふべかりしかば取敢へずデギタリスを投じて平臥安静を命じぬ。斯くして數日の後予は再び彼の請に應じて行て彼を診ぬ、症状は依然たりき、心動亂れ脈搏整はず藥餌更に効を奏せず、患者は爲に深く己の病態を恐れ、憂悶措く能はず終には命脈亦漸く盡きんとするの状に入り、慰籍既に彼を鼓する能はず、衰態愈加はりて食はず且飲まず、偶是に飲食を強ゆるも攝らば則ち吐嘔應發して愈彼に苦悶

の状を増すのみ、牀上力無く倒れて呼べども應ずるなく正に衰態の頂に達せり、此に於てか人々驚惑直に急を家郷に報じて悉く彼が親近を招喚しぬ。然れども予や獨り彼の死を期すること能はず、心密に彼が恢復の日近からんことを庶幾せり、何となれば彼なるもの其衰態然く深甚なりしにも係らず一面猶ほ立派なる活力を保ち居たりければなり。而して予は同時に自ら恥づる所ありき、爾來彼に規則正しく藥汁を取らしめたりければなり、予にして既往の彼を知りたらんには藥劑一切之を彼に投與することなく、剩へ離床自由の行動を取らしめ自由の食餌を進めたりけんを、不幸彙には全く以前の彼を知らず萬一を慮りて是に藥汁を投じ是に安静を命じ、彼をして轉た彼の疾病の重篤なるを思はしめ、遂に導て今日の状態に至らしめたる、予も亦咎の免るべからざるものありしを覺えて慚愧洵に措くこと能はざりき。宜なり吾が萬言の慰籍も何等の効を奏するなく徒に症状の重きをのみ加へしめたる、實に大毒を投じて救ふに小藥を以てせるに等しかりければなり。家人は來着せり、驚き亂れて速に

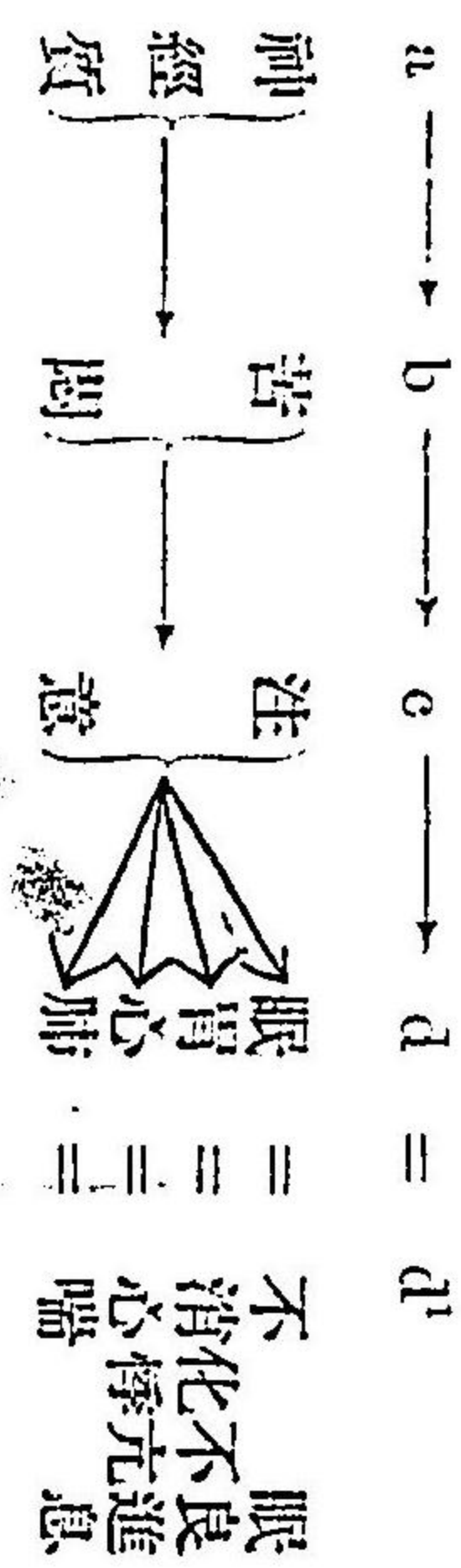
大醫某氏を聘して診を乞へり此に於て氏先づ親く患者を診、乃ち下すに予と同一の診断を以てし、且曰く「卿よ安んせよ、卿が心臓は健全なり、卿が病は心臓に坐せずして卿自身の惑に坐す、故に卿が病の治するは卿が惑の去るに同ず、惑愈深かりければこそ、病益危かりけれ。卿よ卿が病を治せんと欲せば先づ速に卿が惑を解け、予は病なき卿に薬を投する能はず、卿夫れ起て、起ちて食し、食して語れ、卿が病は乃ち治せん」と、果せる哉患者は頓て起ち頓て食し數日にして彼が家族親近と共に欣然家郷に歸れり。誠にはれ好箇の一例にして所謂自家推感の如何に神經質者を危地に擠するやを證して餘あるものなり。患者は音樂家なりき、云はずして職は其大方彼が神經質ならんことを示せり、彼己に眞に神經質者なりき、而して心疾を恐るゝの念愈長じて注意益此處に凝り、終に自ら至重至難の症徴を虚構して己を死地に致せるものなりき、神身影響の機巧亦恐しい哉。〓と以て此一證を叙し盡せるものなり。

呼吸器系統も忤しく神經性状態の影響を受ることあり。一人年猶十六、

聰明利發長者を凌げり、彼性樂を好み練習晝夜を分たす徒に斯界稀世の名家を夢みて心身の損敗を顧みず、遂に所謂神經質の掄となり終りしものなりき。彼近時劇き喘息の發作に襲はれ持續數時に互り苦痛堪ふる能はざるの狀にありたり、彼一日彼の母に伴はれ來り醫の門を叩けり。醫引いて之を診査せしに敢て喘息發作を來し得るが如き何等器質的病根あるを認めざりき、此に於て醫は其神經性一續發證候なるを思ひ先づ母を招いて患者の喘息の單に神經性一發作にして只管身神過勞の結果なれば之を治するの道は只安靜以て足れりと告げ、即ち患者を導いて之を閑散靜寧なる一室に致し、此處に數時彼を牀中に平臥せしめ、既にして醫の行て彼を牀上に見舞ひしに、患者は双手を以て堅く胸板を擁し、云はずして痛く彼が喘息發作の襲來を懸念するの意を表しぬ、而して聞けば彼や當時常に斯くはなせるものなりと、是れ蓋し彼が絶へず彼の注意を呼吸器系統に傾くるの標榜にして、喘息由て起り其發作の且重かりしも是が爲なり。此に於て醫は徐に患者の心を慰め、彼が喘息發作の彼が呼吸

器疾患に由来するものにあらずして只に彼が想像の権化なるを説き、随て之を治するの道は彼が先づ彼が胸上の手を排し、進で意を彼が發作に注がざるに至るにあるべきを諭せしかば、患者も漸く是に従ひ、疾病は自ら治し去り、爾來三年既に一回の發作をも見ざるに至りしとぞ。

神經質の原續兩證は叙し盡されたり、此に於て吾人は此兩證連續の狀を示し其相互呼應の真相を解説するに力めんとす。先づ標式を以て二證連續の狀を示せば左の如し、



神經質既に其素をなすを以て苦悶茲に生ず、苦悶治ぬき所注意一度動きて一定の精神機轉を促發するや輒ち其各機轉に相當せる生理的身體作能

は應發して所謂各種の續發性證候をなすものにして、之を細説せんか、一人意を睡眠の上に注がば則ち不眠となり、胃の官能を慮らば則ち消化不良となり、心悸を窺はば則ち其亢進を致し、而して之を肺の機能に傾く時は發して喘息となるが如し。標式示す所の三因子 a, b, c は一人に就きては常に不變なり、而して d は彼が任意の因子にして c の向ふ所、即ち相當の d をなすものなり。

蓋吾人の生理的身體作能が注意力によりて強弱自在に左右せらるゝは人の大方知る所なるべし。一人試に卵が眼を卵が胸廓の上に寄せ心靜に卵が肺臟官能の如何を思へ、卵や必ず卵が呼吸の稍迫るを覺えん。一人試に左側を敷いて横臥し卵が意を卵が心動の上に集め見よ、卵夫れ奄卵が心悸の著きに驚かされん。此呼吸窘迫、此心悸亢進、共に是れ一人が任意に向けたる注意の產物たるに他ならず、注意なるもの亦一不可思議の力ならずや。故に之を精確に觀察する時は吾人か身體上作能に於ける様々なる障礙は既に只因子 c、d の相擁して作用するによりて明に

發呈せらるゝものなり。夫れ精神上健康なる吾人に於てすら且然り、況んや其已に病める神経質者に於てをや。見よ我等にはa及びbの如き兩因子あるなし、而して神経質者は寧ろ之を以て特徴となすもの、然れば則ち身體上作能障礙の原動力たる(+)を助くるに又此強勢なる兩因子を以てす、結ばるゝ所の害果の吾人健者に現はるゝものに倍遜するや宜なり。斯くて神経質者に現はるゝ所のdなるものは業己に常に強甚なるものなり、而して其一度發呈せらるゝや、重ねて其影響を因子a及びbに及ぼし、神経性素地をして愈濃厚ならしめ、苦悶をして愈深甚ならしむるものなり(然れども此際因子a及びbは敢て直接dの影響を被らざるを常とす)。此の如くにして患者の續發性證候は時毎に益其強度を高め行き遂に底止する所なきの姿なり。吾人は此續發性證候の愈深甚を極むる狀況をして容易に了解せしめんが爲代數學の標式を假り是が表示を試みんとす、

$$a + b + c + d = d^2$$

右dは神経性續發證候初發の姿なり、亞ぎ來る第二期の續發證候は是にa+bの共和作用せる結果にして即左の如し、

$$(a+b) d^2 + c + d = d^2$$

此處にdは云ふ迄もなくdに倍遜して益強劇なる新障礙を標示するものなり。續發證候の強度は此の如くにして愈益進行して

$$(a+b) d^2 d^2 + c + d = d^3$$

$$(a+b) d^2 d^2 d^2 + c + d = d^4$$

$$(a+b) d^2 d^2 d^2 d^2 + c + d = d^5$$

第n期續發性證候

に至り推移漸進止る所なく、障礙亦作く並び進んで愈其深甚を極め何處を終ともなす能はざるに至らん、神経質者の續發證候は斯くてこそ甚だ恐るべきものなれ。是れ一に彼等がよく自ら己の證候を抑制挫折すること能はず、却て益其勢を逞うせしむるを以てなり。譬へ見るに神経質者は諸證重圍の中に於ける孤軍の如し、彼等は備に病症の苦を知り是が重圍を脱せんことを冀ふや切なり、悲むべし然も其力よく之を敗る能はず、

否其方よく之を敗る能はざるにあらずして諸證齊然環視の裡、突破よく自ら通るゝの路を求めざるものなり、故に人若し彼を此重圍の中央より救はんと欲せば宜く速に一道を開いて此處に彼を誘致するに如かず。

思ふに患者を圍み患者を環視する所の諸證中其勢の最も猖獗なるものは單り彼が自ら構成せる誤妄虚空の觀念一群なれば、所謂患者の重圍を解くの道は亦彼を其誤れる觀想より救ふにあるのみ、舉し所の方程式中因子を去らば則ち足らん、既に莫し自ら生せず、ありありありと雖ども胡爲ぞよく其の特に劇しきものを來すを得ん、重圍茲に全く崩れて患者乃ち戎衣を脱するの安きに至らん。若し夫れ他の因子を去るの時に當りては環軍將た其一方の敗られたるものなれば以てよく其の發來を防ぐに足れども未だ之を去りて無すること能はず、彼辛くも圍を脱して遁るゝを得たりと雖ども全軍集ひ尾して其心未だ固より平なる能はざるの姿なり。抑神經質狀態の表るゝは洵に多葉多枝、擧ぐるに遑なき程なりと雖ども求めて其本に至れば吾人は常に只一誤妄觀念に達するを

得べきのみ、故に神經質者を根本的治療せんと欲するものは先づ周く彼が示す所の諸證を觀察し、次て之を各特有なる因子に分ち、相和して一定の方程式を爲り、此處に再び最重要なる因子を求めて之を去るに努めずんばあるべからず。蓋し所謂最重要なる因子とは固より誤妄觀念の一群にして實に原發性諸證唯一の起原なり。此に於て吾人が吾人の當の敵手と認むべきものは正に此一群の誤妄觀念にして而して之を亡ぼすの道は敢て他ならざるなり、曰く要は患者の心を靜むるにあり、患者の心を靜めんには患者の信用を得るに如かず、患者にして若し醫家を信用しなば其懐く所の苦悶は頓て消退せん、信用は苦悶に對する只一の解毒素なればなり。而して苦悶の去れるは誤妄觀念の凋落せる標徴にして茲に吾人は端なく吾人の目的を達し、原發諸證齊く亡び續發證候亦自ら湮滅するの良果を見るに至らん。

第二 原因

病の生ずるや必ず一定の原因よりす、原因偶到りて病遂に發せざると
 あらんも病茲に發して然も是が原因なきことはなし、夫れ事の疑ふべき
 ものあり物の怪むべきものあるの時に當り、就て是が真相を求め臨んで
 是が由來を尋ぬるは人間一般の通性なり。醫の病に對する亦同じ、是が
 診斷に際し是が治療に臨み必ず先づ吾人の惑を喚起するものは其由來な
 り、其原因なり、バスターールの智は此迷巷に至りて始めて始めて其偉大なる光
 を放ち、凝りて豫防接種法の大成となり、端なく斯界に一基の明星を添
 え、コッホの勇は此疑團を破りて始めて結核細菌の發見となり以て萬古
 不朽の功績を收めたり。而して吾神經質の原因由來に至りては吾人未だ
 彼の細菌學界に於けるバスターール、コッホの如き人を得る能はず、否未
 だ之を得る能はざるにあらすして終に之を得ること能はざるものならざ
 らんか。蓋し神經質の原因たる深遠幽味且糾紛して追究探索甚だ難く、
 固より是が特殊原體の如きものに至りては未だ人の想像だもなし得ざる
 所、寔にバスターールを凌ぎ、コッホを抜くの大智大勇あるものと雖ども

遂によく求め出て、之を吾人に示すことを得ざるべけん。此に於てか吾
 人は只所謂神經質の原因とも見做すべき二三要素を擧げ聊か其發呈の狀
 況を序述し、以て本章の責を塞がんとす、眞に九牛の一毛たるものなり。
 二三要素とは何ぞや、曰く、一、遺傳的素因、二、誘致的原因、及び三、
 解發的原因、即是なり。

一、遺傳的素因

『予に遺傳的素因あり、今吾此の如く病むは予が予の父祖に受けたる天
 賦にして免れんと欲して遂に免る能はざる所、吾病の體質性にして即吾
 神經の先天的に衰弱せる、予は既に之を治療するの望を絶ち、之を除く
 の願を捨てたり。庶幾くば只夫れ可憐なる吾、此一癡疾者の心を慰め、
 甲斐なく長き一生をしてせめて安穩氣樂に送らしめよ』とは多の神經質
 者が吾人に齎す一片の哀訴なり。而して之を實際に見るに、患者の大多數
 は斯迄云ひ來つゝ然も幸にしてよく吾人の治法に適應し苦訴日と共に減

じ、身神時と共に爽快なるに至り、其初め愁嘆哀訴せしが如く果して終生不治の悲に泣くものは殆んど是なきなり。然れども神経質の遺傳するや事實なり、一人の神経質者は大方又神経質なる父祖を有す。蓋し生を此世に受けしもの一として渠の神妙不可思議なる遺傳の法則に従はざるはなし、先代の長所、先代の短所、厭ふも避くべからず、望むも扱必ずしも受くべきものにあらず、或は形態、或は性格、其傳りて後代に現るゝは事實の證する所なれども、或は現はれて先代の美を傳へ、或は傳はりて先代の醜を遺す、將た吾人の如何ともする能はざる所なり。而して茲に吾人は造物主の斯る妙技に驚くと共に其成果に至りては又聊か憚焉たるものあるを覺ゆるなり、何となれば一人が先代の遺産を稟くるを見るに其厭ふべき幾多の缺點は大方之を負ひ、然も其美點に至りては却て多く之を逸するを以てなり。神経質者の遺傳素因を受くるや亦同じ、彼等は殆んど擧て父祖の最弱點たりし神経質を繼承し、生れて作く神経質者となり、而して其多くの美質は悉く之を收むること能はず、況んや養

ふ所の父母の既に病的にして導いて愈其深きに行るあるに於てをや、是れ神経質者の子女の必ず亦神経質にして然も其強度に於て且一步を進むる所以なり。

神經質性遺傳素因を有する小兒は常兒と稍異なれる一種病的の性格を具ふ、其刺戟性にして容易く興激せられ、疲労性にして猶ほ甚だ自家推感性なるは誰にも目立つ標徴なり。彼等の心は常に安からざるなり、穩ならざるなり、樂に譬ふれば音律甚だ調はざるものなり、是れ年齒不相應なる心を以て心とするが故なり。されど見捨づべからざるものは此種の小兒なり、否却て行末大に頼母敷ものなり、彼等が藏する所の心琴にはさすがに共鳴すべき猶幾多の弦線あり、導く者養ふ者茲に鑑みて和調一律是れ彈すれば則ち彼等が藏する所の心琴は應じて共に鳴るべきものなり。碎き説かん斯る小兒には一面極めて善良なる性状の存するものにして此良性こそ治療上訓育上吾人の適に逸すべからざるものなれ。彼等は甚だ高慢にして不似合なる榮譽心を懷くものなり、故に吾人若此特性

を蔑視せずして却て巧に之を利用し、彼等を遇するに立派なる理性的一
 個人を以てする時は元と推感性なる彼等、此處に便ち其美性を發揮して
 其長處を育成し、所謂心琴相和して妙調亂れず、吾人は治療の目的を達
 し、彼等は病苦の絆を脱し、猶且望外過分の果を收むるを得るに至らん。
 生れて既に濃厚なる遺傳素質を負へる神経質性小兒すら治法一度適は
 い猶ほよく得て之を其危きに濟ふを得るものなり、然るに素因未だ甚だ
 深からず治望亦隨て大なる場合に於て思遂に此處に及ばず、剩へ教養宜
 を失し化育至らざるが爲、漸く導て兒を其危きに擠すが如きは谷固より
 是が養育の任に在るものに存し、誠にあたら後生をして見る、廢弛無
 用の材たらしむる惜みても餘りあることどもなり。年壯にして猶放蕩淫
 逸、酒に沈み色に耽り身を忘れ家を顧みざりしもの、老いて釋然己に歸
 り、嚴整自ら持し謹直人に接し、酒を退け色を遠け、高潔真に冒すべか
 らざる父老と化し以て其子女に臨みつゝ、然も其子等の何時しか等く放
 逸淫亂、さしも嚴格なる父老の目を盗み、さしも適切なる慈父の訓戒を

も遂に顧みざるに至るは吾人が多く見る所なり、悲哉此種の父老は業
 己に拭ふべからざる病的素因を以て先づ彼が遺産の基となし、是に加ふ
 るに非行悪習、敢て之を朝夕彼子等の聞く所、見る所に於て行ひ、元と
 軟弱なる頭腦を養ふに根本的誤れる教養の道を以てし、因習漸く深うし
 て進んで彼等の性となり、遂に回すべからざるの時に至りて始めて翻然
 悔悟、一轉して全く別人の如く化し、乃ち心を子女陶化の重きに傾くる
 に至りしものにして、是れ猶ほ秋に入りて菊作らんことを思ひ立ちしもの
 類にして其甲斐なきも怪むに足らず、其悔の及ばざるも亦宜なり。總じ
 て放逸自ら害ふが如き人々は大方多少神経性素質を有するものなれば其
 の子等の生れて亦同様なる病的急坂に臨むは免るべからざる所なるを、
 まして放恣乖戻の習、之を風化して絶ゆることなく、愈進んで其急坂に
 擠せるの時に於ては害果の既に深甚にして復た救ふべからざるの域に達
 したりしものなればなり。實に憐むべきは神経質性小兒にして慎むべき
 は是が教養訓育の道なり。之を警ふるに神経質性小兒は温室内に於ける

植物の如し、培養保育少く至らざる所あらば則ち枯凋落去、空く美容を
 收めて果敢なき一生を終えん、然も補育擁護其宜きを得るの時に當りて
 は長生繁茂愈著くして花實亦益見事なるものあるに至らん。

婦人にして神経質なるものは其妊娠中一段の注意を要するものなり、
 只さへ感應劇き此期に於て撞に興激悶躁自ら省ざる時は禍累立に其子に
 及びて兒も亦頓て刺戟性興奮性となり、等くあさましき一神経質者たる
 べきものなり。然れども遺傳の事たる、決して單に受胎、妊娠の時より
 始るものにはあらずして父たり母たるもの、過去幾多年に互りて蒐集育
 成せる身神二界の濫蓄の、種々様々なる配合に於て、現れて後代に發す
 るの現象を云ふものなれば、其發呈の真相に至ては吾人の到底思議すべ
 からざる所なり。只既に發すべき遺傳的素質の濃淡を支配し其發呈の早
 晩を左右すべきものは即ち是あり、受胎時に於ける母の不謹慎及び養育
 教化の適不適等然りとす。故に吾人若し後生の爲め、傳ふるに美果を以
 てせんことを冀は、先づ日常生活の間に於て須臾も注意を空うすること

なく、身を養ひて健康強壯、心を養ひて清淨潤達、而して婦は殊に意を
 妊娠時の攝生修心に留め、而して生れし所の子女は既に襁褓の裡より之
 を善良なる習に慣れしめ、撫育且陶化以て有終の美を成さしむるに努め
 ずんばあらず。若し夫れ茲に鑑ることなく放縱自適只夫れ成るが儘に任
 する時は傳はる所の素質は元より善美ならず、まして養育訓化の道亦宜
 きを得る能はず、此に於て成長せる子等は自ら放逸自恣の人となり、子
 として固より其父母に孝ならず、剩へ自利の念、我慢の心時に横溢して
 禁する能はざるに至りては父子相持して互に譲るなく論争舌戰遂に相容
 る、能はず、茲に端なく一家の紛亂を極め、家庭の團欒を頽ち、人生無
 上の不幸を醸すに至るものにして、然も此の如きは屢神經質なる家庭に
 於て演ぜらるゝ一場の悲劇にして吾人の敢て珍となさざる所なり。

夫れ右の如く神経質の遺傳は常に該の一人の不幸たるのみならず一家
 の禍福直に與り、延ては人倫を亂し、社會を毒するものなれば、人の父
 たり母たるものは宜く深く茲に見つゝ、身を愛し心を慎み以て後生至大

の福を圖るべきなり。一面又不幸にして神經質性素地に生れたりとて便ち自ら己を抛ち自免自暴身を愛せず心を恣にし放縱自ら制するなきが如きは甚だ誤れり。神經質は不治の病にあらず、況んや其未だ大に發せざるの時に於てをや、自ら早く遺傳的素因あるを知るものは嘉すべし治すべし、知つて然も己を治するをなさないは渴者の泉に臨んで掬せざるが如し、掬せず飲まず渴奈何ぞ醫すべけん、否渴の途に醫する能はざるのみならず、其身衰へ其生亦頓て危きに至らん。神經質者亦然り、既に自ら病的素因あるを知り、乃ち之を治し易き始に於て治せずして治し難き末に至りて徒に哀訴吾人の救を乞ふ、何ぞ其慮の及ばざる、況んや自暴自棄自ら驅て自ら愈病苦の深きに入る、寧ろ憐むべきものなり。吾人は斯の如き人々に對し常に切なる望を懷くものなり「思へ、卿が病は卿一人の禍にあらず、而して卿が福は一家社會の幸なり、卿若し世を愛し家を思はば先づ治すべきの病を治し以て一身、一家、社會の幸福を求めよ、何ぞ其行ふに易くして得る所の大なる卿夫れ思へ」と。

二、誘致的原因

神經質の三因中最も繁くして最も有力なるものは誘致的原因なり。其起るや既に一人の初生時期に於てし然も其終るや彼が死し去るの時に達せざれば歇まず。洵に人の生涯は間斷もなく斯の危機に臨むものなれば周到なる注意と綿密なる考察とは吾人の須臾も忽にすべからざる所なり。今序を追ふて本因由來の狀を叙し併せて其及ぶ所の影響を述べんとす。

乳兒期。神經質の誘致的原因は既に此期に於て始る而して與りて其全き責を負ふべきものは獨り母親なり。世の年若き母は唯に其子を愛するを知りて之を養ふの道を悟らず、之を見るに掌中無二の璧を以てして只其失墜碎くるなからんことを冀ひ、燃ゆるが如き熱情の央、賞翫愛撫猶至らざらんことを恐れ、昏濛迷溺遠く兒の將來を慮る能はず、泣かば則ち懷き、呼ばば則ち擁し、身を碎き思を焦し暫も安んずること能はざるを以て善良なる慈母の天職なりと誤信し、乃ち甘んじて愈身神を煩雜不寧の境遇に行り、獨り自ら良母慈親を以て任ずる、寧ろ憐むべきものな

り。凡そ兒の母たるもの、果して右の如くする時は兒は自ら其母を目するに事實上一種の奴隸を以てし知らずくの中、「母は實に吾あるが爲に此世に在すものにして正に吾僕たり婢たるものなり」と覺悟し、渴しては泣き醒めては呼び、輕微薄弱なる慾感動かば則ち喧噪して其優しく且從順なる所謂僕婢を呼ぶに至り、端なく彼が感應性の充進を致すものなり。此の如きは兒に神經性素因なきの時に於てすら且偶然り、況んや其是にあるに於てをや。

されば世の母、深く茲に鑑み、愛撫措く能はざる其子をして今より後身神並び強健にして、長く人生の幸福を得せしめんと欲せば宜く先づ自ら省みて行く方途なる子女養育の道を誤らず、即ち常に情的愛溺の巷に惑はずして導くに智的理情の道に於てし、所謂執着煩纏却て禍を將來に貽すべき化法を退けて淡泊不羈の裡に養はずんばあるべからず。蓋し熱情は激流の如し、流に従ふて進まば進んで止まる所なく、従ふて勞することなく、然も流末様々に亂れて従ふもの遂に一定目的の地に達する能

はず、人の熱情に従ふて行ふも亦同じ。而して理性は山路に似たり、是に従ふて行ふは山を行くが如く、行くもの甚だ勞すれども行て止まざれば遂に其目的に達するを得。今の若き多くの母が其子を養ふて誤るは激流に沿ふて進むが故なり、山路を辿りて行かざるが爲なり、豈亦輕視すべけんや。且夫れ子女教育のことたる、其始むべきの期決して彼等が理解力の發育を待つべきものにならずして誠に襁褓の裡、搖籃の時より既に是が教養育化の道を開かずんばあるべからず。今の若き多くの母が其子を養ふて誤るは思ふに及ばざるが爲なり、亦注意すべきことならずや。

小兒期。乳兒期に次る一期を小兒期となす、小兒期中特に心すべきは後半幼稚園期なり、本期は一人が教育に入るの門にして又實に最適の時なり。智育始めて開かれ概念構成の力此時より生じ、圍童相集まりて互に最新經驗の交換をなし、得る所の印象日と共に新にして又日々に加はり、記憶財寶愈豊にして智養漸く擴ろまり。眞に人間一生最快の一期なり。

洵に追想今更の如く樂く涌て禁すべからざる者は此期圍童當時の月日なり、宿題課せられず試問なく、心に一朵の墨立たず身に一物の拘束だもなく、嬉々として歌ひ戯れ、遊び暮し、げに樂土天堂、歸るを忘れ行くを急ぎ、行て嬉遊談笑の間、茲に自ら得し所の印象は今日知名博識の大家に就き學び收むる無限の大知見にも勝りて有要不朽なりしものにぞ。凡共同一致は事物の進歩を促すものにして道に侶あり、爲すに類あるの時、勉めて倦まず、行いて疲れざるが如し、幼稚園の眞價は共同齊進の實あるにあり、之を手近き例證に徴せん、子女多き家庭に於ける養育の結果と只其一人に對する育化の成果とを比較するに後者の甚だ不成績なるは常に見らるゝ所なり。而して兄妹多き家庭に於て、嬉友相集へる幼稚園に於て猶且つ育成教化の効揚らざるものは即ち是れ異常性質を負へる小兒にして、此種の者、多く所謂神經質者の前身たるものなれば、此に至りて吾人は十分の注意をなさずんばあるべからざるなり。要するに幼稚園期は疾病誘致の時にはあらずして寧ろ身神保安の時期

なり。而して進んで其次期に入るや事態移行行て心的惱惑亦此時より萌し神經質の誘因漸く迫るに至るなり。少年期。期は所謂小學校期なり。兒の此期に入や心配漸く至る、宿題を懐ける心配、試験に對する心配等はなり。吾人を以て之を見れば事固より輕易笑ふに堪ゆべしと雖ども彼等少年の少なき胸に對しては千斤の重り萬斛の谷も亦重ならず、煩悩苦慮甚だ惑ふを常とす。是れ蓋し彼が既に責を思ふの心を懐き、爲に自ら己を責むるの重きより來るものにして、吾人は是によりて彼に義務心あり、良心あるを證するに足るものなり。然れども元と小學の課程たる只兒をして一般基礎考慮を懐かしむるを以て目的となし、事物の概念領會を得せしむるを以て要旨となせるものなれば、假令之を苦むること強くして之を惱ますこと大なりと云ふと雖ども未だ彼をして疲憊の極病巷に迄至らしむるに足らず、是れ此期に於て神經質者の未だ甚だ多からざる所以にして聊か喜ぶべきことどもなり。

青年期。即中學校期なり。少年一度小學の庭を辭し進んで中學の門に入や學科順に増加し、程度は大に高まり。宿題日に繁くして試問愈難く専ら力を智的教育的の急なるに奪はれ、體育德育自ら第二第三位に置かるゝに至り、神經質誘致の危き此處に於て漸く加はる。試に此期に於ける教課の状況を見るに、語學、數學、地理、歴史より動物、植物、物理、化學に及び各科相連りて終日寧時なく、而して體操の如き脩身の如きものは一週に亘りて爲に僅に二三時間の費さるゝのみ、若し夫れ校試採點高下より定めらるゝの時に當りては學績單り抜かれて常に重過視せられ、體操は固より修身科の成果と雖ども猶ほ其下に列せらるゝの有様なれば之を奈何ぞよく一人の精神上過勞を避くべけん。思ふに此期に於ける人々の頭腦は猶ほ未だ固より熱せず、然も青雲の志徒に燃えて進取の氣甲斐なく熱し、架空の念、昇天の望切に其一圓を攪亂するの時に當り、一面端なく其作業上過渡の狀態に齎さるゝを以て全腦震起轟然として寶山無窮の悠途に上り、盲進して止る所なく、遂に自ら驅て病衢に赴くも

の比々皆是なるは痛嘆措く能はざる所なり。神經質の誘因として此期に於ける教課實況が至大の力を有するは尚に右の如くなり。而して吾人は猶茲に一種助勢的有力なる誘因あるを見る、教師に概ね心理學上の智識乏きことは是なり。師等は誠に教程示す所のまゝ、孜孜として教へて他くことなく、各其専門に従ひて徒に學徒を獎勵鼓舞し、相競ふて一向各自の教授成績を擧げんことを努め、教師として一面可は固より可なりと雖ども、然も一面翻て生徒の會得能力を願るをなさず、爲に便ち過者如不及の悔を醸し、得る所其勞せる所に當る能はず、否勞して管に効なかりしのみならず多くは却て害果を彼等の軟弱なる頭腦上に及ぼし、導て之を病的危地に至らしむるものなれば、教を此期の學徒に垂るゝものは宜く意を茲に留め、靜に先づ生徒の心的機轉を觀察し、進んで其會得能力を測り、是に授くるに過分の負擔を以てせず、以て徐に己の天職を完ふせんことを期せざるべからず。況んや將來國家社會の有用なる巨材ともなり得べき青年を教養するものにして既に自ら神

經性素質を有し、刺戟性にして興奮性に、時に各なき生徒を譴責叱咤するが如きあらば、是れあたらず未來の良材を其嫩芽の中に挫くものにして分を忘れ職を無し人を害し世を損ふものなり。

吾人は此處に至りて重て本期に於ける神經質の誘因を序列せんとす。

試験により宿題により餘儀なくせらるゝ精神的過勞、教師に心理學上智識の乏き、身體練磨の不足なる、道德上訓育の至らざる、及び教師の神經質なる等是なり。

成年期。此期より人々各専門の學堂に向ふ、法學に醫學に、理學に農學に、工學に文學にそれ〴〵方を異にして進む。而して學林愈深うして學業益難く、晝夜兼ね勉めて猶及ばざるの有様なれば學生の負擔は此處に其重きを極むるに至る。若し夫れ學期の終り、學年の末に於て一期一年の學事の試験せらるゝに當りてや、學生一般、日頃既に疲れ來し彼が頭腦に猶ほ一撃終局の鞭撻を加へ、日を通じ夜を徹し、奮勵拮据猛動突進して流石に花々しく此難關を擊破せんとするも、悲い哉望んで業已に

意の如くならざるものは彼が頭腦の働にして、苦戰功ならず僅に身を完ふするを得たるを以て足れりとせざるべからざるもの大方是なり。況んや平素怠り勝に月日を過し來しもの、一朝果然此難場に臨むや今更の如く驚惶騷雜、茶を飲み、珈琲を喫し、遽に神經細胞興奮の道を講じ、勇奮鼓舞一蹴以て此試場を突破せんとは思ひ立つも、如何せん過度の刺戟過度の興奮により忽ち衰憊せる彼が神經細胞は早や茶にも珈琲にも應ずる色なく、心界濛々として會得の力領會の能並び衰へ、胸中單り燃えて煩惱徒に迫り、乃ち恐怖の念湧き、苦悶の情溢れ神經質發呈の危機此處に至りて極まる。

夫れ右の如き時に當り幸にして辛くも身を以て危急の場を免るゝを得たりとも、總て斯くして學び、斯くして記憶せるものは試験の終ると共に頓ては消ゆるが如く忘却せられ、寔に勞のみ多くして收むる所の効果殆んど是なきものなり。蓋し彼がしかく倉皇蓄積せる總ての記憶は一として苦を含み痛を伴はざるなく、隨て其再提は同時に復た當時の苦痛を

新にするものなるが故に、此際所謂記憶亡失の如此早きは彼が寧ろ好んで之を捨つるによるものにして然も之を捨つるは固より將た其伴ふ所の苦みを忘れんことを希ふが爲なり。

壯年期。成年期去りて踵ぎ來るものは壯年期なり即處世期なり、期間神經質を誘致すること甚だ繁きは然も其最初時なり。

願ふに過去二十餘年、學林いや深く辿りて望を千里の遠きに馳せ、徒に未來の大成を期して立身發達の曉を夢みるは所謂幼年性豫期錯覺を有するものゝなす所にして、彼が捺望する此世は公平にして律義に、善美にして圓滿に、而して彼が志す所の寶山は世にも貴き樂土にして幸の花咲き、譽の香深く、實に心ゆく一面の景色として彼が眼に映するものなり。憐むべし彼惑へるもの、之を望み之を仰ぎつゝ、惚焉歸るを忘れて進み行く間に、學の林漸く盡きて世路遶々其前に横はるを見るや、乃ち蕪然地を蹴つて進まんとすれば、思ひきや公平なり善美なりと思ひ詰め來し此世の、あはれ全然彼が豫想、彼が期望とは異なり、邪道多岐妄に行

人を惑はしめ、虚妄奸佞途を塞ぎて公義正道地を拂ひ、生存の競ひ、進取の争ひ、日として夜として絶ゆることなく、盡くることなく、樂土と望みし寶山邊は思はざりけり修羅の巷にして、幸の花、譽の香と頼みしは思はざりけり鋒先の火花、血潮の臭にてぞありければ、彼若者の驚き、一方ならず、迷惑昏亂爲す所を知らず此處に端なく神經質の誘致せらるゝものなり、宜なる哉爾來久く樂しき麗しき空想的豫期錯覺の論となり、世上百般無限の極苦は之を夢想だもせざりしもの、一朝忽焉世路の一方に立ち、思ひも懸けざりし此慘状を目撃し、意外突飛の感に打たれたるの有様なれば、彼が心の混亂錯綜せらるゝも亦其處なり。是れ神經質誘致の原動の此期の始に於て殊に甚だ劇しき所以なり。

總じて此一期は人間一生の實行的最要時にして、名を立て業を遂げ、世を益し人を濟ふの大事も皆此間に於てせらるゝものなれば、一人一心の勞苦は實に此時に至りて極まるものなり。

殊に小學教師の如き劇務繁多休養の暇なきもの、大商銀行家の如き煩

慮心に絶ゆるなきもの、郵便局員の如き、料理人の如き立ち居て長く其業務に従ふもの、或は絶え間もなく聴官に於て外來刺戟を受くる所の電話交換手の如き、或は夜業を事とする所の工夫工女の如き、すべて久く身神を過勞ならしむる所のものは神経質の急坂に臨み其身一段の危険に置かるゝものなり。

猶ほ各年期に於ける榮養の不給、貧血及び脂肪の過多なるは何れも看過すべからざる身體上誘因にして吾人の且屢遭遇する所なり。

洵に文明歡呼の裏面には生活難の悲鳴あり、綺羅麗麗の世の中には生存競争の亂れ潜み、生を受け身を保ちて此世に在るもの、徒に只飯を追ふて苦み、水を求めて勞するのみ、彼れ若者が捺望せる樂土、夢想せる寶山、夫れ果して奈邊にか得求むべき、心に一朶の慰藉なく、身に千斤の重きを負ふ所の現代大方の人々、之を奈何ぞよく神経質由來の難に免るゝを得ん。

右の如く煩劇なる當代一世の風情は神経質誘致の原因として正に重く

且大なるものなれば此世に生れ此中に活動する所の大方は其身の終生除くべからざる危難に臨めること須臾も忘るべからざるなり。

頃者世に厭ふべく恐るべき流行あり、自ら進んで神経質者たるの習是なり。彼等は神経質を以て文明開化の標榜なりとなし、精勵拮据の結果なりと思爲し、神経質にして始めて文明の民、勤勉の人たることを得るものなりとなし、之を目するに開化病を以てし、之を患ふるものは所謂文明病者として却て羨稱愛護し、而して其神経質、其開化病、名は以て當代一人の飾となすに足るものなりと思ひ誤り、偶身に輕微僅少なる一標徴の現はるゝあらば則ち擧て之を云ひ觸し行ひ散し、得々として自ら當代文明の權化なりと誇り、然も其身に病あり其病の輕からざるを憂ふるを忘るゝもの甚だ多きは吾人の見て常に異とする所なり。蓋し斯の如きは大方業已に神経質性素因を有するものゝなす所にして、一面徒に名を張り實を衒ふをこそ爲せ、他面甚だ恐病性にして且感應性なるが常なるより、時を歴日を重ねると共に諸證交發して自ら亦是が糾累を覺ゆ

るに至てや、其心も扱漸く平なる能はず、此に於てか元と自家推感性な
る彼が身には恐怖愈深うして随ふ所の證候益繁く、遂に驅て自ら眞個重
篤なる神經質者となり、群證雜然齊發して煩惱措く能はず、始て悔悟臍
を噴の及ばざるをなすに至るものにして、其心事たるや又憐むべきなり。
終に一言附加すべきものあり、増進せる推感性なるもの亦輕視すべか
らざる神經質誘致の原因たるべきこと是なり。夫れ人は生れながら多少
推感性なるものにして是に一定暗示の與へらるゝ時は心氣自ら傾き推感
漸く動くものなり。故に甲あり乙を評して「乙よ卿は果して何の病
ぞ、姿勢振はず、元氣添はざるは何が爲ぞ」と云は、云はれし所の乙
者、必ずや推感不安の念を惹起さん、況んや甲者一匹の醫家たりし時に
於てをや、猶況んや乙者既に遺傳性神經質素因を有し隨て幾分増進せる
推感性を有せる一人たりし時に於てをや。若し夫れ此の如き人にして醫
家一般の口より神經質流布の聲を聞くに至りては忽ち推感反應して諸證
漸く動き頓ては較著なる神經質の禍巷に迄進むに至らん。されば吾人は

又常に茲に鑑み妄に此種の病稱を口外して徒に人を病衢に驅るの危を爲
さざる様注意せざるべからざるなり。

三、解發的原因

解發的原因は大體二様に分たる、其精神上なると身體上なるとの二者
是なり。而して精神上解發的原因は殊に此處に重視せらるべきものにし
て興激、憂悶、驚愕の如き皆是に屬す。蓋し此種の原因は假令強甚なり
と雖ども未だ單り以て神經質を發呈せしむべきものにあらず、素質業已
に存し、誘因之を促し、而して本因是に乗じ、茲に始めて吾人は神經質
の發現を見るを得るものにして、其原因中終局にして切烈なるは云ふ迄
もなければ未だ最強最要を以て目すべきものにはあらざるなり。
斯くて一定病的の素地に生じ久く誘致的原因の侵害を受け來しもの、
不幸にして偶此等數種の精神上解發的原因に遭遇するや輒ち神經性症狀
應じ發し、乃ち諸證錯落交現はれ、因系一衝行極まりて本症漸く成るも

のにして由來世上の大方が以て眞個一頓の神經質原因となし、唯に之れを禦ぎ之を除くを以て一結完全なる神經質の豫防法と思惟せるは誠に誤れり。然れども本症成否の界をなし、一人安否の決を定むるものは兎や角此一因たるに他ならざれば神經質の原因を究めんと欲するもの又此處に十分の意を用ゐずんばあるべからず。

蓋し興激は概ね一時性速過的なるものなるが故に神經質發の一因として未だ甚だ恐るべきものにあらず。而して憂悶驚愕兼ね至るの境は正に是れ究竟なる解發的原因たるべきものにして、彼れ一人が卒業試験に落第せるの時、彼れ慈母が最愛可憐の一子を喪へる時、彼れ商賈が一頓巨財を蕩失せるの時、或は妻が夫の死に臨み、子が親の病に侍るの時、或は非冀一敗、其身の地に墜ちし時、或は突如意外の非報に接し、意外の災禍に遭遇せるの時等皆然らざるはなし。時ありては甲斐なき取越苦勞の爲自ら求めて神經質者たるもあり、今健在の母が遠き死去の時を思ひ遣り妄に憂愁屈托しつゝ以て端なく神經質者たるもの其一人なり。試

場失敗の恨を豫想しつゝ、煩悶苦慮、脆くも神經質者たるもの亦其一人なり。或は己が天稟の才を認めず勿體なくも一身未來の蹉跌を妄慮する技術家もあり。或は徒に來年の吉凶を苦に病みつゝ、故なく鬼に笑はるゝ神經家もあり。或は久敷非分の榮職を覬覦しつゝ來しもの、終に其望を達する能はざりしに至り遺憾茲に凝りて淡くも一箇可憐の神經質者たるもあり。

要するに以上は總て心的損傷なり、形なく力遍き害物なり、只其侵犯亂逆の状同じからざるのみ、一は求心性にして即ち外來刺戟なり、他は自發性にして即ち内的刺戟なり。抑神經質者は甚だ被推感性にして又甚だ自家推感性なり。彼が外來刺戟に感應すること異常に強くして其極病者たる程なるは彼が甚だ被推感性なるが爲なり。彼が妄に愛に耽り、甲斐なく未來を豫慮して遂に自ら病者たるに至るは彼が甚だ自家推感性なるが爲なり。蓋し此被推感性、此自家推感性、其名は自的、他的、相異なるが爲なり。なれども其實同體一質にして本末一條因果相連り、所謂彼が甚だ自家推

感性なるが故に又甚だ被推感性たるに過ぎるものなり、故に二者名の互にかくも分るゝは只刺戟の由來出處に係り、歸する所は殊果一經齊く人を一神經質者たらしむるにあるのみ。説きて此處に至れば吾人は神經質の精神上發的原因を以て單に一人の自家推感性充進に歸するを得べきのみ。

身體上發的原因も亦様々是あり。あらゆる身體的過勞、酒類、煙草、茶、珈琲の如きすべて嗜好品の濫用。其他生活狀態の過荒性なるを始とし急性傳染病即チフス、インフルエンザ及ぶ赤痢等。或は慢性疲憊性疾患、殊に慢性なる消化器病。或は痲病、微毒の如き生殖器病。或は糖尿病の如き體質性疾患、稀には鉛中毒、水銀中毒若くは過度の房事、過度の淫淫乃至は分娩授乳の頻數なる、或は多少強度の外傷に至る迄數へ來れば實に一々枚舉に遑もなき程なり。

第三 本 體

神經質の諸證は常に普く身神二界に發現すれども其本體に至りては單り心界一面のみに於て存するもの、如し。由來神經質とは一種精神上の特質を稱するものにして然も其の特質は全く一人の意識狀態に係り、其内容たり其要素たる幾多觀念の動靜如何に關するものなれば神經質の本體は蓋し此處に至りて始めて求め得らるべきもの、如し。只見よ一神經質者の意識界を、實に何者かあの深遠幽妙なる心の林に彼が荒みの斧をぞ振ひし、變幻微妙、洵に思議すべからざる其意識を弄して數奇様々の姿に現じ、變じて乍ち幽暗凄蒼なる悲と化し、化して乍ち消魂極樂なる淨土と變じ、吾人をして驚嘆轉た措く能はざらしむるものは夫れ果して何の力ぞ。おゝ此の幻劇、此怪力、見るもの只管眩愕徒に精神機轉の靈妙不可思議なるに心奪はれ、敢て進んで是が淵源本體を求むるに努めず、茫として只濃味糝糊の裏にのみ看過ごし來しもの、現代科學の急進は頗る諸般の疑を解き、吾人をして又釋然神經質の本體をすら且悟らしむるに至れる、誠に文明の澤、進化の賜、以て謝すべく以て慶すべきなり。

然らば其所謂神經質の本體なるものは果して何ぞ、曰く是正に一定誤妄の觀念群にして然も其坐する所は即ち一人の意識界たるべきものなり。思へば嚮に幻怪解く能はざりし渠魔力は端なくも此等誤れる一群の觀念たりしものにぞ。此に於てか吾人は右記神經質の本體が活轉解發するの真相を明ならしめんが爲、先づ一人の意識が發生長育するの順序を叙し以て其特殊官能たる記憶の本性、其至要元素たる觀念生成の狀を示し、進んで其名の神經質なるもの其實の現する所と甚だ相當らざるの一事に及び、結ぶに一言本症の定義を以てせんとなす。

夫れ意識は一人の精神現象中最も幽妙怪訝なるものにして吾人の容易に端倪すべからざる所なりと雖ども、其存在と妙作とに至りては各箇自家の經驗上皆既に人の認むる所なれば、吾人は今より筆を起して其由來と其本性との概要を陳べ、以て聊か神經質本體の理解に資せんとなす。

抑吾人の一個意識を構成する所の總ての要素は感な外界より五官を通じて集まるものにして其發育長成の狀を見るに、生れて正常健康なる一

兒は常に先づ完全なる五官器を具へて此世に來る、彼が五官器の既に完全なるが故に彼はよく外界すべての現象を感受することを得、然れども彼が頭腦は未だ全く幼稚にして固より何等格別なる精神的資料をだも之を己の有となさず、單り外來無限の印象はよく之を受けよく之を蓄ふるを得るの能を懷くのみ。されば一人出生最初の時に當りては、彼が意識界は殆んど全く虚空皆無なりと稱すべきものなり。然るに生後一日と進み、彼が各官の末梢感覺面即各五官器に於て逐次一定の外來刺激を受くる時は當該各五官面は其都度興奮せられ、乃ちそれ一局部の神經を介し越て直に之を其中樞五感面に致し、此處に再び相當適應せる中樞性興奮を惹起するものなり。蓋し中樞五感面とは吾人の所謂意識界なり。而して此意識界に於ける中樞性興奮は即ち吾人の通常感覺と稱するものにして一人の精神機轉中實に最元素なるものなり。然れども各箇單一の感覺は假令強甚なりと雖ども其最初に於てはよりて以て一人よく各刺激原體の形態性狀を領解し且之を知得判別し得るものにあらず、其之を

感覺すること頻數に、其既に感覺せる幾多興奮像の相集まり相列り、始めて原刺戟體の何物なるやを覺え、且其性狀の如何なるやを明知し得るものにして吾人は精神的斯る領域を知覺と名く。故に一定の知覺像は幾多感覺像の綜合聯結にして、即ち其處によりて排列せられ、其時によりて連續せられたる一箇明白なる精神的現象たるものなり。夫れ右の如く吾人の意識は外圍様々の刺戟により物毎日毎愈其内容資料の豊富を致し愈其成育圓熟を極むるものなり。若し夫れ眼を轉じて意識界上、精神資料育化の狀を望まば變幻奇妙其技の遠く天爲に出るに驚くのみ。扱も一度五官を通じて此意識界に達せる萬象は初め只各靜に其處に就き、混集雜屯、然も寂として動かさず、一場落莫怡も死像並ひ伏すの悲をなすもの、心界一圓漸く發育の度を高め行に連れ、此等幾多の廢象死像不思議ややをら其身を起し、活氣漸く加はり動勢自ら發し、時を歴日を重ぬると共に滑轉運輕愈容易に、即ち時に一定美妙の順序に於て排列し、時に一定巧奇の組合に於て屯集し、或は互に相和し相應じて其勢を強め、或

は互に相距り相分れて其力を弱め、離合集散愈巧に、活轉分列愈速に、以て益新珍複雑なる無限の活像を構成し、益所謂高尚遠大なる觀想を組織するものにして、吾人は此處に至りて始めて眞個活動的完全意識を見るを得るに至るものなり。斯の如きは誠に吾人意識の特獨無二の現象にして是れ然も吾人が日常自見實證する所なり。猶ほ見よ一步を進めて吾人意識の本性を、一度五官末梢の感覺面を刺戟し進んで意識内に到達せる外來印象は既に其五官に於ける刺戟作用の廢退せる後と雖ども決して全く共に消散し去るべきものにあらずして剩へ外界刺戟原體の特性さながらに供へつゝ、留りて久く吾人の意識内に印するものなり、人は之を記憶と稱す。而して斯くも印象せる外來様々の刺戟像は茲に一種特別の精神機轉起り其再び發動して本來の五官的印象を供ふるに至る迄は、如何にも靜に意識園の下に潛み、敢て興發現起するが如きこと是非なきものなり。然るに動機勃然心界に現はれ、端なく一定特殊の精神機轉起るの時に當りては、爾來潛在隱伏せる一群の印象

は齊然として復活再生又其舊像を發現するものにして、然も此再生復活の像は性狀共に全く本來の刺戟像に等しかれども只其強度に於て聊か薄弱なるを示すものなり。意識は又實に斯る不可思議なる機能を有す、之を追想と云ふ、前記記憶と共に寔に意識の本性をなすものなり。意識は業已に斯る美妙なる本性を有す、而して此所謂意識の原素的特質たる、之を其實際の作能に見るに陸續進み來る無限の五官印象を迎へて各其向ふ所に就かしめ、敢て徒に濫集濫蓄するを爲さず、整序羅列一團亂れず然もよく臨機應變巧に伏起自在の術を行ひ、行ふて猶ほ恒久不斷の働を遂ぐるが如き、正に是れ靈妙神技其極に達したるものと謂つべきなり。意識の働は實に前述の如し而して其作能によりて其内に蓄藏せられたる幾多の意識元素を吾人は名けて觀念となす。觀念の意識内に坐するや常に二様の状態に於てす、一は現在觀念と云はれ他は潜在觀念と稱せらる。潜在觀念とは所謂無意識觀念にして記憶により意識内に印象蓄積せられたる總ての伏在性精神資料を云ひ、現在觀念とは所謂追想の能によ

り新に吾人の意識内に再提復活せしめられたる記憶像にして現在吾人の明かに意識する所の觀念を云ふ。抑觀念の本體を尋ねるに洵に是れ純精なる一精神機轉にして外界に於ける刺戟源泉即各刺戟物に相當し、全然一箇の精神的關係に於て現はれ、然も其既に五感的關係を脱却せるものなり。斯くて觀念は意識官能終結の美果にして最も高等なる精神資材に屬すべきものなり。夫れ吾人は知覺によりて觀念を生じ、觀念を以て知覺を集むるものにして觀念漸く生じて知覺愈繁きを致し以て益高尚複雑なる觀念をなすものなり。之を要するに吾人々類は先づ感覺によりて知覺を得、知覺よりして觀念を起し、之を集めて考慮を生じ、因りてよく事物を批判識別するに至り、道徳の念、美術の心、以て吾人が萬物の靈長たるを標榜する所の最高等なる感情も感な夫れ此成熟せる觀念の權化にして進んで茲に至れば生ずる所の觀念亦悉く抽象的となり其刺戟も全く内界に發し既に決して之を外に求むべきものにあらず。向一人の性質も一人の人格も、此精神的極位に於て始めて成るものなれば觀念が一

精神界即意識界に於て如何に重要なる根基をなすかは以て見るべきなり。説き來りて今や吾人は意識の本性を知悉するに至れり。再言すれば意識は萬象の化身なり、宇宙萬象なかりせば則ち意識あるべからず。之を重ねて健兒が發育の狀に鑑みるに其始に於ては彼が意識の常に彼が外圍に適合するを力むるを見るも、此兒漸く長育して其頭腦亦愈發達するの域に至れば彼が意識や亦漸く彼が外界四圍と親和して敢て強ち是に適合するを力むるをなさず。若れ夫れ圓熟せる一意識團をなすに至りては剩へよく外圍を左右して自ら修整調和し行くの機能を備ふるに至る。蓋し一人此域に達せる意識を懐くもの吾人は之を完全なる一箇人と呼ぶ。而して意識が果して此處に達するを得んには先づ左の二件を以て其前提となさざるべからず、一に曰く一人の五官器及び是と關聯せる末稍中樞兩神經系統の發育正常なること、二に曰く意識の育化を鼓舞する所の外來刺激の進達絶ゆるなきこと即是なり。故に生れて尋常健全なる一人と雖ども出生以來之を全く彼が周圍萬象より遠くする時は彼胡爲そよく尋常一

個の人となるを得ん、知るべし無能無知に禽獸と齡するに至らん。譬へ見れば弾くに人なき樂器の如し、其器如何に精巧完美なりと雖ども名手の一度其弦に觸るゝなくんば遂に破筐亂麻と何ぞ撰ばん。若し夫れ一人の五官器及び全神經系統の發育正常ならざるの時に於ては、其意識發育に關する固より前者四圍皆空の時と異なるなきなり、是れ猶ほ一人が劣等破壊せる樂器に對せるに似たり、樂師の妙手不世出の技を振ふと雖ども焉ぞよく佳調名律を發して妙趣茲に人心を奪ふを得ん。元と大脳組織の發育長成するや極めて複雑にして極めて精巧なるものなれば其各個人に於て常に必ず同一の組織を以て完成せらるゝは望んで達する能はざる所なり。斯くて是が構造に於ける大同細別は便ち此に相當せる官能の差別を伴ふものにして所謂各個人性の分るゝも亦重に此に基因するもの如し。然も一大脳官能の高下は其序列に従ひて又愈各個人間に於ける差別を顯明ならしむるものにして其最簡單なる感覺、最普通なる運動、乃至最元素的判斷及び決定の如き、總て單一元始的大脳官能は人々全般

に互りて概ね同一様なるべしと雖ども、其完全なる發育を遂げたる意識作能、即複雑なる觀念深遠なる考慮、乃至は最高なる審美道德の念の如きものに至りては吾人は其各個人間に於ける差別の甚だ較著なるを見るを得べけん。夫れ人は顔面相貌の各同じからざるが如く其精神的内相亦皆同一なる能はず、萬人萬別、千者千差茲に自ら各精神上個人性特質の發呈せらるゝものにして彼の精神上正常なり、中庸普通なりと稱せらるゝが如き一個人は吾人之を理想的にこそ定め得べけん、之を實際正確に指示さんと欲するも能はざるなり。此に於てか人若し世上萬人の精神状態を通過する時は誠に千差萬別、上は天才神機の高きより下は癡癲白痴の低きに及び、其間然も無限無數の差別を示しつゝ遂に所謂純然たる精神的正常状態なるものを求め得ずして終らんのみ。而して吾人は此前記兩極の中間より下病的異常なる一方に向ひ進んで一定の領域に達するや茲に一種特別なる精神上状態に遭遇するを覺ゆるものなり、然も期る機會たる決して偶然稀有なるものにあらずして吾人は寧ろ其甚だ繁きを

見るものなり、蓋し此一種精神上特質にぞ世人は直に冠するに神經質性特質の名を以てし、而して之を負ふ所の一人は端なく神經質者と呼ぶ。さばれ神經質なる名稱は辭學上元一語「神經」より來しものにして若し夫れ之を其名の本性より推さば本質の標徴は全然神經上に於ける一種特別なる病的性狀なるべきものなり。然るに實際神經質者の證候を見るに決して常に病的神經状態を標示するものにあらず、是れ吾人が飽迄名實相當らざる此稱呼に満足する能はざる所以なり。夫れ神經なるものは解剖上一種特有なる組織よりなり、即ち或は白色索狀一帯の線をなし、或は極細極微なる無數の纖維を形成するものにして周く人體各部に分佈し、一面には重に外圍萬象を吾人の心界に媒介するの要路をなし、即ち先づ末梢五官器に於て享受せる凡百の印象を導きて之を吾人の意識に致し、他面には主として吾人の心内現象を外界に紹介するの勞を取る、即ち一度吾人の意識内に發動せる慾向及び諸他の意志機轉を含みて之を吾人の筋肉若くば一定の身體機關に傳へ、以て各其特有の作能に誘致するものな

り。故に神經自己は只一連の傳達行路たるのみ、而して此行路も亦固より時に或る疾患に侵されることなしとすべからざれども由て來る所の證候は吾人が所謂神經質と稱する状態に於て通常見る所の證候とは全く異なるものなり。之を譬ふれば神經は郵便配夫の如し吾人は信書の保護に對し十分の注意を彼に求む、然れども其内容に關しては何等の責任をも彼に問はず、彼はすべての報知を擧げて來往怠らず、然も其報知の内容に至りては喜憂褒貶更に關する所なし。神經は其中樞と末梢との連絡を掌り、兩端に於ける各刺激を唯忠實に傳達するに留る、即ち外界より來れる五官刺激は之を直に大腦に傳へ、大腦に起りし中樞刺激は之を速に末梢に致すに過ぎず、而して此等刺激の内容類別に至りては神經自己の固より關する所にあらずるなり。由是觀之世上現今所謂神經質と稱するものは全く神經上實際の特質にあらずして然も明に精神上一特質たるものなり。

論じ終りて此處に至り顧みて再び神經質者の心界を望めば紛紜愈劇う

して混亂益甚く、依然として一場修羅の巷をなせども見るもの今や精しく心界の事情に通じ、よく亂離の源を悟り以て具に横暴なる不逞の徒等を看破し得たるより、復た敢て其幻劇怪腕に驚くをなさず、却て退いて靜に一撃排滅の策を繞すを得るに至たれる是れ一に前記心理學的心界分析の資にして、依りて以て吾人が容易く意識の本性觀念の實體を知悉せるが爲めなり。而して如此覺悟せられたる意識の本性觀念の實體が延て直に吾が神經質の本體を一般に闡明ならしむるに至れる、誠に喜ぶべき一事なり。乃ち茲に先づ其意義を定め、結ぶに是が本體を以てせんとす、曰く、神經質とは純然たる一種精神上の特質にして其本體は實に一群の誤妄觀念たるものなり。

第四 治 法

一 日常生活

詩に云はずや「追天之未陰雨。徹彼桑土。綢繆靡戶」と、正に是れ神經質

者の日常に對する警句なり。陰雲心を閉し愁雨未だ思を潤さるるによく是が備を爲す、蓋し其日々にあらずして何れの時ぞ、寔に神経質者日常の生活は云は、斯病に對する至要なる豫防劑たるものなり。夫れ一人の居常、争て日として多少の刺戟なからん、而して其過強過劇なるもの便ち悉く神経質誘致の要因たるものなれば、渠の劇甚なる神経性諸證を其未だ發せざるに防がんと欲するもの、宜く先づ意を此處に用ひ、憂き事厭苦き事は云はずもがな、嬉しく樂しき事なりと雖ども是に決して耽荒すべからず。要は其日々を平穩且規律的に暮すにあり。斯くて吾人は是より神経質者今日一日の行事を略叙し、以て之を吾が一般病者の座右に供せんとなす、病むもの依て秋になり菊作らと思はざりせば幸甚。

朝は五時半乃至六時半起上、先づ清浄なる一杯の水又は湯を傾け、冷水に沐し、後食卓に向ふ、卓上茶咖啡を避け、牛乳カ、オを喫す、朝食を歴、二三時間にして間食す、猶茶又は咖啡を用ゐず、酒類は云ふ迄もなし。間食後一定量の散歩をなす、若し其際時間の許さざる時は之を中

食前迄繰下ぐ、散歩時間は概して冬に於て短く夏に於て長からしむ、出來得べくんば夏は終日外圍綠蔭の下に在るを可とす。喫煙は午前中之を禁す。

正午十二時より午後一時の間に於て中食す。神経質者は午前を通じて其氣分概ね優れざるが爲中食時は兎角亂れ勝なり、心すべし。卓上先づ刺戟性食物を避け、脂肪濃きもの、不消化なるもの、此等一切を載せず、副ゆるに肉、野菜、果實等を以てす。贅澤に過ぎて神経質者たりしもの他、すべて十分に食物を攝るべし。絶對的素食は大に神経質者に害あり、貧血なるもの、榮養不良なるものに對しては殊に然り、單り一人榮養過度の時、脂肪過多の際若くは血液中毒の場合には此限りにあらず、さはれ此時と雖ども素食療法は猶四週乃至六週を越わしむべからず。中食後三十分喫煙を許して可なり、但し廢し得ば更に可。次で一時間休息、午後三時乃至三時半の間に於て間食す、品は牛乳、カ、オ、消化し易き菓子等を撰ぶべし、午後適時二三時間の散歩をなす、散歩中と雖も、疲

勞を覺ゆる時は直に小憩に就くべし、決して一身を過勞すること勿れ。作業遊戯亦適宜之を撰びなすべし。晚餐は午後六時乃至七時の間に於てし、食は榮養に富み然も輕うして少きを貴ぶ。食後一身を安靜に保ち、少量の喫煙此際に許さる。酒と茶又は咖啡實に嗜好品の魁、人生の好友、而して二者共に神經質者に害あり、憐むべきは神經質者なる哉。そも神經質者は其殆んどすべて飲酒不堪性なるものなり、彼等は既に飲酒不堪者にして然も多く且酒に親む、誠や之を實際世上に見るに神經質者にして而して酒客なるもの甚だ多し、蓋し其然る所以の理、又自ら存す、一には神經質の現に酒精濫用に基因せるが爲、二には神經質者の常に酒に托して其憂悶を忘れんと欲するが爲なり、固より不眠時乃至苦悶發作時其少量を用ふるものに至りては敢て此班に入らざるものなり。遮莫酒精の神經質者に有害なるは動かすべからざる事實なり、要は酒を慎むにあるのみ、既に酒客たるものは之を嚴禁すべく、未だ酒客たらざるものは終に酒に親む勿れのみ。

さばれ酒客の酒を廢する決して易事にあらず、只一強健なる克己の念に待つあるのみ。而して一人一度酒を廢するや吾人は通常酒精を含まざる飲料を給して聊か其酒渴を醫するに努むるなり、沸騰性リモナーデ、シトロン、セクテイル(西班牙の甘酒等是に屬す。若し夫れ是に依て一人酒を永遠に絶つを得るに至らば當に彼が生涯の幸福たるのみならず吾人治者の喜亦實に大なるものなり。茶乃至咖啡は猶廢すべく補ふに易し、後に紹介せんと欲する所謂獨乙茶以て補となすに足る、猶林檎汁あり、蓬蘽汁あり、無酒精燐酒あり、本時酒あり、斯くて廢して然も苦なかるべきなり。神經質と色情衛生亦決して侮るべからざる一難題なり、實に荒色度を越ゆるもの、常に神經性諸證殊に苦悶を誘發する強勢なる一原動たればなり。方今文物日に旺にして學生學に従ふの時愈長く、結婚の期隨て漸く後れ、爲に一面荒色の禍、手淫の害月を追て又廣まるの觀あり。蓋し色界這般の弊を防がんには結婚期を適時ならしむるに如かず、若し夫れ

夫婦相和し圓坐相睦ぶの樂に至りては神經質豫防の資料として眞に最良
最強なるものなればなり。

神經質者にして是迄餘りに繁快華樂の裡に生活し來りしものは之を乃
ち閑散優雅の境に導き、彼が心を却て過度嬉樂なる刺戟より遠くを可
とす、然も爾來閑寥寂莫なる月日を送り來しものは乃ち去つて爽快愉
樂の裡に至るに如かず。抑神經性諸證は總じて不快感色を帶ぶ、之を醫
するものは斯くて適に快感たるべきの理なり。然りと雖ども憂に泣き、
悲に弱れる一人を、延て翻然極嬉極樂の境に導く、寧ろ只愈其憂愁悲悶
を養ふを助くるのみなるものなれば、吾人にして此所謂反對感情療法を
患者に施さんと欲する時は必ず常に少漸苦を距り樂に向はしめずんばあ
るべからず。すべて右の如き方針を以て患者を漸く樂觀に導くは神經質
治法中最も無害にして甚だ有効なるものなり。

患者日常の讀物中避くべきものは情濃き小説、荒誕なる大作物、暴險
的作物等にして、取るべきものは傳記、紀行文、家庭小説等なり、音樂

は大方良果を神經質に及ぼすものなれども自ら奏するにあらずして之を
聽くを勝れりとす。遊戯、舞、適宜の作業亦可なり、殊に郊外散策、小
旅行最も妙なり、大自然と親み其雄辯を聽き其英姿に接す、効果の大
る自ら筆舌の外にあり。劇は喜劇に赴くべし然も其甚だ諧謔的ならざる
可なり、大悲劇決して觀るべからず。予は所謂落語を愛せず其極めて馬
鹿氣盡せばなり。題を撰んで講談を傾聽する誠に可なり、而して義太夫
淨瑠璃其曲の餘りに切にして其觸りの餘りに迫れる、予は寧ろ其神經質
者に勸むべからざるものなるを信ず。

之を括するに神經性諸證の發する、多くは一人一身の榮養、殊に中樞
神經系絲の榮養甚だ振はざるに因るものなれば世の神經質者たるもの、
必ず先づ心を其日々々々、一身榮養の増進に寄せ、而して特に身神二界の
過勞過荒を避くるに力めずんばあるべからず。

二、水治療法

水治療法の神経質に効驗ある所以。水治療法の神経質に効驗あるは(一) 茲に用ゐらるゝ水乃至湯の温度刺激即冷温兩刺激の中樞神経系統に影響して疲したる其官能を興發すること、(二)同時に用いて水の姿の様々なる、即ち洒浴、即ち全身半身河水海水浴等總て此の際吾人の身體上表に接する所の水の一般觸覺的刺激の又與て大に前者の治力の助くること、(三)水の滲透性彌散機轉及び滲透性吸收機轉の併せ幾分の治能を示すこと、即水に右三様の働があるが爲なり。就中其最も有力なる者は温度刺激の作用なり、而して温度刺激の作用が何故に斯る治驗を現すかは吾人之を生理學に質して始めて知るを得るものなり。今在に其の概要を示さん。

吾々温血生體には温調節と稱する一種の機能あり、常に生體の體温を平均に保ちて之を寒暖定まりなき外氣温の爲に支配せしめざるなり。而して此所謂温調節の行はるゝは生體に新陳代謝あるが爲なり、新陳代謝は生體體温の源泉にして又實に温調節の局府なり。故に外氣甚だ寒冷な

る冬時、生體の上表より失はるゝ温度の甚だ大なる時は新陳代謝は熾に作用して優に其失を補ひ、外氣温暖なる春秋、失はるゝ所多からざる時は新陳代謝亦緩慢にして温發生の量自ら少く、兎角失ふ所多ければ補ふ所亦多く、失ふ所少うして補ふ所亦少く、畢竟體温をして常に平均ならしむるに努むるものは實に新陳代謝なり。然らば此靈妙巧機なる新陳代謝は果して何に依て起るか、寒暖二様の外氣温度刺激により直接に惹起せらるゝものならんか、曰く否、曰く是れ吾々温血生體に特有なる一種神経系統の機能に依るものにして而して其所謂機能たる、亦常に不可思議なる一定反射的妙技を演ずるものなり。今簡單に之を解説すべし、假令ば生體の上皮に一定冷刺激の來るや所關神経即冷覺神経は興奮せられて刺激を先づ温中樞に齎し、温中樞は直に之を反射的末梢に送るものにして、刺激は乃ち是より遠心性に進みて温調節の局府に至り、此處に始めて新陳代謝は作用せらるゝものなり。右によりて温度刺激の温覺神経により反射的に新陳代謝に影響するは吾人略之を知れり。蓋し温度刺激

も亦他の一般刺激の如く單り温覺神經のみ刺激する者にあらずして同時に影響を他の皮膚知覺神經例へば壓覺及び痛覺神經等にも及ぼすもの如し。氷を痛みある箇所に當て其痛みの去ると共に壓覺亦隨て消失するが如き其一證なり。吾人は是に由て單り温刺激のみ傳導し得る温覺神經、單り痛刺激のみ傳導し得る痛覺神經、及び單り壓刺激のみ傳導し得る壓覺神經の所謂接觸の状況にあるを推すを得るものなり。而して此際温刺激の痛覺に及ぶ所の影響は常に一定不變なるものにあらずして時に或は開路性に作用して之を興奮の狀に致し、時に或は抑止性に作用して之を沈靜の狀に至らしむるものなり。今試に疼痛ある部位に或は温を或は冷を與へて右の事實を検するに、其及ぶ所の影響は時と共に全く同じからず、一日冷よく疼痛を鎮めて温の却て之を増すもの、他日温よく之を消して冷の寧ろ之を加ふるを見る、以て其温覺痛覺の關係時に從ひて同じからず抑止、開路兩作用の如何に自適恒なきを見るを得ん。猶温度刺激は同時に運動性及び脈管運動性反射作用に波及し、或は深く

一斑中樞神經系統に及んで之を齊く興奮若くは沈靜し得るものなり。足部の冷却する時は人多く嘔を發す、而して其暖めらるゝ時は便ち歌む、冬夜襪に就き足の冷え居る間は終に眠る能はず、其暖るに及んで始めて眠に就く、是れ大方の知る所なり。跣足疾行足部に暖を覺ゆるの時、心氣の如何に爽快となるや亦よく人の告ぐる所なり。足部の冷温が吾人の身神に影響すること正に右の如し。而して其理はゴルドンイデルによりて明に説き去られたり。曰く、下肢の知覺神經は生殖器及び會陰より發する所の知覺神經と共に其延長擴張最大にして先づ進んで脊髄一帯に互り、且其副行によりて汎く脊髄領域の全般に及び、隨て其反射範圍の最大なるものなるを以てなりと。ツインテルニツ、ストラッセルは、水の温度刺激は其機械的刺激的の助によりよく中樞神經機關に進達し、呼吸を左右し、心動に影響し且脈管運動機轉を支配するものなりと説けり。人は二氏の所説に基き水治療法によりて特に其影響を血行機關に及ぼさしめ、即ち先づ皮膚に於ける血行を支配し、進んで血行領域中其大部を占むる

所の下腹部血管及び其静脈叢を迄左右せんことを圖れり。而してクラメル之の精細なる検査に徴するに水の温度刺激は其機械的刺戟と共に作用して遂に影響を血液生成の上迄及ぼし、白赤兩血球の数は勿論、其分布乃至前者の種類をさへ支配するものなりと云ふ。

抑温冷兩刺戟は何れも其所關神經を興奮せしめて是が傳達を促すものなれども其傳達の難易に至りては冷温兩々自ら相異なり、冷覺の常に容易にして温覺の常に是に劣るを見るものなり。是れ其傳達に際し冷刺戟の抗抵の温刺戟に比して甚だ少きによるものなるべし。斯の如く冷神經の興奮は其強度に於て常に温神經の興奮に勝るを以て、其隣接せる幾多の神經の冷刺戟によりて且強く且容易に興奮開路若くは沈黙抑止せらるゝは固よりなり。斯くして温と雖どもよく或は疼痛を抑止し猶ほ痙攣を鎮むるの力あり。吾人は温療法を一局部に應用して當該部の疼痛を鎮め或は是によりて痙攣をすらすることを得れども未だ進んで其部の知覺を脱失せしむること能はず。一方且興奮性作用もあれども是亦固より未だ

冷刺戟の作用に及ぶ能はざるなり。若し夫れ冷刺戟様々の作用を見る時は吾人は常に其異大なるに驚くものなり。冷氣少く加はりて反射興奮性の亢進を來し、即ち一人裸體となりて彼に腿反射の亢進を致し、而して其冷氣漸く強うして遂に皮膚の知覺脱失を招來するが如き其一なり。氷囊、冷巻法應用せられて頭痛乃ち嘔み、重き痙攣發作の冷水の盥洗によりて卒然抑止せらるゝか如き其二なり。冷撤水法の嗜眠昏睡を醒し、失神者を復活せしめ得る、其三なり。抑鬱者の冷灌水法によりて濟はれ、疲憊甚しきもの、既に短時間の冷水沐浴によりて速に恢復せしめらるゝもの其四なり。而して冷水灌酒の總じて吾人の身神を強固ならしめ、爽快ならしむるは周く人の知る所にして是れ亦専ら冷刺戟の強く中樞神經を興奮せしむるにより、然も同時に筋肉知覺神經の興奮状態に齎さるゝが爲、疲勞神經の自ら抑止せらるゝもの又與て茲に力あるもの、如くな

り(ゴールドシイデル)。
次に水の機械的刺戟は常に前者温度刺戟の作用を助くるものにして然

も吾人若し此機械的刺戟作用をして愈大ならしめんと欲せば則ち此應用の部位、及び其形態を變ずるにあるなり。

終に水の滲透性、彌散機轉及び滲透性、吸收機轉に關しては其研究未だ甚だ幼稚にして惜むべし吾人は遂に是に關する有力なる諸説を聞く能はざるものなり。

以上の解説に依り吾人は漸く神經質に對する水治療法の効能を知れり、即ち左の如し、

- 一、水治療法は特に全身の新陳代謝を高め一人の榮養をして最も適度ならしむるものなり
- 二、水治療法は強勢なる刺戟を一人の中樞神經系統に與へ以て其衰憊せる官能を喚起するものなり。
- 三、水治療法は猶ほ種々良好なる作用を其應用せらるゝ各局部に及ぼすものなり。

茲に述べし如く水治療法の作能は其用ゐらるゝ人によりて或は開路性

に或は抑止性に働くものなれば吾人は是が應用に臨み先づ其適示を定めずんばあるべからず。而して此適示を定めんが爲には其當初之を試験的に患者に施すを要す、若し幸に其開路的に作用する時は吾人は便ち之を應用持續し、其然らざる時は則ち之を直に廢さるべからず。然れども元と推感性なる患者、初め其療法の只試験的なるを知らば治験は是より全く望むべからざるに至るものなれば吾人は飽迄患者の茲に氣付かざる様注意せざるべからず。又同一療法の應用久きに亘る時は患者の其刺戟に慣れて遂に所期の効験を得る能はざるに至るが常なり、故に吾人若し確實なる水治療法の効果を收めんと欲せば之を折々他の療法即電氣療法マッサージ、作業又は體操等と交え用ふるを要するなり。

往時の水治療法。往時の水治療法は醫家によりて應用されたる者にあらずして多くは一部の行者、一部の僧侶によりて施され、所謂自然療法の一として好んで精神神經病者に課せられたるものなり。當時水行と呼ばれ、病む者行者に導かれて濫に水を浴み水に没し、瀑に打たれ海を

潜り剩へ生を草食粗菜に繋ぎ裸體跣足にして日夜沼澤を踏み河川を渡り
 一心苦行を遂げつゝ以て疾病の治療を圖りたるが如きもの即是なり。蓋
 し現時行はるゝ所の水治療法のか程其設備の完全にして隨て其受療者の
 安樂快適なる、之を昔日の所謂行者療法なるものに比するに文野兩々甚
 だ相距れども然も今の此美は嚮の彼の粗の賜にして云はゞ今の水治者が
 遠く其流を昔の行者に汲みたるや又疑ふべからざるものゝ如くなり。何
 となれば此療法の後醫家の手に移りし當時、猶ほ所謂氷水擦拭法なるも
 のあり、然も其多く冬時に於て用ゐられ、患者が拂曉暖き彼が襟より誘
 出され、直に此擦拭法の施されたるが如く、且冷酒浴、冷坐浴、冷全身
 浴乃至は瀑布療法溪水療法法の如きもの之あり、病むもの懣れたる身神を
 以てして然も寒冷なる瀑水に打たれ冷却せる溪流に浴したるが如く、甚
 だ過劇なる移行聖法の實際行はれ居たりければなり。そも右の如き療
 法はさすがによく一度一人を神經性諸證より再生し得べしと雖ども是れ
 所謂單に一種の鞭撻療法たるに過ぎずして即ち鞭撻一打其懣れたる神經

系統に加へらるゝやさしも弛める全系一統の神經作用の只一時其襲撃に
 驚き、騷然振興して暫く活氣ある常態に復するものなれども、元と此種
 の復活たる、偏に極端なる一過性一刺戟の結果状態たるものなるのみな
 れば其刺戟の去ると共に踵ぎ來る反動亦自ら強甚にして爲に患者は便ら
 却て曩時に倍蕪せる極度の衰態を以て酬えらるゝに至るが常なり。故に
 此の如き療法は寧ろ異法にして決して治法となすべきものにあらず、神
 經質者の如き感受性患者に對しては固より應用すべからざるものなり。
 然り而して世移り人智大に進める現代に入りては業已に彼の過劇なる冷
 水の持続的應用全く廢れ、微温湯の試用漸く盛なるに至り、然も水温愈
 低うして是が應用の時間益短縮せらるゝに及べり。只此處に一種注目す
 べき冷水應用の法あり、僧クナイブの考案になれるものにして優に紹介
 の價値あるものなれば左に之を録せん。
 クナイブ氏冷水應用法。放酒口を有する灌水器を以て冷水を患者の全
 身下腹部若くば單に腕脚兩部に澀ぐ者其一なり。全身灌水法は神經性狀

態の一般に増悪せる時、又は茲に強甚なる苦悶發作の襲來せし時のみに應用せらる、殊に後者の場合に於ては等しく冷木を灌ぐにも之を極めて敏活に行ひ、殊に水流の強きものを用ゐ、而して發作繼續の間又灌水を持續すべきものとす。證狀の普通なる時に於ては單に患者の下腹部若くは腕脚二部に向ひ細く弱き放射狀噴水線を洒げば則ち足る。只頭部は此際常に洒水を避くべきものとす。而して其持續は僅に四分の一分にて既に可なり。若し頭方又は心部に向ひ血流衝進の氣味なる時は獨り腕脚兩部に灌水するに留むべきなり。總て肢部に灌水するに當りては其上下を問はず常に溫暖なるを要するものなり、但し施術に臨み取り敢へず之を熱するは宜しからず。又灌水後は肢體を拭はず其儘直に浴衣を着し乃ち溫暖なる褥内に入るか或は起つて彼方此方歩き廻り、其肢體の漸く乾きたるを感じ得るに及んで始めて蓆に入るべきなり。是れ案者の示す所なれども其初め未だ此法に慣れざるものは濕ひたる體上到底直に浴衣を被ること能はず、よし強て之を行ふも其身の後却て容易に濕まる能はざるが

常なり、故に此法を試みるもの其當初は灌水後先づ手拭を以てよく當該患部の濕氣を除き、乃ち着衣し運動し乃至は四邊を歩行し、後褥に入りて始めて暖を取るも可なるなり。

次に跣足草地を踏み、袷袋沼澤を涉るの其二なり。夏の朝未來は更なり、春晨、秋朝露まだ深き時、跣足草地を行くは神經質者に對する最簡最適の治療法なり、殊に夏時は跣足疾行數時間に互るも可、慣れては終日以て逍遙するも妨なし。若し夫れ袷を掲げて沼澤を涉るものに至りては之を決して前者の如く長からしむべきものにあらざるなり。概して此法を行ふに當りても亦足部の常に溫暖なる時に於てせずんばあるべからず、若し一人あり不幸にして足部の常に厥冷するものに於ては先づ之を足部蒸氣浴によりて暖め、然る後此法を行ふべきものとす。跣足跋涉後は濕ひたる其儘若くは先づ之を拭除して足袋又は靴下を穿き乃至は起つて猶ほ少歩ら疾行を試み、或は數回地を踏むをなす時は茲に足部は十分なる暖を保つに至るものなり。

右冷水灌酒及び跳足跋渉の二法は即ちクナイフ氏冷水應用法の重なるものなり、吾人は是に附帯してこゝに所謂雪中疾行なるものを追想せり。雪中疾行も神経質者に對し當に其試行を勸むべき一法なりと信ず。而して此際亦患者の足部の豫め温暖なるべきは云ふ迄もなけれどもさりとして餘りに緩なるに過ぎて剩へ汗ばみ居る程なるの時、其儘雪中を行くは却つて意外の禍害を其後に貽すの恐ある者なれば吾人は折る場合に於ては先づはよく足汗を拭ひ去らしめ然る後之を雪中に導くを要するものなり。猶ほ疾驅終りて直に足袋を穿かじめ進んで數歩の疾行を命じ、或は多度地を踏んで以て攪に攪を足部に撥するを求めしむるは固よりなり。要するに冷酒浴の持續は彼の蒸氣浴と共に神経質に對し、決して常に良果を及すものにあらず、否却て時に惡果を是に及ぼすものなれば是が應用に際し吾人は常に十分の注意を拂はざるべからざるなり。而して彼れ温浴療法に至りては其種類誠に多様なりと雖ども然も感な善良なる影響を神経質に及ぼすものなれば吾人は是より其普通に用ゐらるゝ浴法の

一斑を列舉し以て本症治療の一助となさんことを期す。温浴療法の應用に當り豫め心得べき一事あり、應用時日の長短と浴温の高低との關係是なり、應用の日愈長くして浴温は愈低からしむべく則ち吾人々吾人が之を用ふることを甚だ長くして遂には浴温を攝氏六度乃至四度に迄降らしめ得るものなり。半身浴法。普通の浴槽内に於て之を行ひ、水量は患者が槽内腰を下し下肢を伸し而して其至脚を没し進んで臍部に達せしむ。水温は初め攝氏三十度を限りとす、但し浴してなほ冷氣を感する時は是に一度乃至三度を加へ即ち三十一度乃至三十三度たらしむ、但しこれ以上に昇らしむべからず、回数は一日一回、時間は二分乃至五分に止む。蓋し此時間の長短は患者浴時の状態に依りて定まり、彼が入浴後冷氣を感すること愈早うして其入浴時間の愈短縮せらるゝものなり。入浴時頭部に壓抵巾を裝ふ、即ち布を冷水に浸し之を數重頭部に巻き付くるなり、是れ頭方に血液の逆上するを防がんが爲なり。入浴時は必ず一人の介者を付添はしむ

べし。浴槽内患者は自ら兩手を伸べて水中己の双脚を擦つ、而して一面介者は小桶を以て槽内の水を掬しつゝ、幾回となく之を患者の背部乃至胸部に澀ぐ、但し患者自ら易く之を行ひ得なば敢て常に介者を待たざるも可なり。只如何なる場合に於ても水を頭部に澀ぐを許さず。一人入浴順序右の所作に取り掛り、乃ち身に冷氣を覺ゆる時は直に其槽を見捨つべし、決して躊躇すべからず。而して出槽後手拭もて逸速く全身を拭乾し以て浴後の休憩に入るなり。以上は半身浴時一通りの心得なり。而して茲に一般浴療法を行ふに當り猶ほ常に守るべく心掛くべき數條の定めあり、曰く、介者は必ず一人若くばそれ以上を用意すべし。決して水を頭部に澀ぐこと勿れ。浴室の温度にして若し甚だ低き時は先づ之を暖むるを要す。入浴直前に於ては一切食事すべからず、而して朝食後は半時間乃至一時間にして浴に赴て可なり、中食後は入浴迄二時間を置くべし、且中食に際し多量の食物を攝りし時、若くば消化に多時を要する食餌を攝りし時に限り食後二時間半乃至三時間にして始めて入浴すべし、午後

間食後の入浴は朝食の時に従ひ、晩發後の入浴はすべて中食時の定に準ずべし。猶ほ各食時食品の種類及び調理、其食量の多寡によりて此毎食後入浴に至るの時間は多少の變動を受くるものとす。是れ固より各法に適用するべきものなれば先づ掲げて後の案となす。

全身浴法。全身浴には長さ、深さ、幅各一迷突乃至一迷突半ある浴槽を用ふ。水量は云ふ迄もなく之を半身浴時より多からしめ水温も亦少く高からしむ、即ち攝氏三十三度乃至三十七度とす。而して入浴時間は通常十分乃至二十分となす。患者の不眠を訴ふる時は猶適宜其温度を高からしめ即其身に快きを以て程度となし、且入浴時間を延長して之を一時間内外たらしむ。

全身浴は神経質に對し其効能常に半身浴又は坐浴に及ばず、只神経性苦悶の發作的増悪を示せる時は是が救急治劑として少く高温なる全身浴を取らしむれば意外の好果を以て酬えらるゝことあり。斯くして神経質の治療に際しては吾人は敢て好んで毎日此全身浴を用ふるを要せず、只苦

悶襲來の時のみに限り之を直に應用すべきのみ。
 全身浴時其槽内に一桶の海水を投じ、溫度は然も一般全身浴時と同様ならしめ、在浴時間を十五分間となすもの、右は貧血なる神經質者に用ゐらるべく、回数は一週一二度に止め、是れ以上ならしむべからず。
 坐浴法。大小形状様々なる浴槽を用ゐ、水量は一斗乃至一斗二升、以て坐位に在る患者の臍部に達せしむ。溫度は半身浴温よりも猶低からしむると三度、即ち先づ攝氏二十七度を以て始むべし。患者若し右溫度の浴内にありて冷氣を感じる時は一二度を加ふるも可なり、而して此水温は毎週一度宛下降せしめらる、是れ坐浴の定規なり。但しこは患者容體の如何により固より常に一律なるべからず、醫師其都度の見込により多少の加減あるべきなり。要するに浴法を取るもの常に餘りに細心なるべからず、さりとて固より又餘りに無法なるべからず。一日一回在浴時間には八分とせらる。頭部に冷壓抵巾を施すは此時に於ても亦勸むべきものなり。浴し終らば直に身體を拭き乾かし尋て適度の運動若くは漫步をな

すべし。
 坐浴は神經質に對し最も有効なる一浴法なり。すべて半身浴の如き、坐浴の如きものは毎日連用して愈効あり。但し連續的に用ふるは宜からず、一日中適宜の時に割り當て、心を前規諸項に用ゐつゝ之を應用すべし。殊に飲食は必ず浴後に於て取り、之を決して浴前に喫すべからず。
 局處洗滌法。適宜の長さを有する手巾を水に浸し、之を軽く絞り上げ、其猶ほ幾分の水分を含めるものを以て先づ上體を洗滌し、終りて次に下體に移る、今其方法及び順序を略記せん。始めより全體部を露出する勿れ、將に洗滌せんとする體部を上方より序を追ふて露はすべし。第一上肢を、第二頭部を、而して第三顔面部を洗ひ、第四肌脱して始めて體上部を露出し、胸を先づ洗滌して次で背部を洗ふ、背部を洗ふに工合あり双の手を以て件なる手巾の兩端を握り、中部を弛ませ持ち頭を越えて之を背方に送り、乃ち双端を張りて背部を上下せしめ、且之を片襷形に取り交し勢添えて背面隈なく洗拭す。上體右の如く洗ひ終らば新に手巾を

水に浸し、之を逸速く軽く絞り上げ、是より下體部の洗滌に取り掛る。
 先づ下腹部を次に脚を終に足部を洗ふなり。都て洗滌の所作は常に快速なるを貴ぶ、決して緩慢なるべからず。冬時は勿論其他の時と雖ども室浴甚だ低き時は豫め此處を温むるの要あり。水温は攝氏三十度を以て起り、降て二十五度に達せしむべし。神經質者殊に苦悶性神經質者は一日一回毎朝之を行ふを良とす。

室温の一般に低き時は上體洗滌後乾布を以て一先づ悉く被洗部を拭乾し、然る後逐次下方に洗ひ及すを法とす。頭部に血液上衝の氣味ある時は一體を三段に分ち各段に従ひて又水温を高低三様に加減し、法に従ひて全身各部の洗滌を行ふ。先づ攝氏三十度の水を調へて頭部を洗ひ頭部洗ひ終らば用水に一定量の冷水を加へて之を二十九度半となし以て胸腹を洗ふ、而して終に水を二十九度となし用ゐて上下肢を洗滌す。是れ蓋しよりて上衝せる血液を下方に導かんが爲なり。吾人は知る、頭部心臓部に血液衝動の感ある時、上肢一體を冷泉中に投じなば今心頭を衝ける

血液の便ち轉じて水中上肢方に移り、爲に乍ち心部頭内輕快の感あるに至るの事實を、思ふに茲に記載せる洗滌法は正に此事實より胚胎せるものなるべし。

局部洗滌後身體を拭乾すには通常大手巾を用ふ、介添ある時は介添をして以てよく全身を拭はしむ。

猶衰弱せる患者は在床此局處洗滌法を取るを得、固より介者の萬事十分なる注意を以て之を施すものとす。

海綿浴。洗滌法の一種にして海綿浴なるものありライプチヒなるクルシマンの考案になる。一人裸體大鹽内に入り、水を含める海綿を取りて之を頸背諸部に壓抵す、然る時は此より水は流れて全身に傳はり、茲に清冽なる一種簡浴法は行はる、故に名あり。所作は此隣特に敏快なるを要す。海綿浴適示の時は夏なり、水温亦適宜、只氷水の如く極冷ならざる限り有合水便ち役立つ。

摩擦法。摩擦手拭、粗布又は絲瓜海綿を別に調置かれたる一定温度の

水中に浸し、之を適宜に絞上げ、用いて全身を摩擦す。又先づ右同温度の水もて沐浴し、次で濕布を以て全身を摩擦するも可なり。常規の如く水溫は高きより低きに至らしむ、即ち初め攝氏二十八度乃至三十度に起り漸次降て二十度に至る、然も決して十八度以下ならしむべからず。本法に於ては特に介補を添はしむるを要す。摩擦終らば直に乾布を以て身體各部を拭ふ。醫の勸により此法を用ふるものは毎早朝起上直後に於て之を行ふべし、時として朝食後用ふるも亦妨なし。榮養甚だ振はざる患者は一時に全身を摩擦すべからず、久く部分的摩擦法を施し漸く以て之を全身に及ぼすべし。即ち第一日に胸部を、第二日に背部を、第三日に上肢を、第四日に下肢を、而して之を順環反復すること又暫時にして乃ち次に二部乃至三部の同時摩擦を行ひ、終に全身摩擦に移るべきなり。摩擦法の効能は適度な水溫刺激により、弛緩せる神經一統殊に皮膚脈管運動神經の一時に活起振興せられ、茲に便ち皮膚脈管一切の收縮を致し、乃至疲れたる全神經機能の興奮を誘致するにあり。而して摩擦後頓

て皮膚一面の發赤するは是一度收縮せる皮膚脈管運動神經の生體生理の司る所のまゝ、又直に麻痺擴張して、爲に一旦身體外表より其内方に向ひ推注せられたる血液の再び體內臟部より逆流し來り皮面に滯留するを以てなり。

そも本法の治驗は斯の如し、然も其刺激の大に過ぎ隨て興奮の強きに過ぐるは寧ろ害なり益更になきものなり。然るに世人は往々にして茲に誤解し、其刺激の愈大にして其効能の亦愈大なるものなるべしと信じ、攝氏十度、八度乃至以下の冷水を用いて愈其効を大ならしめんことを期するものあり。而して此の如き人々は憐むべし所謂其過ぎたるの其及ばざるに勝るの害を招致するものにして、即ち元とあさましき神經性狀態をして只益劇甚ならしむるに助くるものなり。

摩擦法施行後、身體衰弱者は直に褥内に入りて其身を被ふべし。其強健なるものは適宜の運動若くば體操をなすを可とす。

摩擦用水及び前記洗滌用水中に食鹽を加入するを進むるものあり、亦

以て試むべき一法なりと信ず。
 濕纏法。第一布として長さ二迷突半乃至三迷突、幅約三迷突の毛布一枚、及び第二布として是より稍短く稍狭く、然も其長さは一人の首より以下優に足尖に達し、其幅亦澤振身一周を包裝するに足るべき粗絹布若くば薄麻布一枚を用意し、先づ牀上に右第一布を敷き、次に一定温度の水に浸され堅く絞り上げられたる第二布を其上に展べ、患者は乃ち裸體となりて此設けの布上に平臥す。此に於て介添は直に第二布の纏裝に取り掛る。布は極めて平滑に身體各部に密着せられ、相接く體部迄其一部の挿まれ、全身各部以て覆はれざる所なきに至らしむ。頸部は布端を柔かに折り集め、此處に些の隙間さへなき様密に纏絡すべく、然も温の發生少くして煖り難き體部は重ねく纏ふを避く、即ち下肢乃至足部は常に厚く之を巻かず、殊に其觸れられて冷かなるの場合に於ては豫め乾擦若くは足部蒸氣浴を加へて之を温め、然る後纏絡を施すべく、猶必要あらば之を濕布の外に露さしむべし。第二布の纏裝斯の如くにして終ら

ば直に第一布の包裝を施す。即ち毛布は緊しく全體に巻き付けられ、頸部は其特に密包せらるゝ様、而して足尖に於ては布端折り返されて當該部の殊に厚く裏まるゝを致す、技は總て神速なるべく且毛布包裝は其各要處に於て安全針にて固封せらる。以上二重包裝の他、吾人は時に猶ほ蒲團を加へ或は更に毛布又は羽毛被を加ふることあり。水温は證候の程度によりて高低一樣ならしむべからず、高きは攝氏三十度より低きは十八度に至らしむ。概して證狀の重きものに對しては亦高き温度の用ゐらるゝが通常なり。纏法持續時間は十五分以上一時間乃至二時間とす。逆流充血を防がんが爲、此際矢張り冷壓抵巾を用ふることを忘るべからず。右歪く施し終らば吾人は微温湯を以て患者の全身を洗滌す、一面濕布は後直に洗濯せられ乾かさるゝを要す。
 蓋し濕纏法の効果は體面温度と濕布温度との差違大なるに従ひて愈大なるものなり。初め體面の濕布に觸るゝや輒ち作用する所の冷刺激の爲末梢血管齊く收縮して爲に血行、呼吸は反射的に一度促進せられ、而し

て嚮に屢陳べし如く、體温の放散は頓て是に次て起るも、然も毛布の一重二重相加はりて體全面を被ふが爲、折角發生したる體温も便ち薄き第二布を歷て擅に放失散逸すること能はず、茲に吾人は體面と濕布との間自ら温平均の生ずるを見るなり。猶ほ進むこと十分乃至十五分にして皮膚血管の擴張漸く大に、隨て血量漸く多く内臓より皮膚に移るや、乃ち吾人は一種快美の温感を覺ゆるに至る。總絡應用愈進んで皮膚血管の擴張愈大に、内臓より注ぐ所の血量益多くして體面至る所亦大量の温を蓄積するに至りては、血行の抗抵大に減じ脈搏一分間三四十至に下ること稀ならず。固より其初め頻數なりし呼吸も漸く變じて遲緩となり神經全系此に於てか著く鎮靜して遂に快き睡眠すら且催し來るに至る。然して此持續の一時、二時間乃至以上に及ぶ時は又別に發汗を促すことあり。之を要するに濕纏法の効果は體温散逸の減少にあり、從て其効果の大小は其應用持續の長短に關す、吾人の單に加温を目的とする時は既に十五分乃至二十分にして足れども、若し夫れ奪温をして大ならしめず

而して神經全系、血管全系を鎮靜せしめんが爲には固より更に長時を要するものなり。但し吾人は常に鎮靜を以て目的となす、血行の復び促進するが如き、發汗の起始するが如きは寧ろ其至るを待たざるものなり、されば吾人は又意を此所に用ゐ其血行の促進、其發汗の起始に先ちて輒ち纏絡を解かずんばあるべからず。然も此時期は一旦遲緩せる脈搏の再び増加するの際なれば、吾人は常に之を患者の脈動脈に就て檢定するを得るものなり。

猶濕纏法によりて新陳代謝の高められ、吾人が生活上不用なるもの且有害なる物質の盛に排泄せらるゝも決して輕視すべからざる所なり。

下腹部濕纏法。全身濕纏法は右の如く既に異大なる鎮靜作用を有するものなり。然れども苦悶性神經質者は是によりて往々却て意外の惡果を收むることあれば吾人若し此の如き患者に對し斯法應用中偶證狀の増惡を見し時は之を直に廢止して代ゆるに單に下腹部濕纏を以てすべし、下腹部濕纏は蓋し常に苦悶に卓効あるものなりと云はるればなり。今左に

其準備及び應用法を略記すべし。一片の麻布又は粗絹布を取り、之を攝氏二十五度乃至十八度の水に浸し、固く絞りて腰部に纏絡す、即ち腎部下腹部乃至生殖器部の是に由て包装せらるゝなり。而して右腰部温纏は又一重のフネル布を以て其上より被はる、下腹部温纏の此の如く施されて猶ほ未だ一體の自ら温まり來らざる時は重ねて一枚の上被を加ふべし、然も其甚だ容易に温まる時は水温を定規なる最低十八度以下迄も降らしむるを要す。本法は通常就褥前に於て施され、終宵帯び通さるゝものとする。斯くて其効能管に苦悶を去るにのみ止らず催眠法として又特驗あり。

腓腸筋温纏法。下腹部温纏法の他猶ほ一種の局部温纏法あり、腓腸筋温纏法と名けらる。攝氏二十五度乃至十八度の水より絞り上げられたる麻布を以て腓腸筋部を温纏するなり。此法亦終夜施し通さるゝものとする而して其殊効は頭上若くば心部衝血を去るにあり。

温纏法の行はるゝや總じて其湿布の十分乾布を以て被ひ包まるゝを要す。

す、即ち其上方下方に於て湿布端の少しも露はるゝことなどなく、結局將に散逸せんとする體温の全部抑遮せらるゝに努めずんばあるべからざるなり。

酒浴法。攝氏三十度乃至二十度の微温酒浴は神經興奮状態に對し有力なる沈靜作用あるものなり。

心臟部冷壓抵法。手巾大なる布片を冷水に浸し、絞り上げて之を適宜の大きさに畳み直に心臟部に壓當るなり。此法は神經質者の特に苦悶ある場合に用ゐられて効あり。

シヤプマン氏の革水管亦處々の冷壓法に用ゐらる、管は必要に應じ種々適温の水を以て盈され隨時隨處に應用せらるゝなり。

海水浴法。海水は含クロール鹽水なり。是に浴するものは海水の冷刺激、器械的刺戟及び海鹽の化學的刺戟を受け、便ち其神經系は振興せられ、其新陳代謝は促進せらる。故に神經質者に對する海水浴の治力も亦決して輕んぜらるべきものにあらず。只水温甚だ低く、波浪甚だ高き

所謂硬海水浴場は其刺戟の亦甚だ強きに過ぐるが爲、一般に避けらるべきものなり。而して水温快適、波靜なる所、所謂軟海水浴場は神經質者一般に對し大に進むべきの價値あるものなり。但し貧血なるもの乃至甚だ衰弱せるものに對してはよし所謂軟海水浴と雖とも時に意外の惡果を及ぼすことあり。況んや硬海水浴に於てをや、其正に禁せらるべきは當然なり。只夫れ身體強健にして然も神經性狀態の發來して猶ほ未だ久しからざるものに對しては軟海水浴の多く常に卓効を示すものなれば吾人は斯る患者に限り之を吾人が軟海水浴場に送るは其指南の甚だ當を得たるものなりと信ず。とは云へ海水の右の如き患者に對してすら其時に適應せざることあり、偶不良なる影響を患者に及ぶことありと雖ども然も斯る場合に於ては入浴一二日にして彼既に不快感に捕はるゝを常とすれば、彼今端なく此に氣付き乃ち之を廢するも其未だ決して晩からざるものなり。要するに海水は深く吾人の精神を安靜ならしめ且良眠を吾人に給するものなれば、是に適應するものは宜く常に行いて其殊効に沐

すべきなり。

含鋼泉浴法。本法は特に酒精又は煙草の濫用によりて來れる神經性狀態に適用せらる。

芳香浴法。芳香性藥草煎劑の投入せられたる温浴にして水温攝氏三十三乃至二十八度、入浴時間十分乃至十五分、以て普通と定めらる。而して

芳香浴中其特に婦人神經質者に愛用せらるゝものは所謂松樹浴なり、松樹浴は通常松葉芽の煎汁を投入して人之を仕立て、又松葉越幾斯半基泥より其一浴の調へらるゝこともあり。固より全身浴となされ、水温攝氏三十五度乃至三十四度、入浴時間十五分、其殊効は都て全神經系統の鎮靜にありと傳へらる。猶一浴に揮發芳香油の半乃至二茶匙の用ゐらるゝことあり。温度は攝氏三十度内外、入浴時間は十五分とせらる。

古來吾邦に於て祝用され來りし五月節句菖蒲の湯、吾人は其甚だ愛すべきものなるを信ず。一部の邦人によりて用ゐらるゝ叢草湯、亦強ちに捨てらるべきものにあらず。

温泉浴法。水温低き温泉は偶神経質者に好果を齎せども其高き熱泉は寧ろ害あり決して勸むべからず。

鹽滷泉。は全神経系統を振興し皮膚機能を進め傍ら新陳代謝を促進するが故に従て強壯法の一助となさる、以て神経質者に用ふべし。水温攝氏三十四度乃至三十二度、入浴時間十五分乃至四十五分、之を適度となす。

炭酸湯。水温攝氏三十五度乃至三十四度、持続十分乃至十五分、神経性心臓障礙及び脈管障礙に用ゐられて好果ありと云はる。

總て入浴後は暫時其身を安靜に保つを要す、暢然肘を枕して輾臥するも可ならん。牀上に平臥しソファに倚るも亦可なるべし。而して其時間は各個性によりて長短あるべけれども先づ一時間内外を準とすべし。

之を總括するに水治療法の効果は其受療者の個性様々なるに従ひて大小顕微亦固より一律なる能はず、故に吾人若し此療法に因りて所期の治験を收めんと欲せば、吾人は常に各患者個人性の異なるに従ひ、巧に其

療法の種類、應用持続の長短及び水温の高低等を按排せずんばあるべからず。蓋し神経質者にして身體強健なるもの、又は其病症の猶ほ未だ甚だ進まざる一人に對しては用ゐらるゝ所の療法も敢て左程精選の必要なく、且其應用持続の時間も亦敢て長短甚だ關する所なしと雖ども、虛弱なる神経質者或は病症の漸く進めるものに對しては水温と云はず療種と云はず、吾人は都て十分の注意を以て之を應用せざるべからず。

さは云へ概して神経質者は小膽性懦姑息にして進取の勇なきものなれば吾人にして是に一定の治法を授け、之を一定の療法に導かんと欲するに當り、餘りに細心只其適否のみ顧慮する時は遂に之を何れの治法にも導く能はず、是に何等の療法をも施す能はざるに至るものなり。故に吾人は又茲に鑑み都て此の如き患者に對しては敢て常に果斷にして嚴格、猶よく常に督勵的態度を取るに努めずんばあるべからず。抑水温、療法及び其持続時間は應用の久しきと共に一定の變遷を受けしめつゝ行かざるべからざるものなり、即ち其温度は日と共に低きに行られ、療法の種類

類は時宜によりて様々交えらるべく而して其持続時間は時と共に漸く延長せらるゝが常なり。然りと雖とも各水治療法は其應用持続の餘りに長きに互る時は多く常に其効果を失するに至るものなり。斯くして吾人若し其一法を吾神經質の初期に用ゐんと欲する時は先づ六週乃至八週を限りて之を一療法期と定むべきものなり。而して疾病の既に陳古なるものに對しては吾人は此一療期間を猶適宜延長せしむるを要するものなり、然れども未だ固より六ヶ月を越えしむべきものにはあらず。若し果して斯の如くすれば是より療法の効果は却て應用時日と相馳背して其愈減少薄弱なるに至るを例とす。故に患者の種類により止むなく右六ヶ月以上猶同一の療法を要するものに對しては乃ち既に五六ヶ月の交に於て一度一週内外の休療を取らしめ、然る後復び元施され來し療法に従はしめざるべからざるなり。然り而して茲に右休療に關し且注意すべきものあり、各水治療法の應用に際し是が被用間持続の長きに亘るを只恐るゝの餘り、各週毎日曜一日の休療を進むるものあれども此の如きは其實固より取る

べきの法にあらず、何となれば休療の要は常に決してさ迄に急なるものにあらず、總て定められたる前記療法の一期間内に於ては寧ろ一日も休療せざるこそ肝要にして、即吾病者にして一旦第一期の療法に従事せるものは少くとも六週の間、一日たりとも廢療するを要せざるものなればなり。

三、空氣療法

空氣療法も亦神經質に對し其効能決して薄からざるものなり。試に思へ、一人一日一萬リートの空氣を呼吸するものなるを、然れば則ち此空氣の性状如何が如何に重く一人の健康保續に關するやは既に言を俟たずして明なり、是れ吾人が神經質を治療するに當り特に此空氣療法なるものを勸むる所以なり。空氣療法中一般に實用せらるゝものは(一)、海氣療法(二)、山氣療法乃至山地療法、及び(三)、氣浴療法即是なり。

(一) 海氣療法

海氣の陸氣に優るは純潔にして温度高く、其温度の平等爽適にして而してオゾンの含量大なるにあり。猶ほ洋上百海里更に陸地を見ざる處より吹き來る海風は全く無菌なりと云へば、渺茫たる蒼海に臨んで渡り來る清風を掬する、眞に是れ無上復活の道にして、其如何に鋭氣を身神に添え、其如何に疲れたる神經をも振興するに足るや推すべきなり。然れども吹く風若し陸方よりする時は固より塵菌渺からず、其健康上甚だ宜しからざるは云ふ迄もなし。

海風の身神を爽快ならしむるは其吾人の神經末端を刺戟して延て全神經系統に強健振興の作用を及ぼすを以てなり。されば強風荒ます波浪穩なるの日、小舟を舩して沖合に漂遊し、擅に此新鮮なる海氣を呼吸するは亦實に神經質者再生の一途たるべきものなり。頃來鎌府片瀬の海邊、順磨明石の浦邊、一帯身神軟弱者の療養處となり、此處に幾多高莊なる療養院をすら見るに至りたれども海上遙に陸を離れ、海氣に包まれ塵菌に染まず、所謂眞個純潔なる理想的領區に於て、未だ何等療養所の設あ

るを聞かず、若し夫れ一人茲に着意して船上療養の備をなし、以て神經質者の治療に資するものあらば、洵に、是れ此の如き病者に對する至大の惠澤たるべきものなり。

(二) 山氣療法乃至山氣療法附溪氣療法

山氣療法の特効は固より特別なる其山氣に求むべしと雖も、吾人は其他猶ほ一二有力なる山地の治療を認むるものなれば、今此段に於ては都て山氣氣候一般の神經質に及ぶ影響を序述せんとす。

山氣氣候の秀て、特に勝れたるはレウキの報せし如く、
一、氣壓の低き爲、其空氣は稀薄に、隨て其含まるゝ所の酸素の貧少なること。

二、氣温の一般に低く、殊に山陰に於て甚だ低く、夜に入りて其一段に低きこと、

三、空氣の水蒸氣含量屢變動し且其變動の甚だ急劇なるより特に著き空氣の乾燥を致すこと、

四、局處風及び強勢なる一般風の吹き越す結果、空氣の運動の殊に強甚なること(此現象は特に夏に於て其冬よりも甚きを見る)、

五、強き太陽光線及び太陽熱線の久く注ぐこと、

六、蒸散作用の盛に行はるゝこと、

七、空氣の清澄にして純潔無菌、而してオゾン、陽電氣の含量抵地に

優ること、

等の諸點に存す。

山地氣候には正に右の如き絶對的長處あり、而して其人心人體に及ぶ

作用に關してはツンツ、レウキ、ミユレル、カスバリノ諸氏彙に既に精

細なる調査を遂げて之を世に公にせり、今左に其要約を掲げん。

山氣の稀薄にして隨て酸素含量の貧弱なるが爲、骨髓に於ける赤血球

構成の能大に進み、爲に自ら一般血財の豊富を致す。此現象は年若き人

々に於て殊に其著きものあるを見る。

新陳代謝は其働の個人性相異に連て盛否甚だ區々なれども、之を概す

るに山地に於ては一人の此處に作業すると否とを問はず總じて其作用の高めらるゝを見る。然も中高の山地に於ては其未だ働能の外に出ることなしと雖とも只山高二千九百迷突以上に達する時は、先づ消化機轉の爲に障礙を受くるより物質損失の隨て甚大なるに至るを見る。年若く體健なる一人にして中高の山地に至り猶ほ此處に適度の運動、適度の踏歩を試る時は蛋白質の増殖は期して待つべきものなり。山地氣候は呼吸を促進し心悸を高め、血行をして旺ならしめ、進んで皮膚の働を優勢ならしむるものなり。

要するに山地氣候は常に強勢適切なる刺戟を放ちて廣く人體最重の諸器關を振興し、以て之を活潑なる官能に導くものなり。

而して山地療法の利は猶以上のみにて盡ざるなり、ツンツか紹介せし如く強き日光の働も其一なり。人大方の知るが如く、一人あり終日差す日の光強き山地に留るや、其直射されたる局部は更なり、延ては全身一面焼が如く刺すが如く且一種堪え難き痛痒の感さへ加はり、夜もすがら

安く眠る能はざるが常なり。然も一面一體の筋肉群に亘り此際特有なる一快感即ち其緊張弛脱の感とも云ふべき一感覺の發呈せらるゝものなり。蓋し此種の快感は輕微なる電撃即ち爲に何等の纖維性痙攣乃至運動をも惹起せざる程度の電撃に由り吾人が容易く自験し得る所なり。總じて山地に滞在するもの若くは山地を踏むものは夜間通常良眠を貪る能はず、然も翌朝拂牀後更に倦怠の感なきものなり、是れ亦人のよく知る所なるべし。吾人平地に起臥するもの、一夜其眠の不十分なることあるや、翌朝牀を拂ふも何となく頭重の感あり倦怠の氣味あり、進んで日常の業務を手にするの張なきが例なり。然るに山に住むもの乃至は山を登るもの草葉を褥とし木の根に枕し、其眠り固より安からず其夢固より堅からず眞に思慮なく其一夜を明しつゝ、然も翌朝何等倦怠の風もなく、剩へ元氣旺盛、感色爽麗、益其歩を進め、愈其所業を加ふるが如き即其示標なり。

進んで自然美の治力も亦輕視すべからず、人事と隔り、世情と遠かり、

朝暮清風を招いて明月と語り、超然仙區の人となる、其治験や見るべきなり。況んや日々就し終へし種々行動の成果を顧み、端なく曩日無爲の時を思ひ、益自信自負の心を強うするもの、實に悔るべからざる自家精神療法の一端たるべきなり。

山地の高さは中高なるを以て適度なりとせらる、即ち海拔千尺以上二千尺の處を撰ぶべきなり。高さも亦其人によりて各別なる適應度の定めらるべく、時ありては其六千尺に達せしめ得ることさへあり、但し六千尺以上はすべての場合に於て禁忌すべきものと知るべし。

猶ほ山地療法の施行に際し心得べき二三あり、

- 一、從來不眠を訴へつゝあるものは絶對的之を山地に導くべからず。
- 二、人をして海拔千尺以上の地に至らしめんには、是より常に進むるに漸を以てすべし、一躍して高地に導くは甚だ宜しからず。
- 三、平素登山跋嶺に習はざるもの、突然海拔千五百尺以上の地に至り其當初著き蛋白質の減少を來すことあるも是れ決して驚き騒ぐに及ば

ざるものなり、何となれば此減少は寧ろ亞ぎ來る其増殖の前徴たるべきものなればなり。

之を括するに神經質者に對し山地は右の如き卓効を示すものなり、只夫れ茲に注意すべきことあり、患者にして山地に在ること既に匝週、然も猶ほ全く此處に慣るゝ能はず、心悸充進依然として盛に、眩暈あり、胸血襲ひ、且連夜更に眠る能はず、殊に刺戟性の愈増進するが如き徴ある時、之を直に山下に導くの一事はなり。

溪間の空氣の時に神經質に特效あるも亦忘るべからず。四圍高峯を以て取り巻かれたる一廓溪間の空氣は、冬籠り春の始に於ては却て神經質者に害あり、蓋し初春山上の殘雪猶ほ未だ全く溶け去らざるの時、附近の空氣は、爲に甚だ冷却せられ、隨て其重さ亦溪間溫和なる空氣の重さに勝り、茲に山上の冷氣は高山特有の氣質を帯びて自ら山下溪間に沈降し以て界限一廓を充すに至るが故なり。而して春去り夏過ぎ秋九月の半ばより其十一月の始に至るの間は、溪谷一圓更に右の如き高山空氣を含ま

ざるが爲、春季と一轉して卓果を神經質者に及ぼすものなり。斯くして山地療養處の治験は押しなべて其山の姿、其地の形になど敢て多く關することなしと雖ども、只前述の理由より最寄に高峯聳ゆるの地は春季を限り神經質者の決して留るべからざる所なり。

(三) 氣浴療法

氣浴療法の実施は患者をして新鮮なる空氣中に起臥せしむるにあり、故に臥牀若くば坐床を蔭ある外氣中に置き、患者は乃ち脱衣して此上に起臥すべきなり、但し外氣の温度にして低きに過ぎ、身に冷氣を覺ゆること甚き時は患者は脱衣のまゝ、外氣中を逍遙すべきなり。氣浴の時間は歳時によりて長短一様なるべからず、又始より長からしむべからず、漸を以て之を延長すべし。氣浴は冬時より之を始むべからず、冬時は從來行ひ居しものと雖ども其入浴時を短縮して五分乃至十分に留め、且入浴後直に着衣して急ぎ適宜の運動をなし、以て其身を溫暖ならしむるに努むべし。而して夏時は氣浴に對する最適時にして氣浴を開始するも亦將

に此時に於てすべきものなり。蓋し氣温の既に攝氏十五度なる時は假令裸體氣中に起臥するも決して冷感を感じゆるものにあらずして、薄衣を引き掛け其中にあるの時却て身に一種凄冽の感を感じゆるものなり。夏時に於ける氣浴時間は之を相當に延長して可なり。一時間二時間乃至數時間に亘るも決して害なし。氣温適度なる時はよし數時間の久き裸體氣中に在るも更に凄冷を覺ゆることなく、隨て風邪を得るの恐など一向是なきものなり。殊に此際陰霧を通じて殊に微なる日光の射込み、徐に患者の身邊を照すは日氣相埃ち以て其治果を倍蓰ならしむるものなれば、氣浴の裝置をなすもの又茲に心を用ゆべきなり。然も直射光線の浴ぐ一身に浴みんは固より避くべきものなり。右の如く光氣並び用ゐらるゝもの、人之を光氣浴と呼び其一段神經質に効あるは吾人の實驗に乏しからざる所なり。殊に其苦悶状態に卓効あるは驚くべく、一人苦悶に憫むもの、脱衣行て此光氣浴に投するや、煩はしかりし苦悶も立に去り、心氣一變忽ち爽快の狀に入ること稀ならずと聞く。故に神經質にして特に苦悶を

主徴とするものは宜く毎日此光氣療法を用ゐ、然も其時間は相當に長からしむべく、即ち一時間乃至二三時間に及ばしむべきものなり。衰弱甚しく日々身を外圍に運ぶ能はざるものに對しては室内ながら臥牀を成るべく端近く伸べ患者をして脱衣其上に臥さしむべし。而して都て氣浴は毎食直後に於て之を取らしむるを可しとす。渠の終夜寢室の窓を開いて臥すもの、亦一種此氣浴に屬するものなり、夜もすがら呼吸する新鮮無量の空氣、其神經系統に良効を及すや期すべきなり、然れども開窓臥眠に慣れざるもの、一時に其多くを披くは宜からず、先づ細く一方の窓を透し、然も臥牀は十分是と隔りたる所に敷くべし、或は隣室の窓を排し置き、是と臥室との間を少く透し置くも可なり。總じて窓は上窓を開くにあり、下窓を開くも通氣の効甚だ多からざればなり。日本風家屋に於ては各室の間若くは檐側と簷裏との間に欄間あり、此欄間こそ眞に究竟なる通氣の設にして、吾人は甚此風を喜ぶものなり。此風の家屋に於ては先或は臥室直外一角の欄間を開き、併せて

臥室の障子を排し置くも可なるべく、或は隣室の雨戸を排し置き、而して、臥室と其隣室との間なる欄間を開くも可なるべし。窓若くば外部欄間を開くに當り聊か注意すべきことあり、相對する二方を同時に開くべからず、外氣の直流通過するの恐あればなり、常に一角のみを開かば通じ來し外氣は入つて此處に滞留し、以て悉く患者の呼吸に用立つものなり、猶ほ直接枕上の窓若くば欄間を開き、通氣の入つて直に頭上に當るは避くべき一事なり。患者にして愈此開窓就褥に慣れば、吾人は愈廣く其窓、其欄間を開かしむべきなり。蓋し此療法は慣るゝに連れ益患者に愛せらるゝものにして、遂には窓を明けざれば安く眠る能はざるに至るもの多き程なり。本法も亦夏期は其最も適示の時にして如何に開窓をして多からしむるも決して風邪に罹るの恐などなきものなり。只冬時に於ては殊によく肩袷を巻き、猶ほ身體一面よく之を被ふて眠らしむる様注意せざるべからず。

神經質者にして身體強健なるものは夏時其日々を外氣中に暮すを以て

最も善しとす。殊に綠蔭濃き薄き處、是れ種々の神經質者に對する無上の自然療養處たり。予は殊に松蔭、日影疎なるの地、啾啾風歌ふの下、之を誠に比ひなき吾が神經質者療養の巷なりと信するものなり。只此の如きの境人をして又聊か寂寥の感あらしむるものなれば、抑鬱性、悲哀性の患者に對しては茂樹濃緑の蔭、進めて却て効あるもの、如し。

以上種々の空氣療法に序て吾人は以下二三の類似浴法を附録せん。蒸氣浴法。全身蒸氣浴法は通常神經質者の治療に用ゐられず、只足部乃至脚部の蒸氣浴は當該部の常に冷却する神經質者に愛用せらる。

光線浴法及び熱氣浴法。二者は只中毒性の原因を有する神經質者のみに用ゐらる。

日光浴法。日光浴とは一人裸體となりて直射日光線内に浴するを云ふ、但頭部は此際直接日光に觸れざる様一定遮蔽の蔭に保たるゝを要するものなり。猶輕裝して日光線内に平臥し單り其頭部をのみ蔭らしむる一法もあり。要するに日光浴は一般神經性狀態に對しては聊か勸むべきもの

なりと雖ども若し夫れ神經性苦悶に對しては其決して應用さるべきものに
ならず、日光線は兎角苦悶を強からしむるものなればなり。

四、電氣療法

電氣療法の効果は二途より來る、一は刺戟、他は推感、刺戟は電氣其
もの、及ぼす所、推感は壯大華麗なる電氣治療器械の及ぼす所なり。
電氣療法に亦數種あり、先づ全身華拉泥電流療法を述べん。電流は平
均流にして強度は恰も感じ得て快適なるを度とすべし、其強きは良しか
らず。始より全身に及ぼさずして一部に起し、漸進一週間にして全身に
及ぼさしむべし。導子は大なる可なり、而して一方は滑車仕掛となし、
輻々一體全面を輻行し得る様になし、他方は極を海綿中に没し、通ずる
所の電流をして最も弱からしむ。此極又時に刷毛の形となすも妨なし、
只金屬製の刷毛に限り之を避くべし。本法の利は吾人が治療の要素とす
る所の刺戟を常に隨處に施與し得にあり。神經性知覺異常及び神經性知

覺脱失の場合を除くの外、繰返しても此種の電流は必ず常に極弱ならし
むべし。猶ほ神經質なる女性電話技手、及び電信技手に對しては斷然電
氣療法を施す勿れ、何とをれば彼等は既に斯る器械を見るさへ病の重る
を覺ゆるものなればなり。

治療電氣中最も一人に適弱快柔なるものは佛蘭克林電氣一名靜電氣な
り、故に吾人は今左に其應用二三を紹介す。

高張力靜電氣酒浴法。患者を孤獨胡床上に坐せしめ、先づ頭上約十仙
迷突高處迄濕海綿を齎す、但し本裝置の一端は此海綿内に潜むものと知
るべし。斯くて件の海綿は頭上注ぐ所の電雨の放線狀束放電閃光をなさ
ずして涼快身に爽なる様固より適宜高下せしめらるべきものとす。

本法は頭痛を訴ふる貧血患者に用ゐられて効あり、而して其管に推感
作用のみにあらざるもの、如し、況んや推感性なる多くの他の患者に對
しては常に卓効あり。

放線導子放射法。名の示す如く放線導子を以て漸次全身を放射するも

の、固より此際と雖ども閃光の直接人體に及ばず、然も涼快なる電風の颯然身に吹く様常に導子を其宜き所に保つべし。此法は殊に神経性神経痛に効あり、其常該患部の撞に放射せらるゝを以てなり。

静電氣空氣浴法。一人絶縁椅子に凭り兩足を陽極と連る金屬板上に載す。此際陰極は地に通じ若くば連續せず。入浴時間一回五分乃至十分。一切患者に手を觸るべからず。

電氣は猶ほ水の媒介により所謂電氣水浴として應用せらる。而して吾が神経質に對しては通常溫度攝氏三十六度乃至三十四度の全身浴用ゐらる。電流は弱きを可とす、強電流決して送らるべからず、之を加減する爲、着實なる見張人常に必要なり。入浴時間は十分乃至十四分、而して以上ならしむべからず。電氣水浴は衰憊せる患者を復活し、抑鬱せる病者を興發し、頭痛を治し且腰痛を去る。猶ほ種々の神経精神痛に有効なり、電流は此際瓦爾華尼電流(平流電流)を撰ぶべく、強度は普通三ミリアムペール、高々五ミリアムペール、陰極を痛ある神経根部に點し、持續五分乃至七分ならしむべし。

茲に一種溫度刺戟を病める小局部に與ふるに甚だ便益なる一器あり、ヒルシマンの加温電氣壓抵器と云ふ、構造簡單にして効能然も見るべきものあり、神経性關節痛に効あり、眞に斯界の進歩を標榜する一品たり。

五、 マッサージ

マッサージ亦一種の器械的療法なり、電氣療法之如く、水治療法之如く、マッサージも均く一定の刺戟により生體の代謝機能を促進する一段なり。マッサージの適示は一般に全身の衰憊甚しき時に於て存す、而して患者のヒステリ性なる時は此治療特に顯著なり。猶神經性知覺異常、神經性疼痛及び神経痛にも殊効あり、且所謂肩の凝り乃至背部の凝り、此等は是に依りて威な容易く緩散す。神経質の治療上マッサージは此の如く必要なり、然れども其單り以て神経質を治するの能に至りては固より未しなり。

マッサージの將に施さるゝや、患者は脱衣し、裸體となりて牀上に坐し或は横はる、術者ワゼリンを取り之を少く其將に按摩せんと欲する體部に塗り、乃ち按摩し又は揉捏し、前よりし又後よりし、行ふこと十分乃至二十分、術者の技巧妙なる時は塗られたるワゼリン茲に至りて全く肌を滑む、技若し拙なる時は則ち然らず、ワゼリン遂に膚を透らず、かくてそは直に拭去らるべく、或は入浴洗滌せらるべし。

マッサージの已に施さるゝや肌膚は柔滑となり、弾力性となり、蒸發作用能且高められ、筋肉引張り血行強めらる。而して血行茲に強めらるゝが故に生體各器官の榮養及び神経系統の榮養並び増進せらる。殊に揉捏法の作用能たる、適に排泄さるべくして然も逡巡組織内に停滞する廢質を分解し、溶解し、之を逐次排泄に齎すにあり。而して所謂病素と稱せられ疾病の始素たるもの、多くは此廢質に屬す、廢質滯り病素を爲し、疾病自ら生ずる、是れ果して何に依て防止せらるゝや、曰く、單り代謝機能に俟つあるのみ、代謝機能なるものよく此廢質を分解し、溶解し、之

を逐次排泄に齎すものなればなり。至此觀之揉捏法は即代謝機能の原始なり、原働なり、疾病治法の一として其重きをなすや斯の如し。

神経質者に應用せらるゝマッサージは概ね全身マッサージなり、然れども一舉にして技を全身に及ぼすは宜しからず、各一部より起りて少漸以て進むべし。猶神經性主訴の異なるに従ひて部分性マッサージの特に必要なる場合もあり、消化器に施されて消化作用の促進、食思の増進由りて來さるゝことあり。神經性苦悶に際しては強甚なる背部叩打法應用せられ、其然も發作性に襲來せる時は所謂一種の按摩法施され、即ち人工呼吸の由て盛に行はるゝが爲、發作の頓に抑止せらるゝことあり、但此場合に於ては發作消退の後、術者新に深く双拳を患者の腹部に突き込み、突き極まりて軋ち之を放ち、放ちて且突き又且放ち、此の如くすること頻回、爲に患者の漸く鎮靜安穩の狀に入るを見て始めて止むなり。

マッサージを業とするもの、其手腕の熟練なるべきは勿論、一方亦理論上相當の智識を有し、人體の解剖及び生理の大要を會得し居らずんば

あるべからず。又術者は患者と同性なるを可とす、其異性なる時は生理上解剖上兩々自ら趣の異なるものあり、施術の上にて聊か惑ふ所あるべければなり。

近來マッサージュの術技大に開け來り、屹々として手以て是に當るの、勞多くして効少なきものなりとなされ、先づ小仕掛なる器械マッサージュ出で、頓て發動機によりて運轉せらるゝ大仕掛となり、結構壯麗にして善美茲に盡され、一には一轉幾十の患者一舉にして施術せらるゝの便あり、二には其結構の美、又侮るべからざる推感作用を患者に及ぼすものあり、斯くして療養所、病院等に於ては今や漸く此の如き器械マッサージュの費用せらるゝに至りぬ。殊に其身體各部乃至内臟諸器官に至る迄、隨時隨處に諸技諸術の施及され得るものに至りては吾人其仕掛の甚だ巧妙なるに驚くなり。心臟は則ち特に心臟マッサージュの設によりて施術せられ、腹部は腹部、皮膚は皮膚、而して筋肉亦各束隨意に作動さるゝを得るもの是なり。さは云へ一人の術者にして技に熟し業に堪へ、人體の

構造、生體生活の理又彼に明に、而して誠心精意事に従ふの時に於ては吾人は其寧ろ盲技盲術力遍く然も心なき渠れ諸器械の爲す所に勝ること常に遙なるを信するものなり。

六、作業遊戯及體操附二本氏腹式

呼吸並腹壓増進法

(一) 作業

人若し吾人が疾病を治するに作業を以てすと云ふを聞かば彼や必ず吾人の言を異とすべし、然れども吾人は實際作業を以て疾病を治療しつゝあるものなり。誠に吾が神経質者の如きは之を只拱手無爲の境に置く、其却て疾病に害あるものにして之を寧ろ適當なる作業に導く、其甚だ疾病を軽減するものなればなり。さは云へ吾人の所謂作業と稱するもの、渠れ過劇なる工業、極苦なる農業の如きものを是れ云ふにあらず、只夫れ一種陽氣快適なる全身の運動にして、以てよく疲憊せる神経全系を振

與復活するに足るものを云ふ。而して然も此種の作業は平素勞働の衝に當らざる都人士、又は常に精神作業にのみ従事せるものに對し特に適示せらるゝものなり。以下其數種を列記すべし。

散步。散步は最も簡單なる治療的一作業なり、既に治療的一作業なる以上、其用量は亦將に醫家の其都度之處方すべきものなり、即ち行ふもの之を敢て甚だ少からしむべからず、而して之を又決して多きに過さしむべからず。モッソ云はずや身體上の過勞は又直に其影響を精神上に波及するものなりと、況んや其精神の既に體弱せるの時に於てをや、然らば則ち吾人は果して如何にして所謂適量散歩なるものを定め得んか、曰く行ふものは是に由て、陶適の感を生じ、然も更に過勞の氣味なきの程度即是なり。蓋し神經性状態の重きものに對しては吾人は特に右適量に關し常に十二分の注意を拂はざるべからざるなり。先づ疾病重篤なる當初に於ては前記の量をして亦甚だ之を少からしめ、而して症状の輕快と共に之を漸く多からしむべきなり。所謂症狀輕快の程度と散歩量とは常に

之を並行ならしむべきものなり。

散歩の人心人體に及ぶ影響たるや常に輕微なるものにあらず。前述の如く散歩は一種の作業なり、人體一部の筋肉はよりて一定の働をなす。斯くて筋肉働の産物として便ち相當の刺戟自ら生ず、而して此刺戟の達する所、即新陳代謝機轉は起る、起りて然も此際其常に旺盛なるものなり。只怨む茲に新陳代謝の起る所、精神機轉發動の個處にあらずして實に其他の體部なるを。

若し夫れ散歩第二の効能に至りては即ち新鮮なる空氣の治力なり。吾人が逍遙する所の外圍の空氣は云ふ迄もなく吾人居室の空氣に比しては遙に新鮮にして且清淨なり、清淨にして新鮮なる空氣は又云ふ迄もなく常に多量の酸素を含む、而して此酸素こそ入つて有力なる一刺戟となり、疲れたる吾人の神經を復活し、沈鬱せる吾人の精神を振興するの怪力を有するものなれ。

散歩の第三効は其全く吾人の心上に作用する所の者なり。朝來繁冗な

る業務に携はるもの乃至終日鬱結せる憂悶に絆さるゝもの、此の如きもの二度闕を踏んで外氣の裡に現るれば、秀麗日に新なる大自然は歡喜以て彼を迎ひ端容以て彼に接し、云はずして流石に萬言の慰籍を漏し、動かさずしかすがに萬姿の欸待を現じ、彼や宛も樂土に遊ぶが如く、茲に自ら心機一轉して煩勞をも憂悶をも暫時は全然打忘るゝに至るが常なり。是れ即ち散步の精神的治力なり。

散歩は實に右の如き治力を有す、而して之を理解知悉して然る後之を行ふもの甚だ稀に、多くは只歩行するを以て散歩の目的なりと偏解し、日々同一區間を同一歩調を以て往來し、以て散歩の定量を盡したるものと思爲し、甚しきに至りては室内一定の距離を行き戻り、等く散歩の日課を終りたるものとなすものさへあり。右の如きは未だ散歩の眞價を悟らざるもの爲す所なれば、吾人は此の如き患者に對しては特に散歩の人體人心に及ぶ殊効を闡明し、飽迄之を理解せしむるに力めずんばあるべからず。

そも散歩の目的たる、歸する所は一定の刺戟を吾人の身神に與るにあり、而して此刺戟や其性質に於て正に神經質者が保持する所の所謂當該疾病の原因的刺戟に反對なるものなり、是れ散歩のよく神經質を治するに足る所以なり。散歩は一日二回之を午前午後に於いて取らしむべく、其時間の長短は疾病の状況、及び各個性の様々なるによりて異なり、常に一規以て律すべからず。只大體に於て患者の猶ほ未だ散歩に慣れざる時は一回通常半時間となし、慣るゝに従ひて延長遂に二時間乃至三時間に至らしむべきなり。而して實地各例に於ては吾人は毎回必ず一定の散歩時間を規りて之を患者に授け患者をして決して任意之を伸縮せざらしむべきものなり。兎角患者は種々の口實を設けて巧に是が實行を避けんとするの傾あるものなれば、吾人は患者の狀態の許す限り、晴日は固より、雨の日、風の日、天氣の如何を問はず、只一規の下必ず之を勵行せしむべきなり。元と散歩の主効は神經精神の復活にありと云ふと雖ども、又其一面、一身健康の基礎を成すものなれば、吾人がしかく督勵以

て之を患者に授くるは即ち彼が健康を助長するの道にして亦敢て徒事に終らざるなり。況んや其平素無檢束なる患者をして漸く規律的生活状態に慣れしむるの一助となるものなるに於てをや。

園藝及耕耘。是れフレールの特に勸奨する所にして吾人亦甚是に賛するものなり。而して其効能は一に新鮮なる空氣を呼吸すること、二に全身の筋肉汎く十分なる運動をなすこと、三に成し果されたる業跡を顧み、さすがに自家作業力の小なからざるを思ひ、隨て自信自負の念を強うすること、四に猶ほ自然美の偉大なる治力を吾人の心神に及ぼすこと等是なり。

冬時取るべき作業としてフレールは彫刻、指物又は製本を勸む、然れども此等はそれ／＼本職なる指南者を要するものにして事少く大袈裟たるものなり。

猶鋸木、制木、打禾を勸め養鶏養魚を推す人もあり。鋸木、制木及び打禾は初め一日三回十五分宛となし、後一日三回一時間宛に上らしめ得、

養鶏養魚は時を定め難し、只適宜之を行ふべし。

手藝殊に編物、袋物、造花、押繪等を撰び爲すべし。且茶摘、若菜摘乃至採果も亦婦人に適する作業なり。

總て作業は始より多きを課すべからず、常に少よりして漸次多に及ばしむべし。且散歩、園藝以外の各作業は之を妄に患者に強ゆべからず、其之を撰ぶや、先づ患者の意を問ひ、なるべく其好む所に向はしむべし。

(二) 遊 戲

遊戯は神経質者に對する精神的一嗜好品なり。故に常に殊効を現すべき者にあらずと雖ども又甚だ陶適愉樂なる一治劑なり。されば大方の神経質者は吾人が指定する所の遊戯に向ひ、勇んで常に是に赴き、以て其快適なる治験に沐せずんばあるべからず。

遊戯に無數の種類あり、一々擧ぐるに堪ゆべからず、只最も有り觸たる數種を茲に紹介すべし。

テニス、球戲は甚だ佳なり。端艇、自轉車は多きに過べからず、殊に

競走、競漕は斷じて之を避くべし。又舟行激流を廻り、怒濤を渡り、車行急坂を攀づるは甚だ害あり、故に廢すべし。若し夫れ輕舟を浮べて風月を賞し、狹筏に棹差して花溪を過ぐるものに至りては正に是れ自然の懷に眠りて其鍾愛を擅にするもの、治験の大小敢て評價の限にあらざる。騎馬を賞し、氷滑を讀するものあれども二者共に容易く人を過勞に遣るものなれば身體強健なる神經質者の他、先づ之を避くるを安全なりとす。游泳亦然り、殊に之を冷水中に於てする時は新陳代謝は高まれども物質損失亦隨て旺なるに至るを以て此戲遂に一般に勸むべからざるものなり。春櫻陵に遊んで夏鶉飼を樂み、秋は茸狩り又紅葉狩り、冬日閑居して圍碁將碁を弄する、皆是れ用ゐて治法の一助たらしむべし。猶釣を垂れて世俗を遠かり、山に樵りて仙洞に遊ぶ、聊か雅に過ぐれども又時に應用すべし。

吾邦古來行れたる遊山、野遊、春興蜜の如く盡きざるの裡、糸遊を追ふて其長き日を遊び暮す、眞に無上の散法なり。且歌骨牌あり、且ト

ランプあり、亦強ちに捨つべからざる遊戯なり。以上諸種咸な蓋一遊の嬉戲に過ぎずと雖ども然も適戯を其中に抜いて之を適處に應用するは正に吾人醫家の秘技に屬するものなれば、用ふるもの只敢て妄に之を撰ぶをなさず、宜く先づ吾人の處方に從ひて常に其適用の處を誤るなくんば庶幾ば望外の効果亦自ら至らん。

(三) 體操

作業の如く遊戯の如く、體操亦醫の處方により適法の適部に應用せられなば其効果や決して侮るべからざるものなり。體操に種類あり、其最も簡單なるものは柔軟體操なり、今其式の一班を擧ぐれば左の如し。

頭部體操

- 一、(イ)頭を前方に曲げ。 (ロ)之を後方に曲ぐ。
- 二、(イ)頭を右方に曲げ。 (ロ)之を左方に曲ぐ。
- 三、(イ)頭を右方に旋し。 (ロ)之を左方に旋す。

臂部體操

- 一、(イ)臂を伸して前方に出し、左右に開き、上方に扛げ、(ロ)伸したるまゝ之を舊位に下す。
- 二、右左(兩)臂を伸して前(後)より成るべく大圓形を畫く如く旋回す。
- 三、右左(兩)前臂を平に屈す。
- 四、(イ)右左(兩)臂を水平に側方に伸し、(ロ)之を曲ぐ。
- 五、右左(兩)前臂の位置に於て右左(兩)手を旋す。
- 六、(イ)兩臂を側方に平舉し、(ロ)前方に於て右を上にして兩臂を交叉し(掌を下方に向く)、(ハ)兩臂を側方に復し、(ニ)兩臂を股側に平垂す。
- 七、(イ)臂を屈することなく兩臂を側方より頭上に活潑に直舉して兩掌を合撃し、(ロ)掌を外方に翻し、臂を屈することなく兩臂を側面肩の水平に活潑に下し(掌を下にす)、(ハ)臂を屈することなく活潑に之を下垂して兩掌を外股に附し、(ニ)兩臂を側面肩の水平に活潑に復す(掌を上にする)

脚部體操

- 一、(イ)踵を上げ、(ロ)之を下す。
- 二、(イ)兩膝を屈し、(腿と脛とは直角を爲し、上體を眞直に保持す)、(ロ)之を伸す。
- 三、(イ)右左脚を前方に水平に上げ、脛を垂直にし、(ロ)之を伸して舊位に復す。

復す。

- 四、(イ)右左脛を後方に水平に上げ、(ロ)之を伸して舊位に復す。
- 五、左(右)の手を以て身を椅子に支へ、右左脚にて側方に環を畫く。
- 六、右左脚を斜に前上方に伸し、其位置に於て足部を左右に曲ぐ。

軀幹部體操

- 一、兩手を腕骨上に取り、
 - (一) (イ)體を前方に屈し、(ロ)之を後方に屈す。
 - (二) (イ)體を右側に曲げ、(ロ)之を左側に曲ぐ。
 - (三) (イ)體を右方に旋し、(ロ)之を左方に旋す。
- 二、兩臂を頭上に直舉し、

- (一) (イ)體を前方に屈し、(ロ)之を後方に屈す。
- (二) (イ)體を右側に曲げ、(ロ)之を左側に曲ぐ。
- (三) (イ)體を右方に旋し、(ロ)之を左方に旋す。
- 三、右左臂を側方に水平に伸し、體を同側に曲げ、同方手指尖を同方足に觸れしむ。
- 四、右左臂を前方に水平に伸し、體を前方に屈し、同時に同方足尖を高め、同方手指尖に觸れしむ。
- 五、仰臥位を取り、兩臂を頭上に直伸し、兩手を拱し、兩足を一固定所に衝張り、下肢は其儘となし、上體だけ起上る。
- 右は各部とも都て醫の指定を待ちて始めて執行さるべく、而して之を指定する所の醫家は固より先づ常に此等の術に精通し居るを要するものなり。

齊く柔軟體操に屬し特に治療的に編成されたる猶ほ一種あり、ドクトルシユレーベルの創意に係る。吾人は其治療上甚だ適當なる術式なるを

信するものなれば藉りて又之を左に移すことゝなしぬ。

ドクトルシユレーベル氏治療體操式目錄

- (179) 法 治
- 一、頭首を廻旋すること 十 回
 - 二、頭首を左右に轉向すること 六 回
 - 三、肘を後方に牽退すること 八 回
 - 四、兩手を後方に結ぶこと 八 回
 - 五、膝を屈し上體を下すこと 十 回
 - 六、足を屈伸すること 二十 回
 - 七、兩臂を前方に伸すこと 十 回
 - 八、兩臂を左右に伸すこと 十 回
 - 九、兩臂を上方に直舉すること 四 回
 - 十、手の8字形運動 二十 回
 - 十一、指を折り、指を開くこと 十二 回
 - 十二、胴を廻旋すること 八 回

- 十三、脚を廻旋すること 四回
- 十四、臂を前後に投ぐること 二十回
- 十五、脚を前後に投ぐること 十五回
- 十六、脚を左右に投ぐること 十五回
- 十七、鋸木運動 十回
- 十八、草刈運動 八回
- 十九、手を摩すること 四十回
- 二十、膝を前方に扛擧すること 四回
- 二十一、活歩疾行 百武

右シローベル氏治療體操は一日一回其悉く行ひ果さるべきものにして、然も常に食前に於てせらるべく、且運動は總て緩徐になされ、殊に頭部運動は最も徐に行はるべきものとす。

右の他ペーテル、リングによりて創成されたる瑞典式治療體操なるものもあり。操器を以て、或は是なくして行はれ、二操に分たる、一は自

働的、他は他働的なり。他働的なるは別に抵抗體操と云はる、醫の一方彼が運動に抵抗を興ふるを以てなり。自働的なるは讀んで字の如し。本操は頭痛に對し、便秘に對し、逆上に對し、足部冷厥に對し、都て甚だ有効なりと云はる。但し各部に各適應せる運動の科せらるべきは勿論にして固より同一運動のすべての症狀に効あるべきにあらざるなり。

體操は各式とも天氣の許す限り外氣中に於て行はるべし、さりとして風雨劇く、外圍に留り難き時は室内温度を外氣温と等し、空氣の流通を十分になし、而して其内に於て操行するの止を得ざるに出づ。體操を行ふにはよし冬時と雖ども必ず悉く窓戸を押し開くべし、強壯なる人々は裸體となりて之を行ふも可なり。さはれ裸體操行のこと固より治療體操に對する絶對的必要條件にあらず。但し服装は常に極めて之を輕うし、之を適宜緩やかに仕立て、各部の運動に何等の障りをも、些の窮屈をも覺えざる様なさずんばあるべからず。

一日中體操に最も適當なる時刻は毎朝起上後朝食迄の間なりとせらる。

若し一人一日右以上猶ほ幾量かの體操を要する時は晝食前又は晩食前に於て重ねて之を取るも可なり、但し茲に注意すべき一事あり、各食事と體操との間、必ず一定の休息時間を挟むべきこと即ち是なり。

體操は常に兵式的嚴格に行はるべし。而して體操の目的は其運動をして一齊の筋肉、殊に日常作業に與からざる筋部に迄之を及ぼしめ、由て周く各處に適度の刺激を給し、以て全身の代謝機能を振興するにあり。斯くて若し其十分に遂行せらるゝ時は、爾來發育の一般に不完にして緩ゆる、奇麗に云はれ花車なる五體の筋肉、頓て緊張の度を増し、延ては一身の體格亦自ら逞きに至るべし。蓋し體操の効果は實に一體の練精、筋力の増進のみに止るものにあらざるなり、若し夫れ一人願みて彼が體格の整調、筋力の増強を見、其意隨て張り其心自ら強むに至りては其且一人を心的氣的に復活興起し得るや固より疑ふべからず、而して是れ實に吾人終局の望にして吾人が奨励せる右體操の眞價や亦茲に極まれるものと謂つべきなり。

猶ほ巴里なるシャルコーの所謂測力器なるものあり、用ゐて固より筋力の増殖を圖るべしと雖ども器の又よく一人力量の増減を其表板に指示するものなるより一面且自信自負の念を強うするに資せらるゝものなり。

吾邦固有なる劍術、柔術、抜劍、薙刀、弓術等患者の狀態によりては亦た甚だ進むべき一種の體操なり。室内機に架して山を登るもの、所謂登山機なるもあり、亞鈴を以て、槌子を以て一定の操式に従ひ執行せらるゝ所謂亞鈴體操、槌子體操なるもあり。吾人は加之終にツァンデルの機械體操道具立なるものを紹介するを快とす。具は以て騎るべく、以て漕ぐべし、一人假馬に跨らば便ち疾驅、恰も駿馬に鞭つが如く、一人假艇に楫取らば便ち疾走、急流を棹差し下るが如く、眞に快哉喜ぶべき一治療具なり。

(四) 二木氏の所謂氣海丹田練氣法即腹式

呼吸並腹壓増進法

二木氏の言の如く横隔膜及び腹壁の弛緩症は眞に吾が神経質をも招致

し得るものなり。されば吾人神經質を治せんと欲するもの文意を此處に留め、宜く先づ是が豫防の法を講じ、然も不幸既に其偶發來せるの場合に於ては固より直に其治療に急がずんばあるべからず。而して氏の所謂腹式呼吸並に腹壓増進法なるもの、吾人亦其適法至術なるを信するものなれば便ち藉りて之を左に録し、以て一般神經質治者の一資に充てんとす。

甲、正則法(健康者若くは輕度及び中等度の横隔膜並に腹壁弛緩症に向ひて應用せらるゝもの)。之を腹式呼吸法と腹壓固定法とに區別す。

(一) 腹式呼吸法。

(イ) 姿勢。邦人には坐位を以て最も可とすれども若し坐位に堪へざるものなる時は椅子を用ふるも可なり。練習者は先づ脊柱を直立し努めて肩を後に引き、胸部を開き腹部を前方に突き出して腰腹部の凡ての筋肉及び關節を固定し、胸部及び肩胛部の關節及び筋肉は十分に緩解せしめ、頭部は正直となし前後左右に傾かざらしむ。左右の上肢は垂下し、手を

大腿上に安置し、手掌を上方に向け、五指は自然に伸びたるまゝにて左右を交互に組み合せ、眼目鎖口し且つ呼吸法に注意を集中する爲に精神を安靜にし、妄念を抑制すべし。

(ロ) 呼吸式。呼吸は安靜緩徐且つ深長に行ふを法とす。先づ呼吸より始め胸廓及び腹部を緊縮して成るべく多量の空氣を排除し、呼吸の終に一少時間呼吸を静止し、次で徐々に吸氣に移る。吸氣時には努めて胸部及び腹部を同時に開張し、殊に下腹部を膨脹するを度とす而して終りに一少時間呼吸を静止し然る後徐々に呼氣に移る。

(ハ) 速度。呼氣、呼氣、及び静止期を以て一呼吸とし、一分間四乃至六呼吸の割合を以て行ふを適度とす。されど此度は熟練、不熟練、輕症、重症に應じて斟酌せざるべからず。要するに習熟するに従ひて漸次呼吸を延長するを可とす。而して練習時間外に於ては速度並に深淺は自然に放任し、只胸腹式呼吸胸部と腹部を同時に擴張並に收縮せしむを守ることには注意すべし。

(ニ) 持續。練習一回の持續は十五分乃至三十分即ち六十乃至百二十呼吸とす。而して練習を終りたるときは靜に坐を起ちて庭園の逍遙を試むべし。一日の練習度數は二回乃至三回なりとす。

(ホ) 腹壓。深呼吸練習時には漸次腹壓の増加を圖り、吸氣には腹壁の稍抵抗しつゝ膨隆するやうに腹壁を緊張し、呼氣には横隔膜の稍抵抗しつゝ上昇するやうに腹壁を收縮すべし。而して緊張と抵抗とによりて起る腹壓は練習するに従ひて漸次其度を高め、後には指頭を以て下腹を強壓するも容易に凹陥せざるに至るべし。

呼吸操法中は神身共に十分に安靜なるを要す。殊に腰腹部は確に固定し胸部、肩胛部は胸を張りいだしたるまゝ、成るべくくつろぐやうにすべし。

呼吸式は吸氣時に腹部並に胸部を隆起せしめ呼氣時には之を壓縮せしむ。此方式は決して相轉換せざる様注意するを要す。横隔膜及び腹壁弛緩症の強度の者にありては深呼吸時に往々此式轉換し吸氣時に腹部凹陥

し、呼氣時に腹部膨隆することあり、之を轉換式又は逆式と稱し、強度の弛緩症には此式によりて呼吸操法を練習せしむる要あることあり。

呼氣の際腹壓を失はざらん爲に聲門を狭くして呼氣の流出を制壓し、一種の氣軋音を發し、これによりて胸壓を増し頭部及び顔面の靜脈の歸流を妨ぐるとあり。斯の如きことは初心者之練習法に適はざるを以て努めて之を避け、成るべく喉頭咽頭等を開放すべし。但し場合によりては害なきのみならず却て之を必要とすることあり。

呼吸練習時間以外には呼吸の深さは自然的なるべしと雖ども日常注意して正式呼吸を持續し行住坐臥に不斷練習をなし、以て其良習慣を養ふを要す。

(二) 腹壓固定法。

此法は腹式呼吸法を練習したる者に應用し、努めて横隔膜及び腹壁を緊張し腹部内臓を其間に固定するにあり。此際の呼吸は胸腹式ならしめ、自然に任せ敢て深呼吸なるを要せず、而して腹壓は緩めずして長時之を

持續せざるべからず。四肢を勞役する時、たとへば坂路を攀ぢ上る時、疾走、擊劍、柔道等の場合並に腦力精神等を使用する場合にこの法を用ふるときは久し其勞に堪ふことを得べし。

腹壓固定時に聲門を鎖ぢて勉めて努力する如きことは或る場合の外は通常之を爲すべからず。胸壓は成るべく低減し、單に横隔膜、腹壁及び會陰筋を緊張して腹壓を高むるを要す、其壓は漸次に強くし行住坐臥持續的に其習慣性を養ふべし。

乙、變則法或逆式腹呼吸(主として強度の弛緩症患者に應用せらるる者。横隔膜及び腹壓の弛緩症の強度のものにありては正式の腹式呼吸を營むことを得ずして轉換式を營むものなればこれには特異の操法を用ゐざるべからず。

(一) 腹帶法。先づ患者に適度の腹帶を施し、吸氣の後聲門を閉鎖せしめ、次に胸腔を收縮して漸次に努力せしむ。然るときは高まりたる胸壓によりて横隔膜を壓下し、これが爲に腹壓充進し、腹壁は腹帶に緊縛せ

らるゝに至る而して此状態を一息間持續し、再び聲門を開きて深呼吸を營むべし。

右の法は一日二三回、一回五六呼吸宛反復せしむ。而して習熟するに従ひて漸次回数を増さしめ且つ聲門を閉鎖せずして下腹を緊張することに努めしめ、次に漸次腹帶を弛め、後には腹帶なくして操作せしめ遂に聲門を閉鎖せずしてよく腹壓を加へ得るに至り始めて正式法によらしむべし。

(二) 腹帶坐禮法。此法は前の法の如くにして吸氣時に聲門を閉鎖し、胸腹壓を加へたる後聲門を開き、上體を前方に屈し、手を牀上につけ、日本坐禮の式を採らせつゝ深呼吸を營ましめ、次で徐々に上體を起して深呼吸に移り、再び聲門を緊扼して徐々に努力し、斯の如くにして數回反復せしむ。

此變則法は腹壓と共に胸壓をも高めざるべからざる短所ありてこれが爲に頭部の鬱血を起す嫌なきにあらず。故に醫師の監視のもとに之を行